

資料編

1. 二地域居住等の実践者ヒアリング結果(一覧表)

ライフスタイル	事例1 ・農業研修・自然体験学習 ・移住(長年(家畜)・京都(大学)から福井県若狭町)	事例2 ・地域ボランティア活動(子供キャンプ支援) ・二地域居住(東京都足立区と福井県高岡市)	事例3 ・複数拠点の店舗経営及び講習会 ・二地域居住(群馬県高岡市(自宅)と北軽井沢)	事例4 ・ガラス工芸作家 ・移住(東京都から長野県武川村)・週回は必ず東京へ	事例5 ・起業(特産品開発) ・二地域居住(鳥取県江津市と福岡県福岡市)	事例6 ・起業(スローフード関連事業) ・移住(東京都練馬区から沖縄県豊見城市)					
基本属性	・男性(20代後半)／会社員 ・家族:妻及び娘と同居 ・現住所:福井県若狭町 ・出身地:大阪(大学は京都)	・女性(20代前半)／会社員 ・家族:両親及び弟と同居 ・現住所:東京都足立区 ・出身地:東京都足立区	・女性(50代)／会社社長 ・家族:夫及び長男(独立別居) ・現住所:群馬県高岡市 ・出身地:群馬県高岡市	・男性(50代後半)／会社社長 ・家族(妻50代後半:ガラス工芸のデザイナー)＋ペット(老盲導犬＋ネコ) ・現住所:山梨県北巨摩郡武川村 ・出身地:東京都	・男性(50代前半)／会社経営 ・家族:妻(50代後半)及び息子家族と同居 ・現住所:鳥取県江津市 ・出身地:福岡県福岡市	・男性(50代前半)／会社社長、NPO法人代表者 ・家族:妻と同居 ・現住所:沖縄県豊見城市 ・出身地:東京都練馬区					
始めたきっかけ・経緯	・当初は教師を目指しており、大学時代のサークルは、ワンダーフォーゲル部と子供たちをキャンプや野外活動に連れて行く活動をしていました。様々な活動を通して、子供たちの教育における自然体験・農業の重要性を見出した。ゆえに子供たちに農業体験を通じた教育をしていきたいと思った。	・大学に入る前から群馬県でボランティアとして子供キャンプの手伝いをして。大学入学後、ゼミの活動の一環として福井県高岡市を訪れたのがきっかけ。高岡市の小学生を対象とした自然体験活動の企画・実施に携わって、行ったり来たりするようになった。	・避暑地北軽井沢に30年前から関心があったが当時は売り物件がなくあきらめたがバブル崩壊後に安価な物件を見て購入。 ・その販売条件が店舗経営による地元との交流であった。 ・5年前から店舗は閉じて、講習会を開催している。	・若い頃からアウトドア志向があり、地方に住みたいという目標があった。 ・現在の居住地の募集当初、作り手の村が自給自足農地であったため、探し回りを決めた。 ・地域の村舎と離れた場所にあるが、森に囲まれた自然を満喫できる場所、気に入ったので、東京から	・若い頃から泡盛と沖縄の伝統的な食文化、沖縄音楽(島唄)に興味があった。 ・花物産に傾倒しており、沖縄に来ると食欲が良くなるため、沖縄にぜひ住みたい気持ちがあった。 ・本当の住み暮らしては、思っていたような地方都市に住みだらなかった。	①家族の同意 ②農業を初歩から学び、将来的に農業を継承する立場になるためのノウハウ習得	①現地とのネットワークを含めた組織づくり	①一	①時期の決断	①妻の同意	①東京で仕事をもち、沖縄には適当な仕事があったのですぐに移住できなかった(東京と沖縄の二地域居住はすぐに始めたが、移住するまでには10年かかった)。
ライフスタイルの内容	・現在の農業生産法人で農業体験や自然体験をしたい人向けのプログラム企画・運営を実施している。 ・様々な事業は、自然・新規就農ができるように、基本的な生活スタイル、経営手法、販売イベントを通じた販売ノウハウ・販路拓の仕組みなどを教えている。	・平日は東京で会社勤務しながら、福井県内のスタッフと連携して、子供キャンプ活動を企画。夏・冬・春・秋などの休日に福井を訪れ、子供キャンプ活動を主に実施している。そのほか、地産地消を活用した特産品開発をしている。	・年数回、パッチワークキルトの講座を開催している。 ・その講習会には、全国のファンや地元住民が参加している。	・「山を見て仕事をしたい」という思いがきっかけ。夫婦揃って30代後半に移住先を決定した。 ・元々仕事の発注元は東京が多かったが、二地域東京の一極集中に陥らないうちに、東京へ出掛ける頻度が高まった。	・地域の伝統的な資源である桑をベースとした産品(桑糸など)の生産加工。販売を行う会社を立ち上げて経営している。	・沖縄の食文化、農業に関するライフスタイルがそのまま移住してきている。 ・沖縄移住等の情報発信を行う雑誌出版のほか、沖縄・東京スーパー加工会・販売を行う会社を通じて、沖縄の食文化の体験、啓蒙活動(学校等の食育)、情報発信、生産者支援、農産物開発の調査、販売支援等を行っている。					
ハードル(課題I)	③夫は新規就農で独立して農業をしていくが、収入面で農業だけの暮らしは厳しい。	②活動運営費用の捻出 ③勤務先での休暇取得	②適当な物件探し ③住所を自給自足だけで、有料となる道路がある。住所を自給自足だけで、水道・光熱費の基本料が高くなる。	③地域及び不動産探し ④家賃・購入 ⑤地域への移住者の選別 ⑥大雪対策や病気への対応	②最初の仮住まい探し ③金銭的な問題から仕事を得る必要が急務となるため様々な情報収集(桑に関する成分分析など含む)やイベントを通じて販路開拓など	②東京との航空運賃費用が最大のネックである。 ③公共交通機関が少ない車中心の社会(桑に関する成分分析など含む)やイベントを通じて販路開拓など					
地域の人との関係	・もともと農業だけでなく、地元の人たちと交流することを目指してきた。今後は、さらなる交流を促して、自立して持続できる仕組みを構築し、移住先を支える組織にまで成長させたい。	・若者や子供が集うことに関して、地域の人たちに喜んでもらっている。	・地元住民、別荘客、観光客等、多様な人々との交流を目的とした店舗経営や講習会であったため、非常に楽しく暮らせる関係が築けた。	・20年前の移住時は村の集会所が対面的だった。現在は当時よりかなり開放的になってきた。(若い人からは村の雰囲気を壊してくれる期待感もあった。)自分ではできないことはハッキリとできないことが重要。	・地域の方々が桑を生産したものを加工、販売する。自分の経営やマーケティングの知識と地元の生産技術をお互いに確立関係がうまくいっている。	・泡盛を媒介にしていたので、地域の人々とはすぐに打ち解けた。					
ハードル(課題II)	④地域の人たちの一員になるためのプロセス実現	④まだまだ一時的な交流活動に過ぎない	④一	⑦地域と一定の距離感を持った方がいい	⑤地域の方々の協力(桑の生産)	⑥前編のような都市部であっても地味・血縁等をベースにしたコミュニティのつながりが強く、なかなか移住者はコミュニティに入り込めない。					
今後の課題	・現在の農業生産法人は、町・企業・地元住民が出資した第3セクターで、町からの補助金を受けている。今後、さらなる売上を伸ばして、自立して持続できる仕組みを構築し、移住先を支える組織にまで成長させたい。	・(行政依存せず)民間レベルでお互いに相互利用できるコミュニティの仕組みづくりを目指す。 ・活動の告知を積極的にしていきたい。	・年齢を重ねるにつれ、今後の二地域居住のありかたを再考する必要があると感じている。夫やパートナーの時間とも相談し、今後を検討する。	・若い世代の間で、アウトドア志向が盛んになってきた。夫婦揃って自然に田舎に対する興味を持っていくことになり、問題だと感じている。 ・物に、お父さんやお母さん世代の体験が少なくなってきており、自然に楽しむ体験を積み重ねて欲しい。	・会社の手入れになる若手リーダー人材探し	・公的年金だけでは生活できないので、老後の経済的保証をどうするか心配。 ・自分移住の目的であった食料品が再販等のおおきくを受け取りきれない可能性がある。そうなる前に移住先で継続できるかどうかは分からない。					

ライフスタイル	事例7 ・起業(長年) ・二地域居住(春～秋・福島県北塩原村、冬:千葉県柏市)	事例8 ・持続可能な農業の実践 ・二地域居住(東京都と沖縄県那覇市)	事例9 ・まちづくりコンサルタント ・移住(東京都から長野県茅野市)	事例10 ・地産地消 ・二地域居住(東京都と長野県茅野市)	事例11 ・企業CSRと趣味活動(森林保)	事例12 ・起業(農家の手伝い) ・二地域居住(広島県広島市と広島県尾道市瀬戸戸田(実家))
基本属性	・男性(60代前半)／そば店店主 ・家族:妻、子1人 ・現住所:千葉県柏市(春～秋) 福島県北塩原村(冬) ・出身地:千葉県	・男性(60代前半)／会社社長 ・家族:夫婦二人(妻は東京に在住)、独立した子供2人 ・現住所:沖縄県那覇市 ・出身地:千葉県	・男性(40代後半)／組合事務 ・家族:妻、3人、父、母と同居 ・現住所:長野県茅野市 ・出身地:東京都三鷹市	・女性(30代)／主婦 ・家族:夫(30代)と娘3人 ・現住所:東京都八王子市 ・出身地:東京都八王子市	・男性(40代前半)／公務員 ・家族:妻(50代前半)及び長女、長女 ・現住所:群馬県前橋市(東京に単身赴任) ・出身地:群馬県前橋市	・男性(40代前半)／公務員 ・家族:妻及び長女と同居 ・現住所:広島県広島市(高校まで) ・出身地:愛媛県松山市(高校まで) ・妻の実家は広島市
始めたきっかけ・経緯	・元々、浜島釣りが趣味で、休みの度に東北地方を中心に釣りに行っていた。3年前に1泊2日の釣行をきっかけに、自然と自給自足(野菜・果物)を楽しむことに興味を持ち、古民家物件を探し始めた。 ・福島県会津地方での人脈を内々に、7年前に地元の人が紹介された。	・妻がもともと沖縄好きだった。自分は別に沖縄というこだわりはなく、農業ができる良いところを探していたが、19年前に初めて沖縄に来て、従来の移住先候補として考えたように、古民家物件を探し始めた。 ・都内で「パーマカルチャー」(持続可能な農業方式)の講習会を受けて以来、沖縄で実践したいと思った。	・三鷹の自宅(土地)が駅前の商業施設とまちづくり研究会を開設。現在、研究会を茅野まちづくり研究所として法人化し、その事業を始める。 ・自宅を「スモールビルド」で、自宅づくりと薪ストーブの導入に時間をとらえている。それ以外では、できるだけ子供たちと一緒に過ごせるようにしている。	・長女のアトピーがひどく夏は特に悪化する。長女が幼稚園年少までは伊豆の親戚の家に夏休みの期間中だけ行った。 ・その親戚がなくなり伊豆の家に行けなくなったため、新しい拠点を探した。	・子供が生まれた30年ほど前から、その時々でライフスタイルに合わせて(子供の教育や生活)の生産活動を実施してきた。 ・また、趣味で森林に関わるのが好きで、特に「森林は、天目の大火災が起きた後の再生を促す。次は自然の色が濃い「村」に住みたい)。	・自分の父親も、仕事をしていた愛媛県松山市から、同じように瀬戸戸田へ移住した農家の手伝いをする。今は引退して瀬戸戸田へ越して祖父と同居している(松山の拠点は引き払った)。長女として、そのライフスタイルをそのまま受け継いだ。
ハードル(課題I)	①時期の決断	②妻の同意 ③決断のきっかけ	①心理的なブレイク	②二地域居住先との条件確認:費用と貸し出し期間/自宅からの距離/立地/住居タイプ	①一	①一(強いと言え、実家の近くに就職すること)
ライフスタイルの内容	・春～秋は、そば屋を営みながら、田舎暮らしを満喫している。冬は、千葉の自宅に帰るが、雪下ろしのために、3年前に1泊2日の釣行をきっかけに、自然と自給自足(野菜・果物)を楽しむことに興味を持ち、古民家物件を探し始めた。 ・福島県会津地方での人脈を内々に、7年前に地元の人が紹介された。	・農ある暮らしを那覇市郊外の農園を借りて実践しながら、地味農業を営んでいく。現在は、研究会による集まるのをめざしている(農園に携わるのは週に4～5回)。 ・沖縄の伝統食文化の保護や普及、食料自給の向上を活動目的としたNPO法人代表者となり、当該法人の活動にも協力している。	・茅野市役所に相談しながら若手職人を借りて実践しながら、地味農業を営んでいく。現在は、研究会による集まるのをめざしている(農園に携わるのは週に4～5回)。 ・自宅を「スモールビルド」で、自宅づくりと薪ストーブの導入に時間をとらえている。それ以外では、できるだけ子供たちと一緒に過ごせるようにしている。	・子供の夏休み期間だけの二地域居住である。 ・自宅は基本的に日常生活と変わらない。娘は皮膚科治療のため、温泉に入る。 ・今は自らは東京勤務で八王子から通勤し、週末のみ茅野市へやってくる。夫が来た時は子供たちを連れて外出したり遊んだりする。	・東京に単身赴任して、関東地方複数地域の森林保全・管理活動をしている。週末は前橋市の自宅に戻るが、通勤に慣れている(1日10～15時間)。 ・変化することで、柔軟性を持って対応できるようなっている(3年後には職能から移動する予定。次は自然の色が濃い「村」に住みたい)。	・瀬戸戸田に2ヶ月に1回程度、連休を使って往來(広島市月夜を除く平均2泊3日)。往來は自家用車で片道2時間程度。 ・先祖伝来ののみかん(一部リモコン)農家の後継者の手伝いに行っている。実家の後継者がいない(同じように農家の後継者がいない)ので、実家に生活している。
ハードル(課題II)	④古民家物件探し ④古民家改修のコスト ④そば打ち技術の修得 ④売上げ	④妻の往來(妻は二地域居住) ④住宅探し ④車の免許と車の取得 ④農園探し	②まちづくり研究会、まちづくり研究所の活動に協力してくれる人材集め、人数不足	②夫の時間確保の問題 ②週末の周辺旅行による経済的な負担	①一	②自分の父親も、仕事をしていた愛媛県松山市から、同じように瀬戸戸田へ移住した農家の手伝いをする。今は引退して瀬戸戸田へ越して祖父と同居している(松山の拠点は引き払った)。長女として、そのライフスタイルをそのまま受け継いだ。
地域の人との関係	・県民集落に暮らしているため、地域のイベント等には積極的に協力し、音響取りをいたことと地域で、自分たちで早く受け入れた。 ・現在では、村長がしの政策の助言を得るために、村長が訪れ、話合う仲になっている。	・那覇市内での近所の人々との付き合いはない。近所付き合いが密な地域だけに、いずれは接点を持たなければならぬと思っている。	・子供もいるため、地域と前向きに関わっている。祭りや卒園、病弱仲間などに参加。 ・地域の人(特に若い人)たちには、移住者が地域を変えてくれることへの期待感がある。	・基本的には別荘地内で過ごすため、地域の人との関わりはない。	・月1回程度の訪問で自分の趣味活動に費やす時間が殆どなので、地域の人と深い関係を構築するのは難しいが、広い関わりは生まれている。	・もともと実家なので、地域の人々との関係を築くことに苦しくない。
ハードル(課題III)	⑦地域住民との暮らしの上での交流	⑤一(今のところ交流なし、いずれ交流が必要)	③仕事関係とは違う住民たちとの交流づくり ③収入(入金地)への入区金を請求され戸惑いがあった	④一	⑤地域の方々との交流関係の構築	⑥一
今後の課題	・集落の高齢化に伴い地域コミュニティの活力がどんどん失われていく。 ・長年地元で暮らしているが、前回のことが、売りモノになるという発想が出ていない。(温泉が川にそのまま流れている等)	・特になんか、真剣にこれまで考えていないというが実情。 ・沖縄での「農ある暮らし」をどう実現しているか。	・移住先を確保するに費やされたため、条件合う物件・物件があれば購入したい。	・ハードルだけでなく、毎年などの指導者育成が必要	・ハードルだけでなく、毎年などの指導者育成が必要	・グリーンツーリズムが流行しているが、若い人が新規就農者として育てる仕組みづくりの方が重要。 ・そのライフスタイルが二地域居住であるなら、変わらずに二地域居住の両立が求められる。そのライフスタイルの支援を講じていく必要がある。

二地域居住等の実践者ヒアリング結果（一覧表）

ライフスタイル	事例13 ・婚活（実家のメンテナンス） ・二地域居住（大阪府と沖縄県福地村）	事例14 ・ご当地グルメ巡り（ワイン・ツーリー） ・リピーター	事例15 ・趣味活動（ダイビング） ・二地域居住（東京都と高知県幡豆郡大月町）	事例16 ・のみびり田舎暮らし（田舎と田舎の二地域居住） ・二地域居住（熊本県阿蘇と熊本県天草（住民自治協））	事例17 ・クラインガルテン（農業） ・二地域居住（東京都と茨城県空間市）	事例18 ・クラインガルテン（農業） ・二地域居住（東京都と茨城県空間市）	
基本属性	・男性（50代後半）／会社役員、NPO法人理事 ・家族：夫婦2人及び子供と同居 ・現住所：大阪府吹田市 ・出身地：大阪府吹田市	・男性（30代後半）／会社員 ・妻（30代前半） ・現住所：東京都中野区 ・出身地：夫・東京都、妻・神奈川県	・男性（30代後半）／会社員 ・家族：妻（60代前半）及び母と同居、子供3人は独立 ・出身地：東京都杉並区	・男性（60代後半）／無職（元大学職員） ・家族：妻（60代前半）及び母と同居、子供3人は独立 ・出身地：夫は福岡県、妻は岐阜県	・男性（50代後半）／会社員 ・家族：夫婦のみ、独立した子が1人 ・現住所：東京都新宿区 ・出身地：東京都新宿区	・男性（60代前半）／無職 ・家族：夫婦のみ（独立した子が3人） ・現住所：東京都足立区 ・出身地：東京都足立区	
始めたきっかけ・経緯	・自分自身は大阪に移住した沖縄人の二世（三男）である。 ・実家のある今帰仁村に帰って住んでいた父親の死により、実家が空き家になったので、そのメンテナンスと、自分自身の沖縄移住の気持ちがあるため二地域居住している（毎月沖縄に週末等を活用して3日程度滞在）	・最初は、ワイン好きな仲間と誘われて訪問した。	・友人の紹介で連れて行ってもらったこと	・もともと旅行好きだったが、普通の旅行では満足できず、コンドミニアム型施設を利用して旅先の生活を楽しむようになった。 ・はじめは千葉・神奈川を中心に探していたが、インターネットで空間クラインガルテンを知り3年間滞りたことで、田舎暮らしが楽しくなった。	・退職したら農作業をしたいと思っていたが、既に退職した方々がほとんど農作業をしているのを見て切迫感を覚えた。 ・はじめは千葉・神奈川を中心に探していたが、インターネットで空間クラインガルテンを見つけ、一度見学に来た時に気に入ったので申し込んだ。	・退職後、畑仕事をしたいと思っていた。 ・空間クラインガルテンのことはテレビで見て知っており、温泉めぐりをしていたがたまにまで通るが、雰囲気良かったので退職の1年前に申し込んだ。	
ハードル（課題Ⅰ）	①-	①地域を往來するきっかけ	①-	①家族の同意 ②空間の同意 ③条件の良い地域との出会い	①妻の同意 ②時期の決断 ③条件の良い地域との出会い	①妻の同意 ②時期の決断 ③条件の良い地域との出会い	
ライフスタイルの内容	・大阪にいるときは会社役員として仕事をしている。 ・沖縄にいるときは、所属しているNPOの事業の手伝いや、今帰仁村の家に帰って家の手入れをしている。	・ワイナリー巡りをレポートして楽しむ。（勝野地区に約30軒のワイナリーが軒を並ぶ。と言っても、各ワイナリーは、徒歩で20～30分程度ずつ掛る。ワイナリー併設のカフェで試飲して楽しむ。）	・平日は東京で会社勤め、毎年、春から秋までの期間、高知県でダイビング・シュノーケリングを楽しむ。 ・ダイビングスポットからは離れていて、高野（土佐清水市内）のオーナ一家とシュノーケリングや食事、温泉などで交流を行っている。	・4月～11月初旬は阿蘇、11月中旬～3月は大塚に住む。その間は車を使ってのんびり別荘暮らし。その間は車を使っては住民を置く阿蘇である。 ・二地域居住によるコスト増は電気、ガスの基本料金くらいであり、年金額内内で充分生活している。母親の体調は良かったし、横浜の長男が孫を連れて帰る機会も増えた。	・空間クラインガルテンに来て1年目だが、先生に教えてもらいながら農作業をしている。 ・余暇の時間を、あるもので工夫して過ごす日々を満喫している。	・主に農業を道としていく。	
ハードル（課題Ⅱ）	②大阪と沖縄の往復交通費が高いこと、毎月2回以上の負担である。 ③現在の会社を退職した後に、自分自身で二地域居住したいが家族が移住できるかが課題。	②公共交通機関が不便	②ダイビングスポットが高知県内で空室から最もアクセスが難しくなるため、往復に非常に多くの時間を費やしてしまっている。 ③ネットの活用にあたって、持っているペントを預ける必要がある。	②空間の同意 ③今の二地域居住のライフスタイル（阿蘇の生活を、大塚の家を価値、名古屋の家を売却、阿蘇の家を購入、家具等の運搬や購入）を確立するまでのプロセス	②-	②夫婦ともに農業に関して素人で、何から始めるか分からない。	
地域の人の関係	・もともと今帰仁村の人間なので、祖父や親戚は地元の人間に知られており、溶け込むに課題はない。	・ワイナリーの女将や店員さん達とテイストングをしながら会話する。	・当該地を紹介してくれた友人が、既に多様な地元住民（宿のオーナー、学生、市民、漁業者、飲食店経営者など）と懇意にしていたため、そのネットワークで厚意を受けている。	・別荘ではなく、集落にある住宅に住んで、（特に阿蘇では）積極的に地域活動に参加している。ただし、近所付き合いや助け合いのレベルが予想を遥かに超えている。	・講師（地元の人）に農業を教わってもらっている。 ・その他、クラインガルテンの中で会えば挨拶をする程度の交流があった。	・講師（地元の人）に農業を教わってもらっている。 ・その他、クラインガルテンの中で会えば挨拶をする程度の交流があった。	
ハードル（課題Ⅲ）	①-（Uターンの場合はあまり問題にならない）	①-（ワイナリー関係者との交流のみ）	①紹介してくれた知人が同行しないこと、地元との交流機会が減ること。	④地域の方々との交流関係の構築	③今後、地元の人との交流を深めたいと考えている。	③地域の人ともっと話したいが方言が分からない。	
今後の課題	・将来的に沖縄に移住することになった場合、年金だけでは不安、やはり、沖縄でも生活費を確保するために起業したいという考えに起るが、自分自身で二地域居住中に食品関係の会社を立ち上げたが現在は休眠状態。	・勝野でのワイナリーの存続（地元産ブドウの減少、温暖化の影響、ブドウ農家の高齢化に伴う廃業）	・本宅不在時のペットの扱いについて	・公共交通機関が不便なので車は必須、車を手放すことができない。 ・移住（神奈川から長野県茅野市）の二地域居住になる可能性も	・今はクラインガルテンに来て1年目のため何をしても楽しいが、ゆとりが出たこのクラインガルテンを出て次にどうするかを考えた。	・空間クラインガルテンでは5年ほどしか契約更新できないため、次の準備を深さなければならぬ。	

二地域居住等の実践者ヒアリング結果（一覧表）

ライフスタイル	事例19 ・クラインガルテン（陶芸・絵画） ・二地域居住（千葉県鎌ヶ谷市と茨城県空間市）	事例20 ・趣味活動（スタンドグラスの展示・販売） ・二地域居住（千葉県と長野県茅野市）	事例21 ・趣味活動（登山） ・二地域居住（神奈川県と山梨県北杜市）	事例22 ・のみびり別荘暮らし ・移住（神奈川県から長野県茅野市）	事例23 ・農業体験型テーマパークへの多頻度リピーター ・子供の自然教育
基本属性	・男性（60代前半）／無職 ・家族：妻及び母と同居、独立した子が2人 ・現住所：千葉県鎌ヶ谷市 ・出身地：千葉県鎌ヶ谷市	・女性（60代前半）／主婦（スタンドグラスは趣味活動の一環） ・家族：夫婦及び娘1人、孫2人と同居 ・現住所：千葉県浦安市 ・出身地：千葉県鎌ヶ谷市	・男性（50代前半）／国家公務員 ・家族：夫婦及び子供2人 ・現住所：神奈川県横浜市 ・出身地：横浜市	・女性（50代後半）／主婦 ・家族：夫（60代後半）は東京勤務の会社員（東京都の実家と茅野市の二地域居住）、娘1人は別居（神奈川県鎌倉市） ・現住所：長野県茅野市	・男性（40代前半）／会社員 ・家族：妻（30代後半）／パート、長女、長男、次男 ・現住所：茨城県鹿嶋市 ・出身地：茨・茨城県、妻・兵庫県
始めたきっかけ・経緯	・現在、介護が必要な母と同居しており、妻が思えばできる環境を求めている。 ・クラインガルテンという存在を知っており、たまに週末のゴルフ場に来た際にこっそり着たこと、男の料理教室の参加者が自分自身を引き入れてくれた、自ら申し込んだ。	・いつも使用する（会員種を有する）ゴルフ場をはじめ、20年以上前から当該地を毎年避暑等で利用しているため、別荘を購入するのを決めた。 ・スタンドグラスの展示・販売は浦安市で毎年1週間前か、別荘地で1週間前かから始める。	・先に登山を始めていた兄に誘われたこと	・広い、大きな家を希望していたことに加え、ペット（猫）にとって物理的に手放すのが難しいこと、地域社会との関係で精神的に手放すのが難しいことから移住を検討した。 ・インターネットで見つけた工務店の紹介から茅野市を訪れ、自然環境の良さ、土地の広さから、即決した。	・旅行雑誌で「モクモク手づくり」の企画を知り、子供達が楽しく遊べるような場所を持ったので、まず行ってみた。
ハードル（課題Ⅰ）	①条件の良い地域との出会い ②母の介護	①資金的に問題ないことの確認	①-	①移住しようという気持ちになるきっかけ ②移住先の地域性や慣習などを含めた地域情報の入手	①地域を往來するきっかけ
ライフスタイルの内容	・もともと絵画が趣味だったが、空間は陶芸が得意な方ということで陶芸を始めた。農作業はあまり好きではない。 ・妻は農作業にはまっぴらで、朝早くから夜遅くまで作業をしていることが多い。	・通常：週末（木曜夜又は金曜）に長野県、月曜に長野県で登山、長野県でゴルフ、先が長野県で野菜の調理、近隣へ嫁とドライブ、温泉、ピクニック等を行う。 ・住家（スタンドグラス）：夏に1週間程度、ホテルでスタンドグラスの展示・販売を企画、その前後1～2週間、住入、展示準備や後始末作業を行う。	・電気、水道、ガスなどのライフラインが整っていない登山者用の山小屋で生活する（朝起きて、沢へ水を汲みに行き、薪を割る、火を熾し、身の回りの仕事を済ませ、夜は1人下で読書をしたが、ラジオを聴いたり、酒を酌み交わしたりしている） ・地域の民宿である小屋の管理人の手伝いをする。	・夫は東京の会社に勤務（二地域居住）。自分は2～3回/月、藤沢市の娘のこころ行く。 ・基本的には健康的な生活を送っている。また、地外・地域内において、テーマで繋がる人間関係（コミュニティ）を作りたい。	・宿泊・日帰りとも、イベントへの参加が中心。毎季節のお祭り、収穫祭、トントン祭り、あるいは、キャンピングカーやオートカー等に積極的に参加している。 ・スタッフの親切や元氣さ、ヘルパーと一緒といった食料の安心感がリピーター利用上でのポイント
ハードル（課題Ⅱ）	③初心者から陶芸を始めるような仕組みが整っていない。 ④ゆめを求めて来たはずが、妻は農作業に一生懸命になるあまり、逆に空間にいる間の方がしづかくなってしまっている。	②生活用品や食料について、両方の居住地で不足・余剰するものが多く発生し、想定外の支出がある。 ③郵便物・宅急便、新聞などの処理 ④本宅（浦安市）の排水の水やり	②講師の確保が困難（現役時代に二地域居住を行うと住む社会では困難） ③日本の気候は高温多雨のため、二地域居住に適さない。 ④冬の生活対策	⑤移住先は山梨県で、移住後の生活環境（入会地）制度の説明と理解	④-（テーマパーク・スタッフとの交流のみ）
地域の人の関係	・講師（地元の人）に農業を教わってもらっている。	・新規の別荘地であり、リタイアして田舎生活を始めた人や別荘を建てた人が多く、生活環境や世帯の状況が近い人が多い。 ・近隣との関係は良好。自分たちより前から住んでいた方からは、家庭菜園等のノウハウや生活する上での知識や知恵等も提供してもらっている。	・山小屋という特殊な場所なので、特定の地元居住者（登山客など）以外との関係が薄い。	・地域と積極的な関わりを持つことはしない（必要がない）。移住者同士とのコミュニケーションは、相互のコミュニケーションは少ない。	・同ファームのイベントに数多く参加しているため、スタッフの人達も顔なじみ。他、お祭りでは、顔なじみの程度（以前のイベントで顔を合わせたことがあるなど分かる）、相互のコミュニケーションは少ない。
ハードル（課題Ⅲ）	⑤陶芸を学ぶために、今後、地元の人との交流を深めたいと考えている。	①-（別荘地は自由会もないことに加え、移動は地元の交通機関、別荘地以外の人との関係がない。）	①-（山小屋の管理を手伝っているため、地域の人と出会う機会）	⑤二地域居住者・移住者の財産区（入会地）制度の説明と理解	④-（テーマパーク・スタッフとの交流のみ）
今後の課題	・もっと気軽に陶芸を楽しみたい。	・体力的、精神的、いつまで二地域居住を続けるライフスタイルが継続できるのか、二地域間の移動がなくなった場合、二軒の住居をどのように整理していくか。	・日本人には排他的な性格があるので、地元住民も二地域居住者も共通の趣味や活動が必要。 ・二地域居住を解消するタイミングの見極めも必要。 ・留守が長くなること、両方の観点での地域づきあいが希薄になる傾向がある。	・財産区制度の今後の状況 ・既に残っている周辺土地の今後の土地利用と生活環境の状況	・家族間：子供が中学生以上になると、部活等時間的に厳しくなり、家族全員でという形では難しくなってきた。 ・ヘルパー：①食材に関して、安全性だけでなくもう少し値段を安くして欲しい。②子供が遊べる要素が少ないので、「遊びの要素」を入れた施設が欲しい。

2. 二地域居住等の実践者ヒアリング結果(個票)

事例1) 農業研修・自然体験学習

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】福井県若狭町の農業生産法人内の部屋
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 福井県若狭町／女性／20 代後半／会社員／夫及び娘(3 歳以下)と同居／大阪市
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 京都の大学卒業と同時に福井県若狭町に移住
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 サイクリングや山歩き(大学時代はワンダーフォーゲル部) 日常は、近所を訪問・おしゃべり、家の田んぼの手伝い、子供と観光地巡りなど
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 実家に戻るのは年間 3 週間ほど(お盆・正月に 1 週間ほど、その他日帰りなどで数回)
【二地域活動等の開始時期】 2004 年 4 月(大学卒業と同時)
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 子供好きで当初は教師を目指していた。その関係で手伝いに行っていた地元の塾では勉強だけでなく、自然体験等の野外活動も行っていた。大学でもサークル活動として子供たちをキャンプに連れて行ったりする野外活動支援をした。教育における色々な可能性を目指したいと考えていたところ、ある子供の行動変化に、教育における自然体験・農業の重要性を見出した。教育は農業であるべきと考え、まず自ら農業を知るために農業体験を含め勉強した。ゆくゆくは子供たちに農業体験を通じた教育をしていきたいと思った。 親は大学卒業と同時に先生になって帰ってくると思っていたので当初は大反対した。しかし、生き生きした娘の姿に最後は同意した。今はこれで良かったとってくれている。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 実家に近い場所であること(2 時間程度)。 農業が自分の理想のかたちでできること ①農業を初歩から教えてもらえること、将来は農業体験を提供する側になれることの双方が学べる場所であること＝研修制度がしっかりしていること ②農業するだけでなく、地元の人たちとの交流があって、地域の一員になれること＝この地域の人にな

る若者を本気で育成したいという姿勢がわかったこと

【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】

4年制大学の2年ごろから活動を始めて約2年。インターンシップ制度や新・農業人フェアなどを利用して全国の様々な施設(農業学校や実践塾、一般農家など)を訪問した。その行く先々で紹介をしてもらいながら全国10箇所程度を体験。

その結果、今の農業生産法人に研修生として参加。その後、4回行ったり来たりしたうえで、今の農業生産法人の社員となり、移住した。

【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】

研修生には奨励金(1年目5万円/月、2年目7万円/月)がもらえるのでこれで十分賄えた。

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

農業生産法人にて農業体験や自然体験をしたい方にプログラム企画・運営を実施している。自然体験学習は月1回、週末1泊2日を基本に実施。年間延べ2,000~3,000人日の参加がある。京都や大阪など関西を中心に、企業の余暇活動や小学校、中学校、保育所、塾、子ども会などがウチコミやレポートで参加している。

休日は家の田んぼや畑を手伝い、田舎暮らしを楽しんでいる。

研修事業では、研修生を受け入れて新規就農者として自立できるように支援している。今年の研修生は4人(茨城、京都、奈良から)だが、問合せは100件程度、書類選考して20~30人に面接、そのうち10人くらいが1週間体験滞在、こうして絞り込まれる。農業したいという思い、共同生活できるか、地元馴染めるか、地域のリーダーになり得るかなどを見る。募集はHPや関西の大学農学部への個別訪問、農業人フェアやインターンシップなどを通じて実施。

その結果、今までに脱落者(農業を辞めた人)はいない。これまで23人が卒業して17人が若狭町内に定住(うち13人が新規就農)。ここでは、自然に新規就農ができるように、基本的な生活スタイル、経営手法、月1回の販売イベントを通じた販売ノウハウ・販路開拓の仕方などを教えている。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

農業のみで暮らしていくのはかなり厳しい(収入面)。

地元法人と組んで大型化する人もいれば有機に特化して小さく経営する人もいる。米や花と複合経営する人もいる。農閑期は他地域の農業の収穫アルバイトや家庭教師のアルバイトをしている人もいる。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

夫は新規就農で独立して農業をしている。私はこの農業生産法人に社員として残り、給与を頂きながら安定収入を得る。

卒業生同士が協力するなどのつながりも出来てきた。お互いに機会を貸しあったり、一緒に特産品開発を検討したりする動きもある。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

行政との連携。

役場が卒業生への家(空き家)の斡旋をしてくれている。条件は、3ha以上の農地が集められること、機械がすぐ借りられること、親方さん(世話人)がいること。卒業生と親方さんのマッチングを役場が行い、お互いに合って確認している。嫌がる人もいるが、役場が仲介することで安心感がある。なかには研修期間中に勝手に親方さんを見つける人もいる。

今の会社の売上は5,000万円で町からの補助800万円を含む。建物の建設はすべて補助金による。しかし、第3セクター(有限会社)として、町、企業、地元住民が出資していて、自立化を目指している。そのための人材も揃いつつある。

行政と地元住民(の理解)と企業(の経営ノウハウ)がうまく組み合わさっている。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

地域の一員になることも研修のうちとし、地域活動への積極的な参加を進めている。この農業生産法人自身も地元住民をメンバーに加え、新しく来た人と地元住民をつなぐパイプ役の方も準備し、より地元で溶け込みやすい状態を提供している。

これまでの実績からも地元の理解が得られるようになってきている。この施設を建設するときには議会・地元の反対もあったと聞いている。役所も私たちの本気度合いを理解してくれている。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。自然の摂理に一喜一憂することもあるが、動物の中の“人”として生きているという実感がある。生きるためのものは自ら考え創り出す仕事、お金という価値ではない、心の充足を感じることができる仕事、自ら作りだしたものが生きる糧となる、やりがいのある仕事、そして、自然に囲まれた中で汗を流す仕事は最高である。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

もっとのんびりした暮らしを想像していたが、農業は農作業以外の事の方が多いように思う。集落の集まり、農地保全のための集まり・作業…など、自然相手ばかりではないのだと改めて知った。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

今まで暮らしてきた農村も大切にしながら、「都市と農村」双方が元気なる活動を持続可能な活動にすること。「持続可能」がキーポイントだと思う。

研修生が会社に残って会社を大きくしようとしている。販売力をアップして、卒業生を支える母体となるくらい事業を大きくしたい。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

「郷に入れば郷に従え」という言葉までではないが、地域の方の一員になろうと努力することは大切であ

る。今までその土地にいた方の暮らしも大切にしながら、自分たちのライフスタイルをつくっていくことが求められる。

新しいことばかりをはじめるとはならず、その土地の歴史・文化などを学び大切にしながらよりお互いを理解し新たな交流が生まれれば素敵な暮らしになるのではと考える。

(参考)かみなか農楽舎

かみなか農楽舎の目指すもの

本事業は、伊勢市からの若者の就業・定住を促進し、復活を遂げさせることと大きな目標としています。本公館を運営する農業生産法人は、地域での生産に挑戦していることももちろん、国内外から自立の夢を持つ活動のある若者を中心に編成され、これを通じて就農の促進も行っていきます。



現代の生活環境に合わせ、農業の楽しさを体験しながら、大空を駆け抜けるのが好きです。



施設概要

公館面積 / 4.2ha
 所在地 / 福井県三方上中郡若狭町本郷 (若狭町農村総合公園)
 コミュニティ棟 / 本館2階 / 547㎡
 施設管理棟 / 本館1階 / 385㎡
 多目的農業体験場 / 経路沿道 / 430㎡
 耕種田 / 兼 / 7.66㎡



福井県若狭町産業課

〒919-1502 福井県三方上中郡若狭町本郷20-1E
 TEL (0770) 62-1111 FAX (0770) 62-1049

農業生産法人 有限会社 かみなか農楽舎

〒919-1522 福井県三方上中郡若狭町本郷 (若狭町農村総合公園)
 TEL (0770) 62-2125 FAX (0770) 62-2124
 E-mail: wakasa@nousei-kaminaka.com
 http://www.nousei-kaminaka.com



若狭町農村総合公園

若狭鯖街道
 京は遠ても十八里
若狭町へ来ませんか!



土・水・緑に親しみながら夢を描き
 農業研修・体験学習を通して
 若狭町の豊かな自然と農業にふれませんか。

かみなか農楽舎

**自立をめざす
研修生を募集**

若狭町を舞台に都市と農村を結び
活力再生のネットワーク事業

農業・自然を通じ、
たくましく生きる力、
仲間と一緒に
生きる力を育もう!

事業内容

研修事業
農業を志す若者に対し半年、1年、2年コースの研修を行います。将来、若狭町への就職定住を支援します。

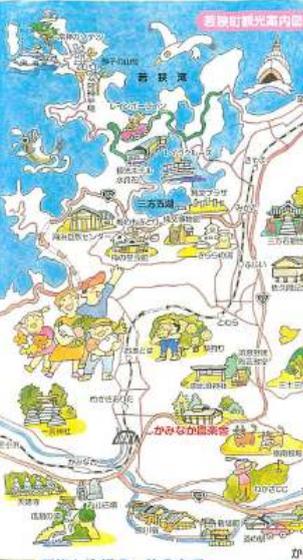
インターンシップ事業
1週間を通して1週間~1か月の農業就業体験の場とします。農業を志す若者・農業に興味のある若者・農業を通して社会を見つめたい学生と社会人の両方を繋ぎ入れる両口の広い実習コース。

体験学習事業

- 月1回、週末1泊2日を基本とした過労事業。農を中心に海、山も素材とした体験学習とし、大人も子供も楽しめるコースです。
- 保育園・小学校等の団体向けに、日帰り・宿泊体験学習コース。
- 専売・長寿体験の密着体験学習コース。
- 専攻で仲間と水耕・野菜づくり・加工の農業体験ができます。

農業生産事業
平成18年秋の自作から始め、順次、耕作面積を拡大しています。(平成18年37ヘクタール)

直販事業
朝市・直売所・出店販売、朝市消費合作社 (ネットワーク販売)



若狭町観光案内

かみなか農楽舎

研修と生活の一体の中で、農村・農業の可能性を築きましょう!
 就業・定住の研修は、町を歩いて研修生を育てる体制を用意しています。実践的なのは若狭町で農業技術を学びながら、農産物の加工、販売研修、体験学習の企業も行います。同時に地域を知り、振興に努めるか農楽舎生活を行います。

**自然体験学習
団体利用募集中!**
(平日利用も歓迎)

- 保育園・幼稚園・小中学校・高校・大学 自然環境ワークの活用・環境自然体験に。
- 自然の恵みを受けながらの生育に学ぶ体験型の教育です。
- 若狭の海、若狭町の場所の美しい自然のもとで、心も体もリフレッシュできます。
- 福井県内で2年や3年以上の小動物とのふれあい広場で、生きものにも親しめます。
- 漁獲物焼き、竹筒工。収穫き等自然の材料を使って、インドクランプにもチャレンジ。
- そば打ち、味噌づくり、餅つき〜など加工が楽しめます。

自然の持つ力、生き育む喜びを農業を通して伝えたい!

応援会員募集中! (会費無料)

- 自然・農業体験イベントのご案内、メールマガジンの配信をいたします。
- 家族や仲間と農の生活を体験しませんか。
- 体験期間は毎年4月から翌年の3月まで。
- 専売・専売介助員、収穫祭会員の皆さんで調理や加工を楽しまし、高付を誇り、職場研修、賞状も貰えます。
- 田植え、草取り、稲刈り、収穫祭の4大イベントは全員集合で盛り上がりましょう。週末はいつでもお越し下さい。

かみなか農楽舎の研修フロー「新規就農者の認定を受ける期間」



新規に始める人 → 1年次研修 → 認定農業者として自立 → 法人社員

研修生 → 担い手農家としての1年研修 → 新規就農者として自立

毎井田と若狭町の両候補地を活用して自立

(参考)かみなか農楽舎の研修施設



事例2)地域ボランティア活動(子供キャンプ支援)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】都内大学のゼミ室
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 東京都足立区／女性／20 代前半／会社員(システムエンジニア)2007.4～／両親及び弟と同居／東京都
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 福井県池田町
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 東京都内での団体(RICE)に関する活動など RICE: 日本大学法学部(社会学)の佐幸伸介准教授の「情報メディア社会論」ゼミのメンバーや福井大学、法政大学などの学生が任意に集まって設立した任意団体。組織や運営うんぬんに縛られず自由な活動ができるように法人化せず任意団体としている。ネットワーク型の組織とすることで、働きながらフレキシブルに関わるゆるやかさの中でこそ面白いことができると考えている。従来から活動そのものはあったが、RICEとしては 2005 年から正式に活動開始。
【二地域活動等に当たっての往来頻度、滞在日数など】 2～3ヶ月に1回。3～4日程度の滞在。
【二地域活動等の開始時期】 2003年(大学在学中)から
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 大学に入る前から群馬県でボランティアとしてキャンプ支援をしてきた。 本格的には、大学のゼミナールの一環として福井県池田町に訪れたのがきっかけ。池田町での小学生を対象とした自然体験活動「ネイチャー冒険隊」の企画・実施に携わった。そして、東京から何も分からない状態で福井を訪れる学生を受け入れてくださった現地の方々の温かさに感動した。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 福井県池田町にある農事組合法人ファームハウス・コムニタの活動とタイアップしている。したがって、福井県での中心的な拠点はファームハウス・コムニタである。 (農事組合法人ファームハウス・コムニタ: 農村体験やレジャー・食育体験などを親子・グループで楽しめる池田町の体験宿泊施設。敷地内の畑や隣接する川、山で自然体験ができる。) 今から 20 年ほど前、当時の若い町長が百姓ツアーや自営型農業による町おこしを行い、新しい農業のスタイルを目指していた。佐幸先生が、これに共感。以前はゼミ活動の一環として上記の活動をして

いたが、今はRICEによる自立した活動になっている。

【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】

所属していた大学のゼミ旅行で訪れ、福井で自然体験活動を企画から実施まで行えることを知った。その時は 2～3 回程度訪問のうえ、東京で企画を進め、福井サイドと連絡を取りながら実施までこぎつけた。その際には小学校や役場などにも訪問して情報を入手した。

【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】

現地までの交通費(夜行バスで往復 15,000 円程度、新幹線とバスの併用で 26,000 円程度)。

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

平日は東京で会社勤務しながら、子供キャンプの企画を進め、福井サイド(ファームハウス・コムニタ)のスタッフと連絡を取り合う。そして、夏季・冬季・春季などの休暇に福井を訪れ、自然活動体験を主に実施するほか、祭りなどのイベントに参加する。

東京にいる間は、東京での関連イベントに参加している。

トータルに言えば、子供たちのキャンプ活動企画・実施、地域物産を活用した特産品開発(ふりかけ、くるみボタンなど)を行っている。

1 回のイベント参加は OB を含めて 20 人程度が集まる規模感。

福井でのキャンプには、毎回、子供たちが 30～40 人集まる(少ないときは 10 人くらい)。集まるのは、すべて福井の地元の子供たちである。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

学生のときは活動の運営費用の捻出が課題だったが、現在は勤務先での休暇取得が大きい課題である。RICE の活動は、実費部分さえ賄えれば、儲かる必要はない。

自分たちはグリーンツーリズムを目指すべきではないと考えている。一時的な経験は観光であってUIターンに繋がらない。そこに限界がある。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

運営費用捻出については、県からの補助金により課題は緩和された。ただし、RICE が直接補助金をもらったのではなく、あくまで間接的支援。

RICE は行政依存しない、民間レベルでお互いに相互扶助できるコミュニティの仕組みづくりを目指している。新しい持続可能なモデルづくりである。したがって、行政のためとか町おこしのためということに直接的な目的があるわけではない。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

補助金は来年度までに打ち切られる予定のため、今後の活動予定を見直している。来年度以降、自立的に動かすためにも売上増を目指さなければならない。

会社の休暇に関しては、勤め先の社内にボランティア休暇、リフレッシュ休暇などがあれば取得しやすく

なるが、実現していない。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

若者、子供が大勢集うことに関して、地域の人たちに喜んでいただけている状況は諸所に感じる。長年に渡り関係を続けていくことで、地域の方々とのつながりを広げていけると思う。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。ライフワークを持つことで人生に広がりを見ることができると感じる。学生時代もボランティアをやたからといって成績とは関係なかった。そこにあるのは人間関係だけだ。とにかく楽しいからやっている。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

想定外のことはあまりない。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

数年に渡ってこの活動をしてきたが、パブリシティやポスターで活動の告知をしてきた程度で、まだ認知度が低い。まだまだ活動の輪を広げ切れていない。

しかし、スタッフが年々歳を重ねていくので、新しい企画が生まれてくると考えている。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

用意されているフィールドを使って受身で活動するよりも、企画から実施まで主体的に活動を実践していった方が楽しめると思う。

事例3)複数拠点の店舗経営及び講習会

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】 直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】 平成 20 年 11 月
【ヒアリング場所】 高崎市の店舗兼自宅
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 群馬県高崎市／女性／50 代／パッチワーク店 代表／夫婦二人、独立した子ども 1 人の 3 人構成 ／高崎市
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 13 年前から北軽井沢に店舗用の別荘を購入し、5 年間、高崎市と北軽井沢を二地域居住しながら、パッチワークのキルト専門店を営業。現在は、本拠地である高崎市のみで店舗経営し、北軽井沢では、北軽井沢の住民や全国のファンを集めてパッチワークの講習を行っている。
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 パッチワーク
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 北軽井沢で週末(土・日)に店舗経営している間は、高崎市と北軽井沢を頻繁に行き来していたが、店舗経営を高崎市に絞った 8 年前からは、年に数回北軽井沢で講習を開いている。
【二地域活動等の開始時期】 13 年目から
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 ・軽井沢での生活へのあこがれもあり、30 年前から、北軽井沢の別荘の購入を検討していた。 ・当時は、高度成長かつ好景気を背景に、売り物件はほとんどなく購入をあきらめた経緯がある。 ・ところが、90 年代半ばのバブル崩壊後、当初投資の 2～3 割の価格で売りに出されていた。 ・但し、店舗経営等、地元住民との交流ができる使い方が販売条件であった。 ・これは、地元住民と別荘族とは暗黙の深い溝があり、売り主が気にとめていたからである。 ・購入物件を店舗用に改装し、高崎市での店舗と同様の商品の販売を始めたのがきっかけである。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 ・高崎市と北軽井沢とは、車で約 2 時間(高速を使えば 1 時間半)の距離にあり、手軽であること ・避暑地として、住居環境が好条件であること ・地元住民や別荘族、観光客等、多様な人々と交流できたことが予期していなかった長所であった。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 ・30 年前、北軽井沢にはじめて興味を持ったときには、頻繁に現地を訪問し、不動産屋に相談した。

<ul style="list-style-type: none"> ・売り物件がなかったこと、たまにあっても大規模な家屋で購入対象にならず、あきらめた経緯がある。 ・安価で手放す人が増えているとの情報を、バブル崩壊後に入手し、すぐに検討し購入した。 ・振り返ると、その物件は30年目に購入を希望したものであった。 ・店舗経営等の地元住民との交流が販売条件であったため、店舗経営を決意した。
<p>【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物件価格で約4000万円、それでも売り手の総投資費用(土地+建物)の3割程度であったらしい。 ・水道・光熱費の基本料金が高く、月5万円もかかるとのこと
<p>3. 二地域活動等のライフスタイルの内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5年前までは、北軽井沢で、高崎市の店舗と同様の店舗を経営していた。 ・当時は、土日販売にもかかわらず、高崎市の店舗を上回る売上げがあるほど繁盛していた。 ・その後、高崎市の店舗の売上げが伸びるにつれ、店舗経営は高崎市のみにした。 ・北軽井沢は、全国のファンを集めたパッチワークの講習会の場としている。 ・現在は、年数回の講習会を開催している。
<p>4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題</p>
<p>【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】</p> <p>店舗経営が販売条件であったため、高崎市との2店舗経営となり、非常に多忙となった。</p>
<p>【上記の課題解決のために役立ったこと】</p> <p>仲間と連携して、高崎市の店舗の経営の協力を求めた。</p>
<p>【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】</p> <p>特になし。</p>
<p>5. 特に地域の人との関係について</p>
<p>【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】</p> <p>地元住民と、いわゆる別荘族、加えて観光客といったいろいろな人々と交流ができ楽しかったとともに、地元住民からも非常に喜ばれた。地元住民との距離をおいている(ように見える)別荘族は、歓迎されていない。</p>
<p>6. 今後の予定</p>
<p>【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】</p> <p>よかったと考えている。</p>
<p>【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】</p> <p>想像通りのライフワークであったが、年齢を重ねるにつけ体力的にも活動内容を絞る必要を感じている。</p>
<p>【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】</p> <p>・住所登録を有するか否かで、水道・光熱費の基本料金に差があるには理解できない。</p>

・同様に、道路の使用についても、住所を有しないことから有料道路になるのは理解できない。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

- ・目的(したいこと)をしっかりと見つめて、それを地元住民と交わりながら実践していくことが大切。
- ・都会での人との交流を避けるための田舎暮らしではうまくいかないのではないか。

事例4) ガラス工芸作家

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 11 月
【ヒアリング場所】現地(山梨県北巨摩郡武川村)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 山梨県北巨摩郡武川村／男性／50 代後半／会社役員(ガラス工芸会社の自営)／夫婦(妻 50 代後半:ガラス工芸のデザイナー)＋ペット(老盲導犬＋ネコ)／東京都下町
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 山梨県武川村に定住ながら、週 1 日以上は東京へ出掛ける生活パターン。
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 夫:つり、きのこ取り、ウォーキング 妻:短歌、スケッチ
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 仕事上の必要に応じて、ほぼ週 1 日以上は東京に滞在している。
【二地域活動等の開始時期】 約 20 年前より。
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 元々、若い頃からアウトドア志向があり、地方に住みたいという目標があった。現在の居住地の募集当初、作り手の村(名称:アート・ヒルズ)を目指した開発地であったため、いろいろ探し回った上で、この場所(山梨県武川村(北杜市近く))に決めた。地元の村落とは離れた場所(山の中腹)にあるが、森に囲まれた自然を満喫できる場所で、気に入ったので、東京から移り住んだ。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 「山を見て仕事をしたかった。」ガラスを焼く仕事のため、ある程度広い場所(工場用地)も必要となる(ガラスを焼く際に特有の臭いも出る)。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 山を見て暮らしたいという点と東京への利便性ということを考え、山梨県を選んだ。つり等の趣味で各地を周りながら、1～2 年探した。たまたま作り手(クリエイターを集めた)の森ということで、入居者を募集していたので、応募した。入居決定時の訪問回数は、2 回程度と多くない。やはり自然環境の良さに引かれて、即決したという感じ。現在の土地は、地主から借りている状態。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 以前東京で仕事をしていた際の蓄えを元手にして、ログハウス風の住居兼ワーク工房(作業場所)と工場(ガラス燃焼炉設置)を作った。ログハウス風の住居部で、2,000 万円前後、ガラス燃焼用の電気炉

の導入費用でそれなりの投資を行った。電気炉を使っているため、電気代は月 4 万円～5 万円程度。土地の賃貸料は管理費込みで、85,000 円/年と安い、移住してから数年で、管理人が逃げたので、それ以降管理状態が悪くなった。本来、井戸のメンテナンスや木々の伐採等を行わなければならないが、現在の居住単位である 10 軒では難しい。地主から借りている土地は、4,000 坪で、10 軒分なので、1 軒当たりは、400 坪。ただ、隣の家(別荘として利用)が見える環境には必ずしも満足していない。

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

60 代からの田舎暮らしでは遅いと思い、「山を見て仕事をしたい」という思いが募って、夫婦揃って 30 代後半に田舎暮らしを決断した。元々仕事の発注元は東京が多かったが、ここ数年東京の一極集中が特に進んだことにより、東京へ出掛ける頻度が高まった。仕事上の浮き沈みもあり(バブル以降の建設不況)、一時期ローンの支払いも苦しかった時期もあったが、この数年は仕事も継続的にあり、忙しくしていて、なかなか自然環境を楽しむ余裕もない位になってきた。

アート村から村の集落までは、山を下りなければならないが、村の人達との交流がある。田舎暮らしだから逆に人間好きでないと、村には溶け込めない。都会での町内会に参加できるような共同生活ができる人でないと、村人の中には入り込めない。ただ、求められることを何でも受け入れることはなく、ハッキリと自分を主張できる人でないと、暮らして行けない。都会人では村民のように絶対に真似ができないことがある。20 年前の移住当時から村の集会に出ているが、当時は封建的だったが、現在では当時よりかなり開放的になってきた。村に外部の人達が入ることにより、村の習慣を壊してくれる期待感もあった。なので、自分を持っていない人は、逆に村にもなじめなかったであろう。また、アート村のような作り手を集めた集落は上手いかわない。誰が加わるのかをきっちりと選別しないと、偽者が数多く集まってくるという問題がある。県の工芸作家協会も最初はムードで売れているから良かったが、本物ではないので、直ぐに衰退してしまった。

工芸教室併設のペンション付きの工房も考えたことがあるが、冬が長いので、1 年を通して収入が得られるかという問題と、そもそも教えることが好きでないので、始める気は全くない。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

大雪の際の対応策(村の村落と離れているため除雪が後回しになる)。病気の心配(病院まで車で 15 分)。イザという時に助けてくれる関係になっていない(アート村内では、別荘住民が多い上に、偏屈者も居るため)。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

温暖化の影響で、明らかに降雪量が減った。暮らす上では一見楽になったように思えるが、田舎に暮らしていると地球温暖化の深刻さを肌で感じることになる。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

田舎暮らしに大きな理想を抱えて来ないことが肝要。自然をありのまま受け止め、田舎生活になじむ

ことが必要である。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

20年前の移住当時から村の集会に出ているが、当時は封建的だったが、現在では当時よりかなり開放的になってきた。村に外部の人達が入ることにより、若い人達からは村の習慣を壊してくれる期待感もあった。なので、自分を持っていない人は、逆に村にもなじめなかったであろう。自分にできないことはハッキリとできないと伝えることが重要である。自分は「田んぼ」好きじゃないから、農作業関係の手伝いはできないとハッキリ伝えたことで、あの人はそういう人だという認識を持ってもらった。それ以外の点で村に貢献する。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。ただし、もっと年を取ったら、東京に帰りたいと思っている。しかし、東京に帰るのは、田舎暮らし以上に資金面で大変である。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

元々田舎暮らしに対する理想や思い入れがなかったので、特に違いも感じない。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

今の若い世代の間で、アウトドア志向が減っていることは、すなわち将来的に田舎に対する興味を持たないことにつながり、問題だと感じている。特に、お父さんやお母さん世代の体験が少なくなってきた。田舎の生徒・学生ですら家の手伝い：農作業をしたことがなく、学校で農業体験学習をおこなっている。もっと太陽・土いじり・水(川)・木登り等の自然になじむ体験を積み重ねて欲しい。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

「田舎暮らしを簡単に考えるな。」：年を取ってからの移住は困難が多いので、止めた方が賢明。体が動かないと、何事もできない。

「大きな理想を抱えて田舎に来ないこと。」：自然をあるがままに受け入れる姿勢が肝要。

(参考)



事例5)起業(特産品開発)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 11 月
【ヒアリング場所】島根県江津市の会社応接室
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 島根県江津市桜江町／男性／60 代前半／会社代表取締役、農業生産法人代表取締役／夫婦 (妻 50 代後半)及び息子家族と同居 6 人／福岡県福岡市
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 島根県江津市桜江町と福岡県福岡市の二地域居住
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 仕事が趣味(のんびりが性に合わない)、そして蘭の栽培。
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 妻の実家である福岡市の拠点は残したままで、今も妻は行ったり来たりしているが、本人は仕事が忙しく、桜江町での暮らしがほとんどである。
【二地域活動等の開始時期】 平成 8 年(51 歳)に桜江町に移住(福岡の拠点は残したまま)。平成 11 年に息子家族を呼び寄せた。
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 福岡県福岡市で旅行代理店を経営。若いときからアウトドアが好きで、旅をするなかで 60 歳を過ぎたら田舎暮らしをすることを決めていたが、蘭を見るために桜江町の観光宿泊施設「風の国」(蘭栽培のための温室)に行ってから、桜江町の自然に魅かれた。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 桜江町を流れる江の川が地元久留米の筑後川と似ていた点が大きい。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 最初は 1 人で役場に紹介された空き家に 2~3 ヶ月住んだ。その後、1 人で半年~1 年は行ったり来たり。2~3 年後には妻も一緒に行ったり来たり生活。そのうち桜江町に知り合いがどんどん増えて生活の拠点が移った。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 会社運営にあたっては、町の助成金 4、50 万円を受けてチェーンソーや草刈機を買うなどしたが、数年間は過去の貯金を取り崩しながら生活した。
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

51 歳から田舎で暮らすためには仕事が必要。そこで、流通販売や旅行業の経営経験から特産品開発に着目した。平成 8 年以降、模索するなかで桜江町の桑畑と出会った(役場の仲介で「農業振興の会」という地元の会合に出席したのがきっかけ)。かつて地域の基幹産業だった養蚕業が衰退するのと合わせて桑畑も農地転換し 120ha から 30ha に減少(桑の抜根作業費に毎年 10 百万の予算)。残された 30ha も荒れ果てていたが、これを再生できないかと考えた。30ha から生まれる 100t 分の桑を健康食品として販売することとし、桑について約 1 年半、行政の協力を得ながら研究した。桑が糖尿病に良い等の有効成分が判明した後は、テストや試飲会を繰り返し、イベントで 100 個のテスト販売をした結果、半日で完売した。平成 10 年に桑茶生産組合を発足させ、平成 12 年に法人化。生産、加工、販売に投資し量産化、そして桑畑の再生を目指す。その結果、初年度 400 万円の売上が今年度 3 億 1,000 万円に達している。雇用もパートを含めて 55 名。

商品を開発してから商社・小売等に提案する商品提案型流通開発を行っており、この 2 年で 303 アイテムつくった(桑茶以外に調味料、サプリメント、粉末、青汁など)。今は桜江町にとどまらず全県の桑畑の栽培委託を受けるまでになった。そして桑以外にも商品拡大しつつある。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

何かやろうとした時の情報収集、そして地元の協力。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

役場が過疎対策に真剣に取り組んでいた頃と時期が合ったため、役場にも大義名分があり情報収集の拠点となった。特に地元の方々の性格等もまったく分からない中で、適当な方を紹介してくれた。役所が仲介してくれることでお互いの信頼感が生まれた。島根県もふるさと定住財団の活動を始める時期で、県の方向性とも合ったようだ。

そして、地元の伝統的な資源に着目したことが大きい。古き良き時代＝桑畑の再生は地元の皆が強く望む総意だった。通常であれば、よそ者扱いされるところだが、いつの間にか協力者・関係者の輪が広がったのは、伝統的な桑を扱ったからだろう。

自分の旅行業を通じた経営やマーケティング等のノウハウと地元の生産技術の相互補完がうまくいった。また、桑に着目したことには蘭の栽培を趣味としていたことも寄与している。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特産品開発を行うためには、役場、生産、流通、金融、それぞれの専門家がハイブリッドにいて、それを繋ぐ人が必要である。そして、いろいろな立場の人たちが協力して地域総力戦で取り組むべきである。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

上記のとおり。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。これからも業容を拡大させる。このことが産業となり地元の雇用を生み出す。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

当初はのんびりしようと考えていたが、色々やってしまう。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

会社の担い手になるリーダー格の人材探しが大変。特に若い世代で、こうした仕事に希望を持っている人の確保が重要である。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

地元の人たちと同じ目線に立つことが大事である。自分も地元の人たちの働く目線、仕事に対する考え方を知るために、半年くらい道路工事などの土木作業もやった。こうすることで地元に馴染み、考え方や慣習も知ることができる。その上で、地域における自分の役割、位置づけをはっきりさせる。

初期の段階では、自分が中心ではなく、お手伝いをするという役割に自分を置くことで摩擦を小さくする。

そしてやりたいことは可能性で決めるのではなく、地域にとって何が重要か？が大事。皆の総意でできるテーマは何か？テーマづくりに時間をかけるべきである。そして、最初からうまく行かずがないと腹をくく。継続は力である。

(参考)桜江町桑茶生産組合



生産農園から直接お客様へ

- ・畑づくりからこだわった有機栽培
- ・厳しい審査を経て有機 JAS 取得済
- ・体に優しい完全無添加
- ・生産農地で製品加工。だから安心。

保然力食品 JAS 有機農法・桑商品について

事例6) 起業(飲食・雑誌プロデュース関連事業)

ヒアリング調査の方法等

【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式

【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月

【ヒアリング場所】那覇市内の団体事務所内

1. 基本属性

【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】

沖縄県豊見城市／男性／50代／会社社長、NPO法人理事長ほか／夫婦二人／東京都練馬区

【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】

東京都練馬区

【趣味(通常の余暇の過ごし方)】

農業、沖縄音楽(島唄)、食材研究等

【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】

那覇市内の親類・知人宅、慶良間諸島の民宿等に1週間程度の長期滞在を移住するまでの 10 年間に 30 回程度実施した。

【二地域活動等の開始時期】

東京と沖縄の二地域居住は約 33 年前、20 歳頃から実施。

2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯

【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】

東京で沖縄関係のイベントに関わるが多かったため、若い頃から泡盛と沖縄の伝統的な食文化、沖縄音楽(島唄)に興味があった。また、雑誌(ブルーラス)で東京脱出、「南の島があつい」という記事に惹かれた部分もある。若い頃から花粉症(30 年前は現在ほど知られていなかった)に悩んでおり、実際に沖縄に来ると良くなるため、沖縄にいずれは住みたいという気持ちがあった。

【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】

食材の市場に近いところに住みたかった。本当の田舎暮らしではなく、那覇のような地方都市に住みたかった。那覇はアジア的な市場があり、本土では見られない食材が豊富だったことも魅力である。

【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】

東京と沖縄の二地域居住はすぐに始めたが、移住に至るまでには 10 年かかった。東京で仕事も持っていたし、沖縄での適当な仕事もなかったのですぐには移住できなかった。不動産好況の折、借りていた事務所の立ち退き料がまとまって入ったこと、知人から那覇市内の空き店舗での飲食店経営の打診があったことから移住を決意した。現地情報はそれまでの沖縄滞在を通じて現地で直接情報収集した。

【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】

—

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

沖縄の食文化、農業に関わるライフスタイルを送っている。ライフスタイルがそのまま仕事になっている。行っている事業としては沖縄移住等の情報発信を行う雑誌等の出版業のほか、伝統食材の普及等に関わる団体や NPO 法人の運営を通じて、沖縄の食文化の実体験、啓蒙活動(学校等での食育)、情報発信、生産農家の支援、農産品等の特産品の開発・販売支援等を行っている。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

本土(東京)との航空交通費が最大のネックである。その問題は未だに解決していない。また、公共交通機関が少ない車中心の社会であり、車の免許がないと地域での動きがとれないという課題もある。

このほか、那覇のような都市部であっても地縁・血縁等をベースにしたコミュニティのつながりが強く、なかなか移住者はコミュニティに入り込めない。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

泡盛を介して自分から積極的に地域に溶け込む努力をした。地域のイベント等あればなるべく参加を心がけた。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特になし。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

泡盛を媒介にしていたので、地域の人々とはすぐに打ち解けた。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

沖縄に来れば物価が安く、それほど稼がなくても良いと思っていたが、実際は不動産を含めて、日用品に至るまで意外に物価が高いという誤算があった。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

公的年金だけでは生活できないので、老後の経済的保障をどうするかが心配である。自分の移住のひとつの目的であった那覇市内の食材市場も近年は再開発等のあおりを受けて取り壊されるおそれも出てきた。市場がなくなったら沖縄に対する興味が薄れる。そうなると将来も定住し続けるかどうかは分からない。自分の好きな市場があるキューバに移住する可能性もある。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

都市部と地方では生活習慣や価値観が異なる部分も多い。積極的に生活習慣等の違いを楽しめる人でないと二地域居住や移住は厳しいのではないかと。

事例7)起業（そば屋）

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 8 月
【ヒアリング場所】二地域居住先の現地(福島県北塩原村)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 千葉県柏市⇔福島県北塩原村／男性／60 代前半／そば店店主／妻、子:独立／夫:千葉県
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 本宅は千葉県柏市におきながら、定年後、福島県北塩原村の古民家でそば屋を開業し、春から秋の間だけ営業している。(二地域居住)
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 夫:つり、溪流ウォーキング、そば打ち 妻:不明
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 春から秋の間は、そば屋(予約客中心)の営業を中心にして生活し、そば屋を休んだ時に本宅に戻る程度(10 回以下)。冬は本宅での生活を中心にし、雪下ろしを兼ねて、2~3 週間に 1 回程度そば屋兼二地域居住先に行く。
【二地域活動等の開始時期】 7 年前
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 元々、溪流釣りが趣味で、休みの度に東北地方を中心に散策していた。会社勤め(関東の私鉄勤務、駅長経験もあり)をしていた 10 年位前から本格的に田舎暮らしを目標とし、古民家物件を探し始め、福島県会津地方での人脈を作る内に、7 年前に地元の人から紹介された物件を即決した。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 自分自身の田舎暮らしイメージに合うかどうかで、感覚で選んだ(ここだ!とひらめいたという感じ)。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 古民家物件の紹介から、現地下見まで 1 週間程度。その場で購入を決めた。それ以降(当時は会社勤め)、休み毎に現地へ赴き、自らの手で古民家の改修を進め、まず住めるように手直した。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 誰も住んでいなかった古民家のため(知人からの紹介)、購入費用も安く、かつ自らの手(DIY)で手直したため、総額 200~300 万円程度で、居住スペースから店舗改修まで行えた。
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

松原湖北部に位置する集落は、20～30 戸の限界集落で、高齢者も多い。その地で(近隣には商業施設もなし)、そば屋を開業する一方で、趣味を中心とした田舎暮らしを満喫している。

元々、そば打ちは趣味で行う程度だったが、福島県会津地方はそばの産地であり、自分の打ったそばを広く食べてもらいたいと思って、専門家の元へ修行に行き、本格的にそば打ちを習った。そば屋の開店に当たり、古い木材を活かしながら、全て自ら大工仕事を行うことによって、古民家を店舗に改装した。

当然、そば粉も地産地消で地元産のそば粉を使っているが、てんぷらの素材(いわな等の川魚や野菜・山菜類)も、自ら採集してきた食材を中心として、提供している。居住年数を経るにつれて、地元からも若い新入りの仲間として信頼される存在になってきており、集落ばかりでなく、村長も相談に訪れるような関係(集落の発展のさせ方)を築きつつある。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

観光地から比較的近い立地にあるものの、観光地からの道路整備が遅れていて、一般観光客がなかなか来ないような集落に立地するため、そば屋はそれだけで生活できる収益を上げるまでには至っていない。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

口コミの広がりやマスコミへの登場等によって、そば屋の知名度が上がることによって(店主の知名度?)、少しずつであるが、客数も増えている(ほぼ予約客のみ)。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

自らの努力だけで解決できない問題を行政(村・県)や地域コミュニティを巻き込んで解決していきたいと考え、活動を始めた所である。観光地からの道路整備、集落での足湯サービス、レンタサイクル・サービスとサイクリング施設の整備等。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

元々、人間同士の触れ合いが好きで、田舎暮らしで良く言われる地元住民との交流が難しいということではなかった。溶け込むまでの期間も短かったし、ハードルも感じたことはない。地元住民が高齢者ばかりということで、定年近くの間でも若手として、重宝してくれたこともある。地元高齢者よりも身体が動くので、地域のイベント等には積極的に協力し、音頭取りをしたりしたことも地域コミュニティに早く溶け込めた理由だと思う。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

都会生活では味わえない田舎暮らしは、とても素晴らしい。このようなライフスタイルをぜひ積極的に他の人達にも広めたい。こんな素晴らしい生活スタイルは他では味わえない。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

準備期間が長かったお蔭かもしれないが、特に違和感はなかった。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

集落の高齢化に伴い地域コミュニティの活力がどんどん失われていくこと。また、長年地元暮らししていると当たり前のことが、売りモノになるという発想が出てこない点。(温泉が川にそのまま流されている等)

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

こんな素晴らしいライフスタイルは他にはないので、皆さんも早く取り組んで欲しい。

そば屋に来たお客さんとの会話の中で、いつもそのような話をして、田舎暮らしの素晴らしさを伝えているが、やはり実際に実践してみないと真髄は分からない。ただ、まず地方への旅行でも良いから、その体験をすることは重要な第一歩になると思う。

(参考)古民家のそば屋と趣味の釣り風景



事例8)持続可能な農業の実践

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】那覇市内の団体事務所内
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 沖縄県那覇市／男性／60代前半／建築設計会社社長、1級建築士資格保有／夫婦二人(妻は東京に在住)、独立した子ども2人の4人構成／東京都
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 東京都中央区佃(35年間東京で建築設計に従事)
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 農業
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 特に移住に際して、沖縄を何度も往復したり、東京と沖縄の二地域居住を行うということはない。
【二地域活動等の開始時期】 1年半前に沖縄に本人のみ移住。
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 配偶者がもともと沖縄好きだった。自分自身は特に沖縄というこだわりはなく、農業ができる暖かいところを移住先として探していた。15年前に初めて沖縄に来て気に入り、将来の移住先候補として考えるようになった。約1年半前にそれまで住んでいた東京都内で「パーマカルチャー」という持続可能な農業方式の講習会があった。そうした持続可能な農業というものに以来、熱中してしまい、それを沖縄で実践したいと思ったことが、沖縄移住の最終的なきっかけである。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 配偶者は東京に仕事があるため、現在はまだ沖縄に移住できない。このため、配偶者にとっては東京と沖縄の二地域居住が前提なので、空港から近い都市がよかった。都市でも中心市街地は念頭になかった。中心部を外れた自然の多い場所が良かった。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 建築事務所の定年後すぐに移住を決意、実施したため、意思決定から実施までに何度も訪問したようなことはない。居住用住宅(賃貸)についても、自治体等から情報をもらったということはない。自分で気に入った場所の近辺を歩き回って、空き物件を探した。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか)】 引越し代込みで100万円程度が初期費用としてかかった。那覇市内の住居は賃貸物件であり、3DK

で6万円の賃料である。物件自体は築 15～20 年である。東京に比べると安い。

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

農ある暮らしを那覇市郊外の農園を借りて実践しながら、地球環境を考慮したパーマカルチャーデザインによる楽園作りをめざしている。Web で伝統食材の普及・啓蒙活動を行っている任意団体を知り、連絡を取って入会したところ、現在の活動拠点となっている農園を紹介された。農業に携わるのは週に4～5回。那覇市内から現地で購入した軽自動車に乗って通っている。農作業ができない雨の日はパーマカルチャー等に関する資料等を読んでいる。自分の実践していることをwebサイトで紹介している。このほか、沖縄の伝統食材の保護や普及、食料自給率の向上を活動目的としたNPO法人の理事となり、当該法人の活動にも協力している（農業指導、パーマカルチャー実践等）

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

車がないと生活できないという点が課題であった。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

現在は車を購入しているので、農園までのアクセスが悪いという課題は解決している。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特になし。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

地域も高齢化してしまっており、自分がかかなり若い方である。今のところ、那覇市内での近所の人々との付き合いはない。なかなかどうやってコミュニティの輪の中に入っていけばいいか、わかりにくいところがある。近所付き合いが密な地域だけに、いずれは接点を持たなければならないと思っている。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

よかったと考えている。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

今のところ当初のイメージとの違いというのはない。ほとんどイメージどおりである。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

特になしというか、真剣にこれまで考えていないというのが実情である。現状の課題は、沖縄での「農ある暮らし」をどう実現していくかが課題。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

何をしたいかわからないまま移住しても時間をもてあましてしまう。地域に移住してそこで何をしたいかわかり考えることが必要ではないか。

事例9)まちづくりコンサルタント

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 11 月
【ヒアリング場所】会社事務所(長野県茅野市)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 長野県茅野市⇔東京都三鷹市／男性／40 代後半／まちづくり組合の理事(前職は東京のまちづくり会社職員)／妻、子3人:扶養、父、母／東京都三鷹市
【二地域活動等の場所】 6 年前より、本宅を三鷹市から茅野市に移転し、平日は東京で仕事、週末は茅野の生活であった。2008 年 10 月から茅野に仕事の本拠を移した。
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 週末は子どもの行事や地域活動に追われ、趣味的な余暇活動はほとんどない。
【二地域活動等に当たっての往来頻度、滞在日数など】 2008 年 10 月に仕事の本拠を茅野に移す前は、月～金が東京、週末が茅野の生活で、現在は 2 週間に 2～3 日程度東京へ出張する。
【二地域活動等の開始時期】 6 年前
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等をはじめようになつたきっかけ】 三鷹の自宅(土地)が駅前の商業地のため、マンションを建てるか、転居するかを検討している時に、子どもが茅野の祖父の家に行くと生き活きとすることや、大家族での生活の重要性を知り、移住を決定した。当初のイメージは米国の郊外暮らしである。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(他の場所を選択しなかった理由)】 豊かな自然環境、おおらかな教育環境であったほか、容易に通勤できないほど離れた距離であること。また、茅野が妻の実家であったこと。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 三鷹でのマンション建設の検討、三鷹市内や周辺都市の土地検討までが半年間。その後、茅野での土地検討で半年間位であったが納得のいく物件がなく、インターネットで知り合った不動産屋で茅野の物件購入を決定した。土地を 3 回程度見に行ったが、始めから「ここかな」という感じ。
【(二地域居住等を始める際の初期費用)】 土地代 1,500 万円、建築施工費 4,500 万円

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

居住地は市街地と里山の境界のあたりだが、学校が近い。少し新興住宅が建ち始めてきている。移住の当時、国土交通省で二地域居住の言葉を知り、面白いコンセプトということで、茅野市企画課に相談。その後若手職員とまちづくり研究会を開催。現在は法人化し茅野まちづくり研究所となる。現在は、そこでもまちづくり活動を通して、ライフスタイルの実現を進めている。

自宅はセルフビルドであり、自宅づくりと薪ストーブの薪割りに結構時間をとられている。それ以外は、できるだけ子どもと一緒に過ごせるようにしている。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを始めるにあたって直面した課題】

何をするにも情報がなく、人と仲良くなって教えてもらわないと何もできない。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

まちづくり活動等、および子供同士の繋がりから仲間が増えていった。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特に無し。

【特に地域の人との関係について(地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他)】

東京の人と比べ、プライドや表裏がなく、基本的には人付き合いはしやすい。始めは怖い感じがするが、いわゆる「いい人」が多い。また、公的な場で発言しない人が多く、こちらがいろいろ意見をぶつけていくと、あとで賛同してくれる人も多い。言ったことを実現していくと、信頼関係が生まれ、次のプロジェクトに繋がっていく。

5. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。自分自身が、予想以上に地方人に変態(変容)した感じである。ただ、純粋な地方人にもなれず、東京人にも戻れず、新しい人種になりそう。

(理由)

ささいな満足感や充実感を得ることができること。

【二地域活動等を行う前に想定していたライフスタイルとの違い】

二地域活動や移住を通じてもう少し自分勝手に生きるつもりだったが、だんだん地域性を受容している。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

都市への一極集中と地方の疲弊、東京人の無力感を感じる。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス】

一人で東京の雑踏の中にいるときの孤独感と、一人で自然の中にいるときの安心感を比べてください。一人一つの田舎をもつことをお勧めします。

事例10) 転地療養

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成20年12月
【ヒアリング場所】自宅(東京都八王子市)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 東京都八王子市／女性／30代／主婦／夫・娘3人(小1・年少・1才未満)／神奈川県
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 毎年異なるが、20年度は長野県茅野市(東急リゾートタウン蓼科)
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 子供がまだ小さいため、余暇をゆとり過ごすことができない
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 毎年子供の夏休み期間(7月下旬～8月いっぱい)を通して滞在。(夫は週末のみ車で通い)
【二地域活動等の開始時期】 3年前
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 一番上の子供(現在小1)のアトピーがひどく、特に症状が悪くなる夏の期間のみ伊豆にある親戚の家に遊びに行っていた(年少まで)。ところがその親戚が亡くなったため、貸別荘を借りるようになった。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 アトピーに良いとされる、湿気が少なく、海があり、温泉があるところ。また、月単位で借りられ費用が比較的安く、夫が週末ごとに通える距離にあり、平日は自分1人で3人の子供たちを守らなくてはいけないため、安全性を考えてマンションタイプの物件を探した。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 伊豆の親戚が亡くなり貸別荘を探していたが、昨年度までは伊豆のコンドミニアムを借りていた。費用が高く2～3週間しか借りられず、夏休み終了までの残りの2週間は旅行をして過ごした。昨年の夏休みが終わってインターネット等で探していたところ、このリゾート賃貸をウェブで見つけた。海の近くが良かったが、夫が通え、涼しく過ごせる蓼科の物件があったので、一度現地を訪問して安全面や設備を確認し、今年は利用することにした。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか)】 継続費用:年間30万円程度(20年度)
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
平日は日常生活と変わらない生活を送り、敷地内にある温泉等に入ってアトピーの治療をしていた。平

日は夫がないため遠くに遊びに連れて行ってやらなかったが、敷地内で自由気ままに遊んでいた。週末は夫が車で通ってくるため、子供たちを連れ出して気球に乗ったり、馬に乗せたりして遊ばせた。アトピーを悪化させないよう食事にも常日頃気を遣っているが、貸別荘の近くに無農薬野菜の直売所等があったので重宝した。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

夫は平日は仕事、週末は蓼科に来て子供たちと遊ぶという生活だったため、体力的につらかったようだ。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

解決できていない。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

落ち着いて過ごすために、やはり貸別荘ではなく別荘を購入できればと考えている。しかし、売りたいと思った時に売れる物件は少ないと思うので、購入には至っていない。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

基本的に別荘敷地内で過ごしていたため、地域の人と関わりを持つことはなかった。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

子供のアトピーも悪化せず、とても楽しそうに過ごせていたのでとても良かった。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

新しい土地で1か月近く過ごす、遊びに夢中になってしまうため、体調を崩すことがあった。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

長女のアトピーが良くなればおそらくこのようなライフスタイルは続けないだろう。また、たとえアトピーが良くならなかったとしても、夏休み中貸別荘に滞在するのは長女が中学生になる前までだと考えている。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

せっかく来たのだから、と遊んでばかりいるのではなく、少し落ち着いてゆっくり過ごす時間を設けるとよい。

(参考)東急リノベーションの賃貸施設



事例11) 企業CSRと趣味活動(森林保全)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】 直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】 平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】 東京の会社内会議スペース
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 東京都／男性／50 代前半／電力会社(自然環境グループ)／夫婦(妻 50 代前半)及び長男(30 代前半)、長女(20 代後半)／群馬県前橋市
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 東京都内(勤務地: 単身赴任)と前橋市(自宅)、および孺恋村(二地域活動拠点)⇒三地域居住
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 森を散策して植生などを観察。ボランティアで森林の案内や解説。樹木の手入れやガーデニング。
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 ももとの住まいである前橋市の拠点は残したままで、東京に単身赴任(過去にも2回、東京に単身赴任をした)。妻とともに、孺恋村に借りている山小屋に月に1度程度、日帰り又は1泊で訪問。
【二地域活動等の開始時期】 平成 16 年に東京に単身赴任(前橋の拠点は残したまま)、週末は前橋の自宅へ戻る。 孺恋村の山小屋は平成 19 年 4 月に借り、今年で 2 年目を迎える。
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 群馬県出身で、現在の会社(東京)に入社。その後、群馬と東京(単身赴任)の移動を繰り返す。子どもが生まれた 30 年ほど前から、その時々ライフスタイルに合わせて二地域活動を実践してきた。子供たちの教育のために、まずは尾瀬に小屋を借りたり、その後はキャンピングカーのようなものでテントを持って家族で東北に行ったりして休日を過ごしていた。また、森林に関わるのが好きなため、群馬県の県有林保全のボランティア活動をしたり、仕事の傍らで営林署に勉強しに行ったりしていた。現在は、天明の大噴火以来の浅間山の植生変化を知りたくて孺恋村に山小屋を借りるライフスタイルを実践。仕事でも、複数地域で森林管理の活動を行っている(電力会社で ECO サポートプランを推進)。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 浅間山の森林再生について知りたいと考えたところ、孺恋で知人から山小屋を借りることになり決定。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 二地域活動は遡れば 30 年近く前から実践。今回の孺恋村での二地域活動は、近隣の浅間山の森林再生について感心があったことと、知人から山小屋を安価で借りることができたため昨年実施。

【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】

山小屋の家賃は知人から借りているため月に2万円。前橋と嬭恋の間は車で移動(片道約2時間)。

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

平日は職場がある東京、週末は自宅がある前橋と嬭恋(月に1回)で生活。前橋には週1回は郵便物等の確認に帰る必要があるし、嬭恋にも月1回は換気などメンテナンスに行く必要がある。

趣味の森林散歩・観察が高じて、天明の大噴火で被害にあった森林が再生していることに興味を持ち、月に1回週末を利用して嬭恋の山小屋へ赴き、森林散策や植生の観察、樹木の手入れやガーデニングを実践している。加えて、「PLT(Project Learning Tree)指導者」の資格を夫婦で取得しており、年に2回夫婦そろって嬭恋で講師(ガイド、インタープリター)を務めている。

また、「森林インストラクター」「樹木医」の資格を有することから、仕事の一環としても、森林ボランティア支援活動を複数地域(山梨県小菅村、栃木県足尾、成沢町など)で実施している。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

平日は東京で勤務しているため、帰省と二地域活動に割ける時間が土日限定されていること。加えて、仕事でも森林管理に携わっており、その活動が土日に入るため、嬭恋に行ける週末は月に1回程度しかないこと。

また、空き家や古民家などの物件を探すに当たって、インターネット等では統一的に検索できないうえ、実際に物件を見に行くと事前情報とのギャップが大きく、本当に住むことができるような物件探しが大変であることが課題。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

現役で働いているうちは二地域等活動に時間が限定されることはやむを得ないが、リタイア後に何らかの役に立つと考えて実行しているのが現状。

また、物件に関しては、今回二地域活動拠点である嬭恋においては、知人からの紹介で安価に物件が賃貸できたために助かった。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

空き家・古民家等の物件を統一的に検索できる仕組みの整備が必要。潜在的に、畑や田んぼに携わったり、古民家などを持ちたい人は大変多い。そのため、定住のために賃貸／購入をする際、修復作業や改築が必要なものではなくすぐにでも居住できるような物件をスクリーニングして、情報を発信することが求められる(ハード面)。また、特に団塊の世代などでリタイア後に農業をしたい人や、田畑に携わりたい人、地域に貢献したい人などを誘致する受け皿として、農業の指導者育成も必要だと考えられる(ソフト面)。ハード面だけでなくソフト面の充実が必要である。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

月に1回の土日での訪問しかできず、自分の趣味活動に費やす時間がほとんどのため、深く地域の人々との関係を構築するのは難しいが、地元の森林ボランティアの指導をしたりする中で、自らのノウハウを生かして地域貢献することを通じて、広く地域の人々との関わりを持っている。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。自分のライフスタイルの幅が広がることによって、また、東京から離れることによって、日常から離れた生活の変化を楽しむことができている。東京からの距離が離れれば離れるほど、気分が開放されるような気がしている。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

特になし。「こんなものだ」と感じている。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

これまでその時々々のライフスタイルに合わせて、いろいろな地域で二地域活動等を実践してきた、今は3年後ぐらいにはまた別の拠点で新たなライフスタイルの実践や、やりたいことの実現をしようと考えている。その際に、定年後の仕事の有無や、地域との交流が楽しくて豊かかどうかを観察しつつ、次の移動場所を検討している最中である。

現在の孺恋の山小屋が別荘的な場所に立地しているため、次回は集落的な色が濃い「村」のエリアに住みたいと考えている。いろいろと試行錯誤しながら地域と関わってみて、終の棲家となる場所が見つかればそこに定住すればよいというスタンスで活動している。

現在は、二地域等活動をするための時間的な余裕が十分ではない(会社の休暇も取りにくい)ことだけが課題である。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

定住が目的でも、物件を購入するのではなく、まずは借りてみることから始める。買ってから売るとは難しいうえ、ライフスタイルは5~10年で変化するものであるため、柔軟性を持って対応することが肝要。

地域の人と交流するためには、仲間として認めてもらう努力が欠かせない。そのためには、老人クラブの手伝いであったり、消防団に入ったり、小学校の登下校サポートをしたりなどから始めるしかない。また、地域には必ずリーダー的な存在のキーパーソンが居るため、その人たちと活動をしようとする気持ちをもたなければいけない。

表面的ではなく、地域に入り込んで、地域おこしに貢献してほしい。

事例12)帰省(農家の手伝い)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成20年11月
【ヒアリング場所】広島市内
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 広島県広島市／男性(長男)／40代前半／公務員／夫婦及び娘10代後半と同居／愛媛県松山市(高校まで、大学は静岡県)、妻の実家は広島市内
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 広島県広島市と広島県尾道市瀬戸田町(旧瀬戸田町)の二地域活動
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 普通のサラリーマンとして家族で遊びに行く程度
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 瀬戸田町に2ヶ月に1回程度は連休を使って往来している。往来は車で片道2時間程度。盆や正月を除けば平均2泊3日。
【二地域活動等の開始時期】 平成2年に大学(静岡大学)を卒業して、公務員になると同時に始めた。
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 父親も仕事をしていた愛媛県松山市から同様に、瀬戸田町で二地域活動をしていた。今は引退して瀬戸田町に越して祖父と同居(松山市の拠点は引き払った)。そのライフスタイルを継いだかたち。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 もともとの実家なので選択の余地がない。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 農家のせがれが農家を手伝いに帰るのは当然のこと。長男でもあり当然の義務と考えている。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 かかるのは交通費・ガソリン代だけ。
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
先祖代々のみかん(一部レモン)農家の収穫等の手伝いに行く。妻と子供は近所で遊んだりして、気ままに生活している。
4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題
【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】 交通費の問題が大きい。瀬戸田町は島なのでしまなみ街道を通って橋を渡るが、片道2~3千円す

る。しまなみ街道は農業振興のために作られたのだが、かえってお金がかかる。同じように島々を結ぶ橋でも、農道橋は無料、普通橋は有料である。

そして妻の理解も必要なため、妻のやりがいを見つけてあげようとしている。妻の趣味(お茶・お華)を地域と結びつけて、妻が求められる場所もしくは仕組みをつくりたい。

最後に休みが取りにくいという問題がある。同じような二地域活動をしている人は同じ県庁内に大勢いるので、農作業の時期が重なりやすい。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

—

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

グリーンツーリズムが流行っているが、実際に農業をやる者として本当に必要なことなのか疑問。若い人を農業者として育てる仕組みづくりの方が大事だ。農業系の学校を出ても就農者は1~2割程度ではないか。新規就農の支援に役立つように、若い人たちが真剣に取り組める場を与える、最初はなかなか馴染めなくてもそんな場を提供するべき。

また、地域に新しく住もうとしている人のための政策よりも、既に住んでいる人のための政策を優先させるべきである。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

もともと実家なので、地域の人たちとの関係を気にしたことがなかった。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

—

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

季節によって繁閑の差が激しい。みかんの場合は年末が忙しい。相当大変な肉体労働である。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

日本の農業の衰退とともに、実家も含めた地域がなくなるのではないかという不安が大きい。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

自分が二地域居住をしているとは思ってもいなかった。このライフスタイルが二地域居住であるなら、田植えや稲刈りも含めると広島県庁内だけでも相当数いる。

現状は兼業農家でなければ食べていけない。広島県でも推進しているが、一体的農地の集落営農法人化を進め、(金銭的にも)安心して取り組める農業の枠組みづくりが必要だ。

事例13)帰省(実家のメンテナンス)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】那覇市内の団体事務所内
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 大阪府吹田市／男性／50 代後半／会社役員／夫婦二人(同居)／大阪府吹田市
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 沖縄県今帰仁村
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 毎月沖縄に週末等を活用して3日間程度滞在
【二地域活動等の開始時期】 10 年前(父親の死)
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 自分自身は三男であるが、実家のある今帰仁に帰って住んでいた父親の死により、実家が空き家になったので、そのメンテナンスと、自分自身の沖縄移住の気持ちがあるため二地域居住している。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 先祖伝来の土地家屋なので他に選択肢はなかった。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 —
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 土地建物はあるので初期費用はかからない。大阪と沖縄の往復交通費が安い航空券を使っても月 4 万円程度かかる。特に沖縄から出る便が高い。
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
大阪にいるときは会社役員として仕事をしている。沖縄にいるときは、所属しているNPOの事業の手伝いや、今帰仁の実家に帰って家の手入れ等をしている。
4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題
【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】 大阪と沖縄の往復交通費が高いこと。毎月のことなので負担である。また、現在の会社を退職した後

に、自分は沖縄に移住したいが家族が移住できるかが課題。現在の二地域居住については妻も了解しているが、移住という話になるとハードルが高い。特に妻は鹿児島出身であり、沖縄に住むことに抵抗があるかもしれない。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

課題は解決していない。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

交通費の軽減。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

もともと今帰仁の人間なので、祖父や父親は地域の人に知られており、溶け込むのに課題はなかった。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

将来的に移住したいという気持ちがあるので良かった。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

特になし

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

定年後の家族ぐるみの移住。

将来的に沖縄に住むことになった場合、年金だけでは不安。やはり、沖縄でも生活費を確保するために起業したい。どのように起業するかが課題(二地域居住中に食品関係の会社を立ち上げたが、現在は休眠状態である)。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

—

事例14)ご当地グルメ巡り(ワインツーリズム)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 11 月
【ヒアリング場所】原茂ワイン(山梨県甲州市)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 東京都中野区／男性／30 代後半／会社員／妻: 30 代前半／夫: 東京都、妻: 神奈川県
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 東京都に住みながら、ワイン好きで、ワインツーリズムに参加したり、ワイナリー巡りをしたりしている。
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 夫: ワイン収集、音楽鑑賞 妻: 美術館めぐり
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 3 年前に始めて山梨・勝沼地区を訪れ、この地区の素晴らしさを知った。それ以降、日帰りで年 2 回程度、計 6 回訪れている。
【二地域活動等の開始時期】 3 年前
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 最初は、ワイン好きな仲間に誘われて訪問した。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 ワイナリーが歩ける範囲内に点在している点。ワインのテイスティングをしながら、自分の好みのワインを探し、ワイナリー巡りをするのはとても楽しい。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 最初に訪問する 2 週間前に友人に誘われた。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 山梨・勝沼ぶどう郷までの JR 代金 + 市内循環バス代 + テイスティング代 + お茶代: 10,000 円弱 + 気に入ったワインの購入代金: 白ワイン(甲州種による)が好み
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
ワイナリー巡り。(勝沼地区に約 30 軒のワイナリーが軒を連ねる。と言っても、各ワイナリーは、徒歩で 20~30 分程度ずつ掛る。)
4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題
【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】 勝沼に車で行くと、夫婦のどちらかが飲めないのが、困る。また、公共交通機関で行くと、バス便が少な

く、意外に不便で時間が掛る。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

一度に多くのワイナリーを回ろうとせずに、焦らず、ゆったりと楽しむ心持ちで。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

コミュニティ・バスの利便性をもっと向上させて欲しい。勝沼ブドウを使って醸造したワインと、海外輸入ブドウを使って醸造したワインを区別する方法が欲しい。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

ワイナリーの女将や店員さん達とテイastingをしながらの会話も楽しい。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

- ①日本の代表的なワインである勝沼ワインに愛着がわいた。
- ②ワイナリー巡りにより、様々なワインを味わう楽しみが増え、ワイン関連の知識習得も貪欲になった。
- ③ゆったりとリラックスした気分で、ワイナリー巡りをする事は心身ともにリフレッシュされる。歩いた後の冷えた1杯の白ワインは最高！

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

- ①ワイナリー巡りがこれほど楽しいものとは思わなかった。
- ②こんなに多くの人達がワイナリー巡りを楽しんでいるとは思わなかった。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

- ・勝沼地区で取れるぶどう量が少なく、原料のぶどうを輸入に頼っている点。
- ・温暖化の影響で気温が上がり、良質なブドウができなくなってきている。
- ・ブドウ農家の高齢化によって、廃業するブドウ農家が増えており、ブドウの確保が難しくなっている。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

・ブドウのなっている季節にブドウ畑の横を歩くことは、本当に気分爽快になります。ぜひ一度あなたもワインと共に、ワイナリー巡りをしてみませんか。

(参考)

原茂ワイン 入り口



ワイナリー



事例15)趣味活動(ダイビング)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成20年11月
【ヒアリング場所】自宅(新宿区)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 東京都新宿区／男性／30代後半／会社員／夫婦二人／東京都
【二地域活動等の場所】 ・国内は高知県幡多郡大月町柏島 ・海外は複数地域
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 ダイビング
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 年に数回(主に晩春～初秋)、2～3泊
【二地域活動等の開始時期】 2年前
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等をはじめたようになったきっかけ】 友人の紹介で連れて行ってもらったこと。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(他の場所を選択しなかった理由)】 ・友人が当該地域に明るかったため、自分たちが新しく地域を開拓する必要がなかったこと(飲食店、宿泊先、その他友人のコンネクションを利用できたこと)。 ・ダイビングスポットとして魅力的な海であったこと。 ・食事が美味しい地域であったこと。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 ・ダイビングのために現地へ訪問したのは友人に連れて行ってもらったときが初回であるが、夫婦ともに高知県自体には過去に何度も訪れた経験があった。 ・情報の入手方法は友人たちのクチコミがほとんど。
【(二地域居住等を始める際の初期費用)】 ・シュノーケリングができる基本的なグッズを買い揃えたのみで、数万円
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
平日は東京で会社勤め。毎年、晩春から初秋までの期間で高知県の柏島にダイビングに訪れる(年に複数回訪れることもある)。宿泊はダイビングポイントから少し離れているものの、毎回同じ宿(土佐清

水市大岐の浜)を利用。ダイビングをしていない時間帯は宿泊先の向かいの浜辺で素もぐりやシュノーケリングを楽しんだり、宿のオーナー一家との交流を楽しんでいる。宿はリピーターが多く、夕食時には宿泊客同士で交流(飲食・音楽演奏等)を行うこともある。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを始めるにあたって直面した課題】

- ・ダイビングスポットが空港から最もアクセスが悪い場所にあるため、往復に非常に多くの時間を費やしてしまう
- ・本宅不在時のペットの扱い
- ・ダイビンググッズの運搬

【上記の課題解決のために役立ったこと】

- ・ペットホテル
- ・ダイビンググッズは宅急便を利用

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特に無し

【特に地域の人との関係について(地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他)】

- ・地域の人との関係:宿の一家とは親しく付き合っている
- ・関係を持つに至った経緯:友人の紹介
- ・地域の人との関係が役に立ったか:訪問するたびに歓迎してくれ、コネクションも広がってきていることから、役に立っていると考えている
- ・地域の人たちの意識の変化:同じ高知県内での移動者は少ないが、東京から足しげく通って来てくれるお客さんがいることに気づいたとのこと
- ・地域の人たちに喜ばれたこと:リピートして訪問していること

5. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった

(理由)趣味の幅を広げることができる地域を見つけたことや、地域の資源(自然環境、郷土料理等)を楽しむことができるから

【二地域活動等を行う前に想定していたライフスタイルとの違い】

特に無し

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

特に無し

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス】

特に無し

事例16)のんびり田舎暮らし(田舎と田舎の二地域居住)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】自宅(熊本県上天草市)
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 熊本県阿蘇と天草(住民票は阿蘇)／男性／60 代後半／無職(元大学職員)／夫婦(妻 60 代前半)及び母親(90 代前半)、子供 3 人(長男・横浜市、次男・熊本市、長女・熊本県八代市)は独立／現役時代は名古屋勤務、大元の出身地は夫が福岡、妻が岐阜
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 名古屋から熊本県阿蘇に移住し、天草と二地域居住
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 夫は釣りや山登り、妻は料理など
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 下記のプロセスに記載のとおり。
【二地域活動等の開始時期】 下記のプロセスに記載のとおり。
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 もともとが旅行好きだったが、普通の旅行では満足できず、そのうちコンドミニウム型施設で生活を楽しむようになった。名古屋在勤中は三重県にあったクラインガルテンを 3 年借りた。そのあたりから田舎暮らし願望が強くなった。また、妻の母親の里が鹿児島であり、妻も田舎暮らしには抵抗がなかった。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 福岡出身の夫は山派、岐阜出身の妻は海派。その両方のニーズを満たす必要があった。また、たまたま長女が阿蘇の大学に通っていたことも理由の 1 つ。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 当初の希望地は沖縄だった。沖縄移住もあきらめていなかったのですが、2002 年の定年退職と同時に、阿蘇で売家を借家として借りた。阿蘇に決める前には、大分～九重～阿蘇界隈を何度か一人で見て回った。最初は市町村、そして不動産屋を回ったが、実際に見てみるととても住めない物件ばかりだった。そのうち、妻も同行するようになって良い物件に出会った。2005 年には借家をそのまま購入した。2004 年に天草にも借家を借りた。ヨットを持っていたので、ハーバーを探していたときに、偶然、今の大家(漁師)に出会った。 名古屋の家は 2002 年以降、貸していたが、2006 年に売却した(現在、名古屋の拠点は無い)。

【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】

阿蘇は家賃 4.5 万円／月だったのを 5～600 万円で購入した(10 年住んだと思えばとが取れる)。土地は 220～30 坪。天草は家賃 4 万円／月。2重生活によるコスト増は電気、ガスの基本料金ぐらい。阿蘇の水道は湧き水である。特別ヨットの海面使用权や係留代はゼロ。地元の方々は非常に協力的だ。車のガソリン代が年間 10 万円、船の燃料代が 5～6 万円／年。それ以外は医療費や冠婚葬祭費が特別かかるくらいなので、年金の範囲内で十分生活できる。

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

4 月～11 月初旬は阿蘇、11 月中旬～3 月は天草に住む。地域活動の拠点は(住民としての義務を果たしているのは)住民票を置いてある阿蘇。

阿蘇と天草の間は車を使って 2 時間半で移動する。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

別荘ではなく一般の住宅に住みたかったが、いきなり購入する勇気はなかった。かといって、借家で良い物件というのはなかなか見つからなかった。地方における借家の受け皿は非常に少ない。身柄のはっきりしない人に貸したくないというのが本音だろう。変な人に貸すことになったら、貸した本人が地域全体から非難を浴びる。半年ずつの生活なので、電話を休止するとその度に電話番号が変わる。今はインターネット電話を使うことで解決した。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

最初は夫 1 人で不動産屋を回ると、「変な人」扱いを受けたのかも知れない。まともな物件を紹介してくれなかった。そのうち妻も揃って不動産屋を回ったとたんお気に入りの物件が見つかった。自分たちの本気度が伝わったのかも知れない。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

不動産探しから移住までの段取りをしてくれるようなサービスがあると良い。ここに連絡すれば済むというようなサービス。今は個々のサービスはあっても、ネットワーク化されていない。

天草には立派なサイクリングロードが整備されているのに使われていない。漁師の釣り船だけに頼らなくてもレンタルボートを使えるようにして、気軽に仲間で動ける仕組みもあれば良い。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

別荘ではなく、最初からいわゆる住宅に住みたかった。阿蘇はペンション村と集落の住民がはっきりと分かれているが、もともと温泉観光地であり、集落の住民も開放的だ。他の地域で聞くような排他性はあまりない。天草も似ている。

阿蘇では年 5～6 回の草刈、環境整備、神社の氏子委員、掃除などの地域活動に参加している。天草滞在中も阿蘇まで戻る。その他にも、お宮とかの集まりの場がとても多い。阿蘇は地域住民のリーダ

ーによる社会教育や公民館活動などがしっかりしていて、このリーダーとの繋がりは大事だ。入会地の組合制度があるが、5年経って(2008年)によろやく加入をすすめられた(信用を受けた)。集落の住民とは一定の距離感を持ったほうが良いという付き合い方もあるだろう。何年経っても村民になり切れない人もいる。

天草ではあまり地域活動をしていない。でもゴミ出しとかは必要なので、区長に説明して理解してもらっている。今のところ心苦しく思っている。移住者は過疎の進む地域で重要な力だから、地域と信用関係をつくることはやはり重要だ。

なお、阿蘇は観光協会も一生懸命だ。山登りや木工、色んなサークルがある。南阿蘇旅案内人協会では歴史歩きガイドブックを作成している。これまでのイベント型から長期滞在型、レポート型への脱却を目指している。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった。天草の人は阿蘇、阿蘇の人は天草に住んでみたいという方が大勢いる。母親の体が良くなった。阿蘇ではよく歩くし、温泉三昧。天草では魚介類が豊富で食べるものに不自由しない。山と海両方の生活が楽しめるので、横浜に住む長男が孫を連れて帰省する機会が増えた。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

近所付き合いや助け合い(手間返し)のレベルが予想を遥かに超えていた。昔の結いである。例えば葬式などは業者に頼むことなく、地域住民すべて取り仕切る。その間、会社は休む。税金徴収も役場に代わって区長が行う。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

これからは車の運転が心配になる。公共交通機関が不便なので車は必須。阿蘇には病院も多くて充実しているが、天草には少ない。母のかかりつけ医は阿蘇にいる。ただし今のところ困ったことは生じていない。将来的には阿蘇と都市(熊本市あるいは那覇市)の二地域居住になるかも知れない。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

最初は気軽、身軽に始めるべきだ。すぐに住宅を購入するのではなく、本拠の住宅は持ったまま、借家やクラインガルテンで始める。その過程で見定めていけば良い。

(参考)上天草市



事例17)クラインガルテン(農業)①

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】笠間クラインガルテン
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 (夫)東京都足立区／男／60 代前半／無職／夫婦の他独立した子が3人／神戸市 (妻)東京都足立区／女／50 代後半／薬剤師／同上／
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 茨城県笠間市(笠間クラインガルテン)
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 (夫)読書、畑作業、ビデオ鑑賞 (妻)旅行、読書
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 (夫)ほぼ毎週通い、年間約 150～180 日 (妻)週末のみ
【二地域活動等の開始時期】 2005 年 3 月
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 (夫)退職したら畑仕事をしたいと思っていた。しかし腰が悪いため無理だろうとあきらめていたが、ひざについて作業をすれば問題ないことを知り、畑仕事のための場所を探すようになった。 (妻)夫から笠間クラインガルテンを借りると聞いた時、自分はぜったいに行きたくないと言った。ただ、荷物を運ぶのを手伝うために何度か笠間へ通ううち、笠間クラインガルテンのガルテナー(入居者)の方々と知り合いになり、何のしがらみもなく話ができることがとても楽しくなり、自分も通うようになった。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 電車、車とも自宅からの交通の便が良いこと。また、農業をはじめするための仕組みが整っていること。暖かく、温泉が近くにあること。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 (夫)退職後は畑仕事をしたいと思い、場所を探していた。笠間クラインガルテンのことはテレビで見て知っていた。妻と週末に温泉めぐりをしていたらたまたま近くを通りがかり、見学をして気に入り、農作業の講師がいることも確認できたため、退職の1年前に申し込んだ。1年ごとの契約更新だったので気軽に申し込めた。

<p>【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))</p> <p>年間 40 万円</p>
<p>3. 二地域活動等のライフスタイルの内容</p> <p>農作業</p>
<p>4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題</p> <p>【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】</p> <p>夫婦ともに農業については全くの素人だった。</p> <p>【上記の課題解決のために役立ったこと】</p> <p>笠間クラインガルテンは農作業に必要な資材がそろっており、また講師が一から丁寧に教えてくれるため、素人が農業をはじめするための仕組みが整っていた。</p> <p>【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】</p> <p>—</p>
<p>5. 特に地域の人との関係について</p> <p>【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】</p> <p>農業の講師の方には大変お世話になっている。他の地域の方とも気楽に話したいが、なかなかうちとけるのは難しい。特にお年寄りの方は方言がわかりにくく、話しづらいこともある。</p>
<p>6. 今後の予定</p> <p>【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】</p> <p>大変満足している。物が多少なくても生活していけることがわかったし、何より夫婦の会話が増えた。</p> <p>【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】</p> <p>(妻)この生活をはじめて1年目はすべてが楽しく過ぎて行ったが、2年目ごろから「来週笠間に行ったら～をしなれば」と考えることが多くなり、笠間の生活が少し負担になった時期があった。</p> <p>【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】</p> <p>笠間クラインガルテンは5年で契約更新ができなくなる。現在4年目なので次の場所を探している。せっかく笠間で仲間もできたのでこのまま笠間にいたいと思うこともあるが、定住よりも二地域居住が自分たちには合っているので、また別の場所を探したい。その際は笠間のように管理が行き届いている場所を探すつもりである。</p> <p>【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】</p> <p>(夫)二地域居住先ではあまり物を持たない方がよい。</p> <p>(妻)二地域居住先に行くことができる限られた時間の中で「～をしなれば」と考えるのではなく、「だめなら次でよい」という程度に構える方がよい。</p>

(参考) 笠間クラインガルテン



事例18)クラインガルテン(農業)②

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成20年12月
【ヒアリング場所】笠間クラインガルテン
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 東京都新宿区／男／50代後半／会社員／夫婦と独立した子が1人／東京都
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 茨城県笠間市(笠間クラインガルテン)
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 テニス・スキー
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 毎月3回程度、金～日の2泊3日／回
【二地域活動等の開始時期】 2008年4月
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 自宅のベランダで簡単な野菜やハーブを栽培していたが、退職したら地べたで農業をやってみたいと思っていた。既に退職された方々がそのような暮らしをしている様子が様々なメディアで取り上げられているのを見て、自分のやりたいことをやりつくされてしまうのではないか、という切迫感を覚え、退職前から二地域居住を始めることにした。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 自宅からの距離が遠すぎず、近すぎずというところで探していた。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 千葉県、神奈川県を中心に探していたが、仕事で高速道路建設に携わっており、たまたま笠間クラインガルテンを知っていた。一度見学に来たところ一目見て気に入ったので申し込んだ。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 継続費用:年間40万円程度
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
農業と、できるだけ物を買ったり捨てたりせずリサイクルして使うエコ生活を満喫している。たとえば段ボールで本棚を作成したりなど。
4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

家族同然の犬を飼っているが、笠間クラインガルテンは犬の入場が禁止されている。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

解決されていない。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

犬は好き嫌いがあり、他のガルテナーに迷惑をかけるわけにはいかないので納得している。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

農業の講師としてお世話になっている。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

大変満足している。自分が作った野菜(地べたで作っているので“じべたぶる”と呼んでいる)を妻が立派だね、と褒めて料理をつくってくれ、それを食べるのがとても楽しい。これまでも妻とはよく話す方だと思っていたが、また新たな話題ができた。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

あまりに二地域居住が楽しく、休日に会社に行かなくなり、気づくと笠間の天気・気温をチェックするようになった。また、笠間ではごみ出しが厳しいこともあり、東京に帰ってからでも分別やできるだけゴミを出さない生活を心がけるようになった。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

まだこの生活を始めて1年目ということもあり、やることなすことすべてが楽しい。今後は様々な課題が出てくるだろうが、まだしばらくはこの生活を続けたい。ただ、年をとればとるほど都会の方が便利なので、そちらに戻るようになるだろう。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

こういった生活は退職してからと思っていたが、やってみるとできるものだ。家族の気持ちにまともなればできることなので、若い家族にもぜひやってもらいたい。

事例19)クラインガルテン(陶芸・絵画)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 12 月
【ヒアリング場所】笠間クラインガルテン
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 千葉県鎌ヶ谷市／男／60 代前半／無職／夫婦及び母が同居、その他独立した子が3人／新潟県
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 茨城県笠間市(笠間クラインガルテン)
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 陶芸・絵画・ゴルフ・音楽
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 月平均3回、2～3日／回
【二地域活動等の開始時期】 平成 19 年 4 月
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 母親と同居しており、妻が息抜きできる場所が欲しかった。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 自分は趣味の絵がかければどこでも良かったが、妻のためにも日常を忘れられる近すぎず遠すぎない距離にある場所を探した。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 以前からクラインガルテンの存在は知っていたが、たまたまゴルフで笠間に来ていた際に笠間クラインガルテンの近くを通り、興味があったので中に入ってみた。ちょうど「男の料理教室」が開催されており、参加者の方々が招き入れてくれ、料理をご馳走になった。とても雰囲気良く、妻が気に入ったためここに申し込んだ。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか)】 年間 40 万円程度
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
笠間は陶芸のまちということで、こちらに来てから陶芸を始めた。妻は農業にはまっており、朝早くから作業をしている。私自身は作業が大変な時は手伝うが、あまり積極的に農業に携わることはない。
4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

笠間クラインガルテンは素人が農業をするための仕組みは整っているが、陶芸をするための仕組みは全くない。そのためサークルを作って自分たちで活動しているが活動場所・講師の選定などやることが多く、もっと気軽に陶芸ができればと思う。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

—

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

農業以外に素人が取り組める仕組みを用意してはどうか。陶芸に限らず絵画・詩など何でも良いが、クラインガルテンの特色を出すという意味でも有効だと考える。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

農業の先生としてお世話になっている。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

とても満足している。何より地元のしがらみのないガルテナー同士の交流が心地良い。おそらく皆さん意識して人間関係を持ちこまないようにしており、ガルテナー同士仲良く話すが、その人が地元で何をしているのか、どういう仕事をしていたのかなどは知らないことの方が多い。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

妻は農業にはまっており、「次は～しなければ」と考えてしまっている節がある。ゆっくりするためにこちらに来ているので、もっとゆったりとかまえられようようにしたい。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

二地域居住というスタイルが自分たちには合っており、移住は考えられない。しかし二地域居住は元気でなければ続けられない。笠間クラインガルテンの契約が切れる時にまだ元気であれば、また次の場所を探したいと考えている。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

二地域居住は自宅と二地域居住先を行ったり来たりするためエネルギーがいる。ゆったりとかまえてやる方がいいのではないか。

また、退職してから実行に移すのではなく、子育て世代が二地域居住できるようにすると良い。受け入れ施設としてはあまりイベントを密に計画せず、子育て世代が自分たちのペースで取り組めるようにすると良いだろう。

事例20)趣味活動(ステンドグラスの展示・販売)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成20年11月
【ヒアリング場所】浦安市の自宅
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 千葉県浦安市／女性／60代前半／主婦／夫婦と娘、孫2人／東京都
【二地域活動等の場所】 長野県茅野市
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 ステンドグラスの販売代行
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 ・通常:週末(木曜夜又は金曜)に長野着、月曜に長野発で帰宅 ・仕事(ステンドグラス):夏季に1週間程度仕事。その前後1～2週間、仕入、展示準備や後始末作業で滞在
【二地域活動等の開始時期】 2005年
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等をはじめようになったきっかけ】 ・夫の定年退職が迫ってきたこと ・いつも使用する(会員権を有する)ゴルフ場をはじめ、20年以上前から当該地を毎年避暑等で利用していたため、別荘を構えることを決定 ・ステンドグラスの展示・販売は浦安市で5年ほどまえから初め、別荘地でも実施
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 長年通っていたため、地理的にもよく把握しているため当該地に決定
【二地域活動等をはじめまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 20年以上前から毎年避暑やゴルフで利用
【(二地域居住等をはじめ際の初期費用)】 別荘購入費、引越し代、諸雑費
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
蓼科にて趣味のステンドグラス販売代行活動を行う。ステンドグラスの先生が偶然に蓼科の別荘の近隣に住んでいたことや、別荘地内のレストランが場所を提供してくれたことから、そこを利用して展覧会を開催したりしている。

また、二人の孫の子育てのためにも、ステンドグラスの仕事がないときでも夫婦で蓼科にて子守や畑仕事に時間を費やしている。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを始めるにあたって直面した課題】

- ・生活用品や食料について、両方の居宅で不足・余剰するものが多く発生し、想定外の支出がある
- ・郵便物・宅急便、新聞などの処理。郵便物や宅急便は予測できないタイミングで送られてくる
- ・本宅の庭木の水遣りができない

【上記の課題解決のために役立ったこと】

- (・やむを得ず両方の居宅で必要となったものは購入したり、余剰となった食料は廃棄している)
- ・郵便物はご近所に預かってもらう(ご厚意)。宅急便については対応できていない(一部、携帯電話を登録して適宜連絡が入る)
- ・ご近所に水遣りをしてもらう(ご厚意)

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

—

【特に地域の人との関係について(地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他)】

- ・新規の別荘地域であり、リタイアして田舎生活を始めた人や別荘を建築した人が多く、生活環境や世帯の状況(年齢、キャリア等)が近い人が多い
- ・このため、近隣との関係は良好。自分たちより前から住んでいた方からは、家庭菜園等のノウハウや生活するうえでの知識や知恵等を提供してもらっている
- (・管理事務所がある別荘地であり、自治会も無いことに加え、移動は常に車のため、別荘地以外に住む地域の人との関係はない)

5. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった

(理由)趣味を活かせる場所があること、夏場の気候が良いこと、自然が豊かなこと、孫たちの成長にもプラスになると考えていること

【二地域活動等を行う前に想定していたライフスタイルとの違い】

想定外の支出が多い

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

体力的、精神的に、いつまで二地域間を移動するライフスタイルが継続できるのか。二地域間の移動ができなくなった場合、二軒の居宅をどのように整理して行くか

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス】

無し

事例21)趣味活動(登山)

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】直接面談によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成20年11月
【ヒアリング場所】都内の喫茶店
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 横浜市／男性／50代前半／国家公務員／家族と同居4人／横浜市
【二地域活動等の場所】 山梨県北杜市
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 スポーツ(主にテニス、水泳、ゴルフ)など、野外で活動することが多い。
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 年間2週間程度(期間は、GWや年末年始に1週間程度、その他は、スポットで2～3日)
【二地域活動等の開始時期】 平成2年頃から
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等をはじめたようになったきっかけ】 先に活動を始めていた兄に誘われてから。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 地域居住者との信頼関係を構築すること。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 意思決定、即実施なので特に準備期間を置いていない。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 年収の内数であり、正確な金額を把握していないと言って良いが、懐古的な自然主義派や環境保護派ではない。スローライフ、スローフード論者にも否定的な見解を持っている現実派である。
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
電気水道ガスなどライフラインが整っていない登山者用の避難山小屋での生活なので、本格的なアウトドアライフ(朝起きて、沢へ必要な量の水を汲みに行き、薪を割り、火を熾し、身の回りの仕事を済ませ、夜ランプの下で読書やラジオを聞きながら酒を酌み交わし、寝ると行った何気ない日常の休日暮らし)と言って良いが、懐古的な自然主義派や環境保護派、山岳愛好家ではない。また、スローライフ、スローフード、LOHASや昨今のいわゆる“スピリチュアル”と言った非科学的な精神主義など、非現実的な考え方に対しても極めて批判的である。 地域居住者である小屋の管理人の手伝いを除けば、普段の休日程度に生活している。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを始めるにあたって直面した課題】

日常生活の延長なので、特になし。

強いて言うならば、日本の気候が高温多湿のため、長期間不在にするとカビが生えたり、寝具が湿気たり、雑草が伸びたりする点が二地域居住の課題である。

また、現役世代が二地域居住するための社会制度がない点。(休暇が取りにくいなど)

【上記の課題解決のために役立ったこと】

特になし。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特になし

強いて言えば、公的な支援やサービスに依存せず、自立自尊、自らの力で道を切り開くべきとの姿勢である。

また、1年に1度、長期(30日～60日間程度)休みを取らせれば、国内の移動人口が増えると考えられるため、その中の数%が二地域居住のトレーニングとして、一定の地域での模擬居住に入るといった期待ができるのではないかと。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

山小屋という特殊な場所なので、特定の地域居住者以外との関係が薄い。(出会わない)

関係を持つに至った経緯は、登山者と山小屋の管理人と言う立場での出会いから交友関係を築いていった。

地域居住者から喜ばれた点は、家族的な付き合いが続いている所くらい。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かった

(理由)

自分のライフスタイルを変えることなく、家族揃って普通に生活できること。

【二地域活動等を行う前に想定していたライフスタイルとの違い】

日常生活の延長なので、特にライフスタイルの違いを生じていない。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

移住と違い、地域居住者とWin-Winの関係を維持できなくなれば、二地域居住を解消すれば良いので、今のところ将来的な問題が見あたらない。

強いて言えば「二地域居住を解消するタイミングの見極めを誤らないか?」と言った点がある。(経済的理由、健康的理由、地域居住者との人間関係の変化等々、引き際の判断。)

考えて行けば他にもいろいろ有ると思うが、一番決定的なのは、家を空けると心配。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

移住との違いを理解すること。すなわち地域居住者と触れ合う機会が物理的(行動範囲、滞留時間)に少ないので、柔軟な考え方が必要。(過度に地域に溶け込もうなどと考えず適度に割り切る)

当然ながら、地域の習慣やマナーを遵守しなければならない。二地域居住と地域居住者がステークホルダーの関係であるとの認識を持つことが不可欠である。

普通の人は、自分の回りを見て「他の多く人が始めたら自分も始める。」程度の意識なので、そこを変えれば動き出すかも知れないと考えている。

全てにおいて排他的(横並び重視)な国民性は、地元居住者にも二地域居住者にも存在する共通の性質なので、この性質を変える施策の展開が必要かと考える。両者ともいろいろな人と接して”免疫”を獲得することが一番かと思っている。

我が国の地方自治制度は、結構どろどろした土着風土が残存している(すなわち村社会の名残)。

市役所にいろいろお願いするには、自治会に所属していないと、ほとんど受け付けてくれない。また、ゴミも集めてもらえない。

他地域に住んでいる間の自治会費はどうするの？他地域に住む場合、自治会に入れるの？

などと言った問題も考えて行かねばならない。

住んでも居ないのに自治会費を払うのは、面白くない。

しかし、自治会の行事にも参加しない奴を地域の住民と受け入れたくないはず。

ワンルームマンションが自分の住む自治会に建ってしまうと大変なトラブルを抱え込む。

留守がちになると、ご近所づきあいが中途半端になるので、どちらの地域にも住みにくいことに気づかされる。

事例22)のんびり別荘暮らし

ヒアリング調査の方法等

【ヒアリング方法】面談によるインタビュー形式

【ヒアリング時期】平成 20 年 11 月

【ヒアリング場所】長野県茅野市の不動産会社事務所

1. 基本属性

【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】

長野県茅野市／女性／50 代後半／専業主婦・自称「コミュニティーライター」／妻、子(娘):独立(クラシックバレエインストラクター)／妻:神奈川県茅ヶ崎市、夫(60 代前半):東京都杉並区

【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】

出身地の茅ヶ崎市から 2007 年 6 月に茅野市に移住。ただし、神奈川県藤沢市で子(娘)と共同運営しているスタジオの企画・運営のため時々藤沢に行く。夫は東京で仕事(千代田区の会社のサラリーマン)をもっており、平日は夫の実家(杉並区、94 歳の母が存命)で生活し通勤。金曜夜に茅野に来て土日を過ごし、月曜朝に帰京する(二地域居住)。

【趣味(通常の余暇の過ごし方)】

若い頃の講師(家庭教師、作文教室等)の経験、自治会役員経験、スタジオ事務所の企画・運営経験(現在も継続)等を活かし、移住先の地縁ではなくテーマによる人のつながりの創出を図ろうと活動を再開しつつある。

【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】

妻は茅野市に定住(ただし、時々、藤沢に行く)。夫は平日に杉並区、土日に茅野市の二地域居住。

【二地域活動等の開始時期】

2007 年 6 月に茅野に移住

2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯

【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】

夫と茅ヶ崎に在住時、当初は転居する予定は無かったが、猫を飼っており、大きな家・スペースを望んでいたとともに、地域社会との関係など、長年、物理的・精神的に手狭に感じていた。建て替えの話が浮上して仮住まいをすることになり、猫がいるため高額家賃の別荘のような広い家を選択せざるを得ない状況であった。ネット検索中に偶然、横浜の工務店の HP を見て問い合わせ、茅野市の家を紹介された。

【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】

茅野市には夫婦で 2005 年 5 月に初めて訪れた。空気や空の青さが茅ヶ崎と大きく違った。また、現地の不動産業者から紹介された土地が広がった。その不動産業者は、「地域と関わる煩わしさが無い所を紹介する」「生活に必要な情報を提供する」という考え方をもっており、それに共感するとともに非常に助かったことも茅野に決めた要因として大きい。

【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】

2005年5月に初めて茅野市に訪れ、2ヶ月後に土地を購入した。1年半後に建屋を建築し、2007年6月に移住した。移住地域と土地の場所は妻が決め、夫に同意してもらった。

【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】

土地代 1,500万円(650坪)、建築施工費 4,000万円

3. 二地域活動等のライフスタイルの内容

地域との関わりは一切ない。工業団地近隣の別荘地であるが、周囲に数戸しかなく移住者が少ないため、地域コミュニティがない。移住後1年間は静養しようと考えており、そろそろ、藤沢でのスタジオ事務所の企画・運営への参画を再開するとともに、茅野市内でのテーマで繋がる人間関係をつくっていきたい。今後、「コミュニティークリエイター」(注:本人の造語)として活動を始めたい。

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

生活環境の面では、冬の寒さ・雪への対処が課題である。ただ、かつてカナダに住んでいたのである程度予想できる。移住先には財産区があり、茅ヶ崎とは地域との関わり方が全く異なる。この財産区では行政サービスの中で享受できないものがある。例えばゴミ収集サービスが受けられないため、民間に直接に依頼して引き取ってもらっている。財産区によっては消防やゴミ収集等のために入区金 30万円、月5千円が徴収されるところもあるとのこと。

ライフスタイルの面では、地域の里山が抱える課題(鹿の食害)と自分の暮らし方の関係がどのようになるのか不安である。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

現状では特に無し。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて)上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

現状では特に無し。

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

地域とは付かず離れずの関係を維持したいと考えている。地域の間人関係というものから離れるために茅野に来たので、地域の嫌な面に入らないように付き合っていく。ただし、都市では見られない地域独自の変わった部分(慣習など)に対して声を出していきたい。実際、地元の特に関若人の中には、移住者が新しい風を吹き込んでくれる(変えてくれる)という期待感があるようにも感じる。

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

良かったと考えている。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

特に無し。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

永住予定であり、財産区が今後のどのようになっていくか。また、会社が保有する隣接地では木が切られ駐車場となったが、今後どのような開発がなされるか、隣接する個人土地所有者がどのように土地利用をするかといった周辺的生活環境面の先行きに不安がある。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

二地域居住や移住をするかどうかは本人の生き方次第だが、実際にする場合には、地域性や土地柄を見る目を養っておくとともに、情報収集をしっかりとすべき。また、病院施設や各種制度など広い意味での社会システムを含めた地域社会がどのようになっているのか、どのように付き合っていくかを考えておくべき。一言で言えば、事前に本人がよく勉強すべきということ。

事例23) 農業体験テーマパーク

ヒアリング調査の方法等
【ヒアリング方法】電話によるインタビュー形式
【ヒアリング時期】平成 20 年 11 月
【ヒアリング場所】東京から対象者の自宅(大阪)への電話
1. 基本属性
【現在の住所／性別／年齢／職業／家族構成／出身地】 大阪市鶴見区／男性／40 代前半／会社員／妻: 30 代後半(パート)、長女: 10 代後半、長男: 10 代前半、次男: 10 歳未満)／夫: 広島県、妻: 兵庫県
【二地域活動等の場所(移住された方は移住前の居住地)】 大阪市内に住みながら、農業体験施設へかなりの頻度でレポート利用している。
【趣味(通常の余暇の過ごし方)】 夫: 読書 妻: 特になし
【二地域活動等にあたっての往来頻度、滞在日数など】 5 年前に始めて、9 回宿泊で利用。日帰り利用として、既に数十回訪問している。
【二地域活動等の開始時期】 5 年前
2. 二地域活動等を始めたきっかけ・経緯
【二地域活動等を始めるようになったきっかけ】 旅行雑誌で「モクモク手づくりファーム」のことを知り、子供達が楽しく遊べそうな印象を持ったので、まず行ってみた。
【二地域活動等の場所を選択する上で重視したこと(その場所の良かった点等)】 食(安全・美味な食材)と楽しみの共存。
【二地域活動等を始めるまでの期間、意思決定から実施までのプロセス(現地への訪問回数、情報の入手方法など)】 直ぐに車で日帰り旅行を行った(ドライブ感覚)。
【(二地域居住等を始める際の初期費用及び継続費用(月もしくは年どれ位かかるか))】 モクモク手づくりファームは自宅から自家用車で、1 時間 30 分程度の場所にある。宿泊費は、家族全員で泊まっても比較的安い。農業体験やイベントに参加する場合には、別途費用が掛るが、他のテーマパーク等に比べると割安感がある。
3. 二地域活動等のライフスタイルの内容
宿泊・日帰りとも、イベントへの参加が中心。毎季節毎のお祭り、収穫祭、トントン祭り、あるいは、キャンプやウォークラリー等に積極的に参加している。
①スタッフの親切さや元気さ
②ハムやソーセージといった食材の安心感

4. 3のライフスタイルを行うにあたっての課題

【3. のライフスタイルを行うにあたって直面した課題】

伊賀市の立地による気候上の問題点として、冬になると寒さが厳しいので、訪問する頻度がどうしても減る。

【上記の課題解決のために役立ったこと】

外での体験だけでなく、室内で体験するイベントに参加する等。

【(課題を解決できていない場合は、それを解決するために必要な条件・支援などを含めて) 上記ライフスタイルを行うために必要なこと、必要なサービス】

特に感じていない。

[モクモク手づくりファームは近年急速に発展・成長しているため、リピーターを飽きさせないようにするために、常に新しいイベントや施設の拡充を行っているため、高頻度のレポートが可能となると考えられる。(JRI コメント)]

5. 特に地域の人との関係について

【地域の人との関係、関係を持つに至った経緯、地域の人との関係が役に立ったか、地域の人たちの意識の変化、地域の人たちに喜ばれたこと、その他】

同ファームのイベントに数多く参加しているので、スタッフの人達も顔なじみ。他の家族とは、面識がある程度(以前のイベントで顔を合わせたことがあるなど分かる)で、相互のコミュニケーションはない。

[同ファームは農事生産法人であり、元々は近隣の養豚農家との関係が深かったが、養豚農家の高齢化等に伴い、ほぼ全ての農家が廃業してしまったため、近年近隣農家との関係が薄くなってきている。すぐ近くでは耕作用の農地を確保できないため、車で片道 30 分程度のある程度離れた複数の農地を確保し、同ファーム自ら野菜等の栽培を行っている。元々、伊賀盆地は古琵琶湖層のため、畑作には向かず、稲作に向く土地柄であるが、水田は昔湖の底だった関係で、重い粘土層となっており、底なし沼のような状態であり、稲作を行うのにも大変な土地である。(同ファームからのヒアリング結果)]

6. 今後の予定

【二地域活動等を行って良かったか否か、その理由】

- ①食材そのものの味が分かった。
- ②家族で一緒にできる、一緒に何かを作るという活動ができる。(家族の一体感)
- ③スタッフの方々と一緒になって、積極的に活動できる。

【二地域活動等を行う前に想像していたライフスタイルとの違い】

- ①人と自然と動物に対して、優しい気持ちを持てるようになった。
- ②ストレスの解消ができる。

【これからの将来に向けた問題点・課題や心配なこと】

家族側: 子供が中学生以上になると、学校の部活等で時間的に厳しくなり、以前のように家族全員でという形では楽しめなくなってきた。

ファーム側: ①食材に関して、安全なのは評価できるが、もう少し値段を安くしてほしい。

②子供が遊べる要素が少ないので、アスレチック施設のような自然の中で遊べるような「遊びの要素」を入れた施設が欲しい。

【二地域活動等の実践を希望する人に対するアドバイス(実践する上でのポイント等)】

- ①「ミニ豚ショー」は珍しいと思うので、食育にも役立つと思われるので、お奨め。
- ②ハム・ソーセージが安全で美味しいので、これもお奨め。

(参考)モクモク手づくりファーム



(<http://www.moku-moku.com/>)



3. 長野県モデル事業の参加者アンケート結果

長野県のモデル事業の参加者へのアンケート結果は以下のとおりである(回答者数 10 人)。

1. お住まいになった物件について

①入居なされた際、掃除は行き届いていたか否か。

選択肢	回答者数(人)
綺麗であった	8
普通	2
汚れがあった	0
(自由記述)	(綺麗であった)和室から外へ出る靴ぬぎ台の下に、ハチの巣があるのでしょうか。ハチが出入りしているので和室から外へ出るのは止めておりました。

②屋内家具・設備(電化製品等)に関して、不便または不足している点があるか否か。

選択肢	回答者数(人)
満足している	3
普通	2
不足していた	4
無回答	1
(自由記述)	(満足している)もともとあった設備は十分でしたが、冷蔵庫が途中で冷えなくなってしまい代替えも物も早く対応していただき助かったが、ちょっと小さめであったのが、多少不便を感じました。 (普通)電熱調理器は使いにくかった。 (不足していた) ・ゴミ箱はもう少し欲しかった・キッチンバサミがあると良いです・北側飾り棚の引き出しが使えると良かったです (不足していた)DVD の設備があると便利だった。冷蔵庫が旧式のように、入れた物(野菜など)が凍ってしまうので困った。 (不足していた)クローゼット、ダイニングキッチン、整理ダンス (不足していた)洋間(ベッドルーム)にコンセントが欲しいとおもいました。 (無回答)長期滞在するには台所が狭く不便でした。物置が少ないのも同様です。このビラはそうした設計ではないのかも知れませんが、部屋そのもの、レイアウトはとてもよいと思います。

③備品(寝具・食器・調理器具・石鹸やシャンプー等)に関して、予めご準備された内容(入居時に渡した備品一覧表)をどのように感じたか。(複数回答)

選択肢	回答者数(人)
一通りそろっていて便利だった	7
足りないものがあった	5
必要が無く使用しないものがあった	4
無回答	1
(自由回答)	(使用しなかったもの)調理器具・シャンプー・トースター (足りないもの)アイロン、ヘアードライヤー、果物ナイフ、トースター(コーヒーメーカー) (全く使用しなかったもの)石鹸 (足りないもの)キッチンのタワシ (足りないもの)台所用洗器、室内用物干

(足りないもの)食器に小鉢のようなものがほしいと思います。
 (使用しないもの)やかんは、電気ポットがあれば必要ないのではないのでしょうか。
 (一通りそろっていて便利だった)良く選ばれ準備されており(キメ細かい配慮)感心した。
 (足りないものがあった)(自分で持ってくれば良いのだが)不足を感じたものは小さな手鍋、サラダ皿、タッパー類、アイロン

④備品について、今回『別荘マンスリー賃貸』では、予め備品を準備して物件の提供をしたが、必要かと思うか否か。

選択肢	回答者数(人)
費用を払ってでも必要である	3
備品は必要ないので、低価格に抑えたほうが良い	0
オプションで選べた方が良い	7 (「一部オプションで選べたほうがよい」、の回答を含む)
その他 (自由記述)	1 (一部オプションで選べたほうがよい) 備品に関し、他人と共用して良い備品と、消耗品ないし共用がいやな備品を分けて、後者をオプションとするような方法もあると思いますが(共用がいやな備品…まな板、スリッパ、フキン、はし、食器スポンジなど) (オプションで選べたほうがよい) 「好みがあるからね」(妻) (その他)備品は便利だったが、費用が高すぎるのでは。シャンプー、スリッパとかタオル類が備品か否かわからない。各自家で使用しているものの方が使いやすいという事もある。 (オプションで選べたほうがよい)食器、鍋類は中国製が多かったので使用せず、買いました。 (オプションで選べたほうがよい)歯ブラシ、シャンプー等は好みがあると思います。 (オプションで選べたほうがよい)基本的なものは必要ですが、ベッドや食卓テーブルなどはオプションの方がよい。長期滞在者には消耗品の備え付けは不要と思います。 (費用を払ってでも必要である)調理用具、食器、洗濯洗剤、トイレトーパー等必要最小の者は揃えて貰って有難かった。寝具は多過ぎた。タオル類は 2 組程度で良く、あとはテナント手配で良いのでは。

⑤物件で匂いや間取りで気になるところがあったか否か。

選択肢	回答者数(人)
はい	5
いいえ	4
無回答 (自由回答)	1 (はい)今回和室なので洋室希望 (はい)玄関が多少カビの臭いが気になったが、消臭済みや住んでいて気にならなくなった。間取りは申し分なく良かったです (いいえ)匂いが無かった

2. 当社『別荘マンスリー賃貸』を申し込みする際に、他社の物件を検討したか否か。検討した場合、社名・比較した場所等について。

選択肢	回答者数(人)
はい	4
いいえ	5
(自由回答)	(はい)社名は忘れましたが、熱川のあたりを扱っているのがありましたが、東急さんの方が良さそうでやめました (無回答)那須、軽井沢、ニセコ (はい)軽井沢、北軽井沢 (はい)那須、軽井沢などのシーズン貸別荘や清里、北杜市周辺 (はい)レゾン長期滞在、他ネットによる貸別荘、伊豆、箱根、富士五湖、北海道 (いいえ)1ヶ月単位の賃貸物件はネットでは見つからず比較にはならなかった

3. 物件を決定するに当たって、重要視する点について。(複数回答)

選択肢	回答者数(人)
価格	7
管理状態	6
眺望	4
間取り	8
築年数	0
利便性	7
その他	0
(自由回答)	リゾートホテルに歩いて行かれる場所希望 (利便性)われわれは車がないので利便性が一番大切です (複数回答)間取りと管理状態、ホテルのようなかんじで使用できる利便性 (複数回答)リビングが広いこと、20畳ぐらいが望ましい。キッチンが広くて使いやすいこと。 (複数回答)東急のタウン管理、タウン住人の高齢化/来訪頻度の減少。建物の老朽化、特に戸建て別荘にも拘らずしっかりやっておられることに敬意を表する。道路管理、植栽、ごみ収拾など

4. 『別荘マンスリー賃貸』にて、蓼科で、再度利用してみたいか否か。またその理由について。

選択肢	回答者数(人)
はい	9
わからない	1
いいえ	0
(自由回答)	(はい)ホテル予約がハイシーズは大変なので、思いのほか便利に使わせて戴きました。 (はい)気候がとても良く、管理状態が良かったため。また東急さんの対応とサービスがていねいで早かったため。 (はい)快適に過ごせました。 (はい)楽しかったです。ありがとうございました。賃貸、購入問わず今後のご案内ください。 (わからない)蓼科に毎週末来るのはちょっと大変だったので、2週に1回ぐらいがちょうどよい頻度かと思った。が、そうになると、別荘にとまらずとも、ホテルにとまってもよいの

かな、と感じたので。ただ、マンスリーマンションだと、予約ナシにきたいときに思い立っていったのでよかった。

(はい)避暑地として、涼しく、乾燥しているのではないかと思うから。

(はい)当面、2ヶ月ぐらいなので、賃貸で検討の予定。

(はい)1ヶ月単位の利用方法は合理的で気に入っております。

(はい)ゴルフ、山歩きなど私どもの趣味が楽しめる。東京、名古屋の中間で且つ近いので親類知人などが気楽に訪ねてくれる。

(はい)上記3理由により、安心安全から是非利用したい。賃貸価格が気がかり。

5. 利用してみたい他の希望地について。(自由記述)

(自由記述)

ナシ

天城高原、清里、伊豆高原、熱川

国内…那須、北海道、鹿児島

たてしな以外では、新幹線で行けるところ、駅から近いところで山奥。(タクシー代が安いところ)。

たてしなではヴィラ9A、9Cが気になります(眺望が良さそう)

練馬インターから2~3時間程度で現地につけて、涼しいところ。軽井沢(?)

希望地は特にありません。夏に涼しく過ごせて、環境がよければ。東京からの利便性も重視しています。

特になし

もう少し東京に近い所北杜市周辺など。主人などは駅にもう少し近い物件(仕事で東京に行き来しましたので)と申しております。

夏。北海道での保養地。

箱根、日光、磐梯、安比、富良野など夏季に過ごしたいところがあるが、タウンとして整備されているか不祥なので(箱根、日光は別だが)何とも言えない。

6. 実際に『別荘マンスリー賃貸』をご利用いただき、経験されたことなど、暮らしをどのように過ごしたかについて。(自由記述)

(自由記述)

仕事で使用

トンボ取り、動物に出会った、川遊び、ドライブとハイキング、涼しい環境の中快適で健康な毎日を過ごせた

山歩き(近くに多くのトレッキングルートがあり、全く飽きなかった)、読書など

両親への親孝行で利用。バーベキュー、釣りなど楽しみ、また静かな読書の時間、自然散策…。地の野菜をいただき、ずいぶんリラックスしました。東京から早く出たいです。松本あたりでくらしたい。

東急リゾート内の散策、テニス、八ヶ岳自由農園で気球にのったり、動物をみたりしました。車山高原へのドライブ。ホテル観賞。溪谷を散策し、滝を見にいきました。

周辺のドライブと温泉、別荘地の散歩

①自習、②畑、③運動

諏訪周辺の観光地などにも行きましたが、主に、のんびりと緑豊かな中で過ごし、心身共に休養させてもらいました。

ゴルフ、山歩き、温泉など十分楽しませていただきました。

今回は行動派となってしまう、のんびりとした別荘ライフが出来ず反省している(来年からはのんびりする)。

ゴルフ(コース、練習(三井の森練習場で)、トレッキング(八ヶ峯、車山、御泉水など)、美術館めぐり(小淵沢平山郁男、長野信濃魁夷美術館など9館)、食べ歩き(北欧、イタリア、フランス、アメリカ(ステーキ)及びそば)、ドライブ(1ヶ月で3,000kmになりそう)、8/15 諏訪湖花火

7. 『別荘マンスリー賃貸』を今後普及させるために必要なことについての意見。(自由記述)

(自由記述)

ナシ

滞在期間を長くすることによって割引をもうけるなど、中古の紹介物件でマンスリー賃貸などをしてもらって、気に入るかどうかをためしてみるなど。

気持ち的には、今回利用させていただいて、非常に良かったので、今後あまり普及して取りにくくなるのが心配なのであまり普及してほしくない気もしますが、普及する事によって物件の数も増えるといいので、今後も宜しくお願いします。

・賃貸物件の選択の幅を広げる(場所、価格帯、間取り等)・・・先行投資

・週1回の掃除サービス

(・インターネット接続は標準装備としてほしい)

①特に8月など(高価時期)は、2週間滞在などで売れると、少しは安くなって若い人たちでも利用しやすいのでは？

②マンション型別荘のイメージ(その良さ)があまり一般的に知られていないようなので、先の価格面を含め再設定され、PRされればかなり流行るように思います。(今回はご協力できず申し訳ないです)

③中長期滞在の方のため(かつ車がない方)、ばらくら、千のツボ更科など施設外飲食店へのアクセスを良くする

④夏の時期だけでも仕事が終わってから金曜日の夜にこれるよう、夜8:00頃の増便バスがあるとよいですね

パソコンで検索したときにホームページにたどりつきにくかったので、ハーベストクラブ等にリンクをはる。又は、検索エンジンで別荘等のキーワードからたどり着けるようにすると、たくさんの人の目にふれてよいと思います。

今回は避暑という目的だけでお借りしましたが、全般的に満足しています。犬を連れてこられればもっと良かったと思っています。備品も事前に必要な項目があれば便利です。使い残り(?)などが結構出るのではないのでしょうか。気持ちよく入居できた事には感謝申し上げます。

お茶や軽い食事のできるサロンのような設備。

利用者としては、低価格はうれしいことです。例えば、半年間、一年間の利用などには、割引していただいたりするとよろしいですね。

もうすでにお調べのことと思いますがオーストラリアのホリデーアパートメントの実状は下記の通りです。(ゴールドコースト)

①原則:週単位、800ドル/週、6万円前後、2LDK(90m²)

②5週以上続けて借りる人には割引:週4万円前後

③ピークシーズン料金、クリスマス等2倍、イースター・夏休み1.5倍

④原則、家具、食器、家電品付

⑤電気、水道は料金に込み(日本ほど高くない)

6. 電話料金は別途(通常の1.5倍)

御参考に

蓼科での生活の案内、リロケーションの資料、充実しており感心した。十分だと思う。価格設定安いに越したことはないが致し方なしか。

マンスリー賃貸は利用者にとって極めて便利であり、より発展(賃貸戸数の拡大)を願っています。今回のお付き合い有難うございました。

4. 二地域居住コンシェルジュ運営マニュアル

都市部コンシェルジュ対応マニュアル

1. 都市部コンシェルジュの設置目的

都市部住民を地域に誘致する際、都市部での一元化されたリアルな窓口があれば利用者の利便性が向上するとの仮説に基づき、都市部コンシェルジュを設置する。仮説ならびに利用状況についてはモデル事業において検証する。なお、都市部コンシェルジュの設置期間はモデル事業開始から1ヶ月間限定となる。

2. 都市部コンシェルジュにおける対応

【ステップ1】利用者からコンシェルジュ窓口へのアクセス

利用者のアクセス方法としては①「店頭来訪」、②「電話」、③「FAX」、④「eメール」の4種類。

【ステップ2】利用者窓口対応

利用者への窓口対応としては、①「各地域への取次」、②「店頭でのモデル事業申し込み」、③「照会対応のみ」の3つ。利用者からのアクセスが電話、FAX、eメールの場合は、上記①、③のいずれかの対応となる。店頭来訪の場合のみ上記②の対応が発生する。

以下に各対応の流れを示す。

①「各地域への取次」

- 店頭来訪または電話でアクセスしてきた利用者が各地域でのモデル事業参加を希望する場合、コンシェルジュ側で所定の連絡箋に必要事項を記入した後、各地域への窓口当該連絡箋をFAX送信するか、あるいは当該連絡箋の記載内容を電話連絡する。
- FAXまたはeメールでアクセスしてきた利用者が各地域でのモデル事業参加を希望する場合、当該FAXまたはeメールを各地域への窓口へ転送する。
- 連絡を受けた各地域の窓口担当者は参加希望者に連絡、正式な申込み手続きを行う。

②「店頭でのモデル事業申し込み」

- 店頭へ直接来訪した利用者が各地域でのモデル事業参加を希望する場合、所定の申込用紙に必要事項を記入してもらった後、各地域への窓口へ電話連絡の後、当該申込用紙をFAX送信または郵送する。
- 連絡を受けた各地域の窓口担当者は参加希望者に連絡、申込み後のフォローを行う。

③「照会対応のみ」

- 店頭来訪、電話、FAX、eメールでアクセスしてきた利用者が各地域でのモデル事業の概要

(パンフレット記載内容)について照会を行う場合、コンシェルジュ窓口で対応を行う。

- 電話でアクセスしてきた利用者がパンフレット記載内容よりも詳しい内容について照会を行う場合、コンシェルジュ側で**所定の連絡箋に必要事項を記入**した後、各地域への窓口に当該連絡箋をFAX送信するか、あるいは当該連絡箋の記載・照会内容を電話連絡する。
- FAX または e メールでアクセスしてきた利用者がパンフレット記載内容よりも詳しい内容について照会を行う場合、当該FAX または e メールを各地域への窓口に転送する。
- 連絡を受けた各地域の窓口担当者は参加希望者に連絡、照会に対して回答する。

【ステップ3】利用者対応状況の記録

ステップ1～2の対応中あるいは対応終了後、コンシェルジュにおける利用者対応状況について、所定の「コンシェ対応記入票」に記録する(当該記入票は、本事業における成果物として日本総研にモデル事業終了後にまとめて提出する)。

【対応窓口】

	団体・会社名	担当者名(役職)	連絡先
都市部 コンシェル ジュ	(社)コミュニティ・ネットワーク協会	早田比呂美	〒104-0061
		(ふるさと情報センター)	東京都中央区銀座4-14-11 七十七ビル 3F
		小泉奉子 (常務理事・事務局長)	Tel: 03-3547-3882 Fax: 03-3547-3883 e-mail: tkoizumi@conet.or.jp
北海道	北海道庁企画振興部 地域づくり支援局 移住交流グループ	佐々木 迫田	Tel:011-204-5089 Fax: 011-232-1053 e-mail: sasaki.koji@pref.hokkaido.lg.jp Tel: 024-521-7287
福島県	福島県庁商工労働部観 光交流局観光交流課	吾妻嘉博 (主任主査)	Fax: 024-521-7888 e-mail: azuma_yoshihiro_01@pref.fukushima.jp
山梨県	山梨県庁 観光部観光振興課	萩原憲二 (課長補佐)	〒400-8501 甲府市丸の内 1-6-1 Tel: 055-223-1575 Fax: 055-223-1558 e-mail: hagihara-rpm@pref.yamanashi.lg.jp
		不在の場合は、 渡井宏之(主任) または 窪田洋二 (総括課長補佐)	
長野県	東急リノベーション(株)	伊藤	Tel:03-3476-1568

事務局 (株)日本総合研究所

遠田(インタ)
戸田

Fax: 03-3476-1240
e-mail: msh@tokyu-relocation.co.jp
〒102-0082

志水武史
(主任研究員)

東京都千代田区一番町 16
Tel: 03-3288-4635
Fax: 03-3288-6349
e-mail: shimizu.takeshi@jri.co.jp

二地域居住促進モデル事業 コンシェルジュ連絡箋	
送付日付	2008 年 月 日
宛 先 : 〒 様	
TEL : FAX	
送付元 : 〒104-0061 東京都中央区銀座 4-14-11 七十七ビル 3 階 社団法人コミュニティネットワーク協会(都市部コンシェルジュ) 担当者: e-mail : TEL : FAX :	
〔ご連絡内容〕 コンシェルジュで以下のお客様について対応いたしましたので、以後ご対応をお願いいたします。	
お客様名	
ご年齢	
ご住所	
ご連絡先	TEL : FAX : E メール:
コンシェルジュへのアクセス方法	①店頭来訪 ②電話
お客様のご要望	①モデル事業参加申込用紙送付 ②モデル事業詳細についての照会 ③その他()
お客様の希望連絡方法	①電話 ②FAX ③E メール ④郵送

5. 二地域居住マーケットセミナー資料

二地域居住マーケットセミナー ー二地域居住で広がる新たなビジネスチャンスー 報告資料

1. 当日のプログラム

○日時 2008年7月25日(金) 13:30～15:30

○場所 株式会社日本総合研究所 本社1階セミナールーム

○プログラム

【第Ⅰ部】二地域居住を巡る政策動向

1 ご挨拶

国土交通省国土計画局広域地方整備政策課 課長補佐 石和田 二郎 氏

2 国土交通省の政策

同上

3 二地域居住プラットフォーム構築支援事業

(1) モデル事業

日本総合研究所 主任研究員 志水 武史

(2) Web サイト構築

日本総合研究所 研究員 中山 紗央里

【第Ⅱ部】二地域居住ビジネスの成功要因

1 二地域居住を巡る市場環境

日本総合研究所 主任研究員 矢野 勝彦

2 二地域居住関連市場への事業展開

日本総合研究所 上席主任研究員 山本 精一

3 質疑応答

○配布資料(別添ご参照)

資料1 「二地域居住による地域活性化と市場創出について」説明資料

資料2 「モデル事業」説明資料

資料3 「二地域居住を巡る市場環境」説明資料

資料4 「二地域居住関連市場への事業展開」説明資料

2. 出席者

○当日の出席状況は以下のとおり。

一般	事前参加申込者数	96名	
	うち当日欠席者数	△16名	
	事前申込みのない参加者数	5名	
一般出席者計			85名
報道関係者		5名	
報道出席者計			5名
当日出席者計			90名

○出席者の属性は別添資料のとおり。

その傾向は以下のとおり。

- ・ 不動産関連会社 24名
- ・ 電鉄・運輸関連会社 7名
- ・ 住宅・建設会社 7名
- ・ 関係団体 7名
- ・ 自治体 6名
- ・ 調査・研究会社 6名
- ・ 旅行会社 3名
- ・ IT関連会社 3名
- ・ 報道関係 11名
- ・ 二地域居住関連事業者・NPO等 6名
- ・ 金融機関 1名
- ・ その他 9名

3. 発表概要

【第 I 部】二地域居住を巡る政策動向

1 ご挨拶

国土交通省国土計画局広域地方整備政策課 課長補佐 石和田 二郎 氏

- ・ 国土交通省では7月4日に新しい国土計画である「国土形成計画」が閣議決定された。これは昔の全総の流れを受けたものであるが、従来の開発重視型ではなく、今後は既存のものを活用した取り組みに全体的にシフトしていく内容となっている。
- ・ この国土形成計画においては、人口減少の中でどのようにして日本の活力を維持していくかが一番大きなポイントとなっている。
- ・ 本計画における地域間交流の活性化のひとつの大きなテーマとして、「二地域居住」があげられている。
- ・ これまでは U ターンなどの施策を進めてきたが、人口減少の中ですべての地域の人口を増加させるのは難しいため、二地域居住人口に着目するというのが今回の国土形成計画の考え方である。
- ・ 現時点ではまだ二地域居住についてあまり知られていないので、今回のセミナーを通じてみなさまに広く知ってもらいたい。

2 国土交通省の政策

同上

- ・ これまでの地域交流は「観光」が中心であったが、従来の観光は1回きり・短期で地域との関係も浅かったが、「Uターン」や「移住・定住」はその反対に位置するものである。
- ・ 今回の「二地域居住」とは、従来の観光と移住・定住の間にあるもので、ニューツーリズムのさらに延長上にあり、より地域に入り込んで地域に長く滞在してもらいたいイメージを目指している。
- ・ 特に団塊の世代などにおいて、週末菜園やクラインガルテンの人気が出てきているが、これは従来の観光とは違っており、毎週市民農園に出かけて行って農業体験をするような反復型のものである。また、健康増進、テレワーク、ワーキングホリデーなどをはじめとして、その他さまざまなライフスタイルが出てきている。
- ・ 実際に市町村単位で見ると、関東近辺でも二地域居住の取組が進んできている。東京在住の人をターゲットにして、100キロから200キロに位置する市町村において色々なタイプの滞在スタイルを提供しているのが関東圏の特徴である。また、関東のみならず、北は北海道から南は沖縄まで全国各地でこのような取り組みが広がってきている。
- ・ 国土交通省では二地域居住の促進や、UJI ターンの推進の支援を行っているが、共通することは地域づくりの担い手となる人材を確保することであり、それらの人を受け入れる受け皿づくりとなる住宅関連などをはじめとする環境整備も支援している。
- ・ 二地域居住の促進策として、昨年度から二地域居住に関する情報の発信（「二地域倶楽部」

HPの作成)や市場調査を行っており、今年度も引き続きHPの拡充に取り組んでいく。これから本格的に新しいライフスタイルとして定着させていくためには、民間企業の活動にも注力し、新しい商品開発など民間の柔軟な発想を取り入れながら市場を拡大させていくことが必要であると考えている。

- ・ 都市住民の定住・二地域居住に対する願望は、男性・女性ともに定住よりも二地域居住の希望者が多く、特に男性に田舎暮らしを望んでいる人が多い。女性は、本当の田舎暮らしに対する抵抗感は強いが、二地域居住のように都会に今までの人間関係を残したまま週末だけ田舎暮らしをしたいといった希望が表れている。
- ・ 年齢別に見ても、定住よりも二地域居住に対する希望のほうかどの年代でも多く、特に 50代・60代に多いという特徴がある。
- ・ 実際の二地域居住人口は、今年 1 月のアンケート調査では移住・定住実践者が2%、二地域居住実践者が2.4%という結果が出ており、人口としては2030年には1000万人を超えるという予測をしている。しかし、二地域居住に対する潜在的なニーズは多いものの、実際に行動に移す人数との間には大きなギャップがある。
- ・ 5年後の二地域居住の市場規模は8兆円と推計している。二地域居住はひとつのライフスタイルであるため、8兆円とは、それに関係する多岐にわたる産業(不動産市場、移動に関する市場等)の市場規模の総和である。
- ・ これまで国土交通省では二地域居住に関する情報収集を中心に取り組んできたが、今年度はモデル地域を選んで実践的に取り組んでいる内容を調査している。今後、引き続き、国としてどのような支援が可能かについての検討を行っていく予定である。

3 二地域居住プラットフォーム構築支援事業

(1) モデル事業

日本総合研究所 主任研究員 志水 武史

- ・ モデル事業の目的は二地域居住等を推進するため、官民協力して推進する体制を整え、国民に向けたPR等の普及啓発を図るとともに、地域の情報等を提供する総合情報プラットフォームの整備を進めることにある。総合情報プラットフォームの整備のほか、4つの地域で二地域居住促進に向けた実証実験を実施する。
- ・ 北海道事業モデルのポイントは、利用者の利便性向上や不動産等に関わる地域サービス等の開発につながる地元のランドオペレーター事業を、従来の市町村中心の事業モデルから純民間モデルに移行させることである。
- ・ 福島県事業モデルのポイントは、「食」体験を通じた二地域居住支援モデルの実施である。具体的には、農産物の地域飲食店への持ち込み調理や飲食店紹介サイトとの連携を通じて、二地域居住についてのモチベーションを向上させるとともに、地域飲食店の活性化、地域食材のブランド化につなげる。
- ・ 山梨県事業モデルのポイントは、二地域居住にかかる交通費の軽減や各種滞在サービス

の提供を通じて、二地域居住を促進させることである。交通費の軽減については、高速道路等の料金割引を想定している。

- ・ 長野県事業モデルのポイントは、二地域居住者を対象とした空き別荘の有効活用である。実証実験においては、別荘マンスリー賃貸モデルの事業性、別荘生活を二地域居住のライフスタイルとする人に対する地域との交流を生み出す仕組み等について検証する。

(2) Web サイト構築

日本総合研究所 研究員 中山 紗央里

(実際のWebページを提示しながら解説)

- ・ 総合情報プラットフォーム「二地域倶楽部」は、二地域居住を受け入れる地域と都市住民相互の情報交流を目指し、サイト形式をSNSとした。
- ・ 「二地域倶楽部」のコンセプトは2点で、「本物志向」と「網羅性」である。
- ・ 「本物志向」では「達人に聞く」という機能を設け、二地域居住に関する経験を豊富に持っている「達人」に質問できるようになっており、また、4つの事業地域ごとにコミュニティを立ち上げ、モデル事業の情報をリアルタイムで発信していく。
- ・ 「網羅性」では「田舎暮らしYouTube」や「田舎暮らしAmazon」、「研究フォーラム」など、このサイトを見れば田舎暮らし・二地域居住のすべてがわかるよう関連動画・書籍・研究を集めている。

【第Ⅱ部】二地域居住ビジネスの成功要因

1 二地域居住を巡る市場環境

日本総合研究所 主任研究員 矢野 勝彦

(1) 総論

- ・ 二地域居住の昨今のブームは、過去のシルバーコロンビア計画やリゾート法などの時と比べて、地方における危機感と団塊の世代を中心とした底堅い需要が大きく異なる。
- ・ 海外における二地域居住をみると、ロシアのダーチャが有名だが、バカンスが定着したEU諸国においても1970年代に都市への人口集中の是正からスタートしている。
- ・ 日本でも国や自治体が本格的に動き出した。根底にあるのは都市から地方への人口移動である。
- ・ 北海道ちょっと暮らしは平均20泊と超えている。これは観光ではない、国内ロングステイマーケット開花の兆しである。
- ・ しかし、現状、民間企業でリスクをとってまで本格展開に踏み込んでいる企業はない。
- ・ 会員制リゾートクラブビジネスをみると、タイムシェア型に対する潜在需要が大きい。国交省もその環境整備に向けて本格的な検討に入った。

(2) 今なぜ、二地域居住市場か？

- ・ 団塊マーケット分野といえば住生活分野、時間消費分野、健康分野だが、既存マーケットからのアプローチは多くの企業が試みて失敗している。従って、新しいトレンドから切り込む必要があるが、二地域居住市場はそのトリガーとなり得る。
- ・ ロジャーズのイノベーション普及理論によれば、二地域居住市場は変わり者だけがやっている時代は過ぎ、オピニオンリーダーが始めつつある段階にある。

(3) 二地域居住の市場動向

- ・ 二地域居住の阻害要因は金銭的余裕(住宅価格と移動価格)と時間的余裕である。
- ・ 住宅価格に対する需要の弾力性をみると、1,000万円以上の住宅について割引いた以上の需要創出効果がある。移動価格に対する需要の弾力性をみると、住宅価格ほど大きくないが、4万円以上する移動の価格について割引いた以上の需要創出効果がある。ただし、これは全国平均である。
- ・ 二地域居住に興味のある人は5～60歳代に集中しているが、3～40歳代でも少なからず興味を持っている。男性に比べて女性の関心度は総じて低い。
- ・ また、年収に応じて二地域居住に対する興味が強まる。
- ・ 二地域居住先の選定基準として、自然環境がよい、趣味が満喫できる、生活インフラ・交通アクセスが整っている、が上位にある。つまり、ブランド力のある観光資源を持たない地域でも十分可能である。
- ・ 二地域居住先で行いたい活動内容として、家庭菜園やガーデニング、健康増進、名所の散策などが上位にある。働くニーズや地域コミュニティとの交流も望まれている。
- ・ 二地域居住市場の中核は不動産市場となりそうである。山梨県でも長野県でも1,000万円

～2,000万円の物件が売れている。

(3) 二地域居住市場攻略のための5つのポイント

- ・ポイント1:個人利用者にとっての障壁(ハードル)を下げて、まず市場の顕在化を図る必要がある。この場合、市場が顕在化していない中～高所得のボリュームゾーンがターゲットになる。このボリュームゾーンのニーズに対応した商品・サービスの設計が必要である。その上で、需要の弾力性から価格設定と収益確保の均衡点を探る。
- ・ポイント2:BtoBビジネスでマスを押さえる必要がある。二地域居住市場は多様なライフスタイルの集合体であるため、企業の福利厚生・研修、OB会、県人会、地域の同人会、マンション住民など属性の近いマスを市場をとらえる。
- ・ポイント3:企業間の戦略的提携が必要である。従来の観光ではなく、生活とい切り口は多分野にまたがる(花びら型産業)。したがって、企業間の戦略提携は必須である。
- ・ポイント4:地域コミュニティの交流を重視する。別荘を買っても当初の利用頻度は月日とともに減っていく。人が来なくなると地域そのものの価値が落ちる。そこには地域との交流がない。地域に求められるのは二地域居住者の活動・活躍の場である。
- ・ポイント5:多様な手法で事業リスクをヘッジする。例えば、地方再生関連の国や自治体のモデル事業を活用する、利用者ニーズに合った規模の住宅を開発することでリスクを減らすコハウジング的手法を導入する、女性や子供(孫)市場への斬り込みによる収益基盤の拡充など。

2 二地域居住関連市場への事業展開

日本総合研究所 上席主任研究員 山本 精一

(1) 総論

- ・ 二地域居住の市場規模は、国交省の発表にあるように潜在的に大きな市場規模があるのは間違いなく、特に個人レベルで盛んになってきている田舎暮らしを中心とした二地域居住は、オピニオンリーダー層の居住が始まっている段階に達しており、この市場に対していかにアプローチするかが民間側の課題となっている。
- ・ 従来都市住民へのサービス提供を主要な事業ドメインとしてきた民間企業側から見ると、二地域居住関連の事業はアプローチのし難く、とらえにくい市場であるとも言える。しかし、都会での「職」の必要性が薄くなったシニア世代を中心に、都市から地方への流れが始まる可能性が高いので、民間事業者にとって、大きなビジネスチャンスが到来しているとも言える。
- ・ 民間事業者から二地域居住市場を見た場合、大きく2つの役割に分かれる。第一は地方の居住物件等を開発する不動産開発事業者、第二はそれらの二地域居住者に対するサービスを提供するサービス事業者である。
- ・ 地方での魅力ある居住物件に限られる中で、民間版クラインガルテン事業の事業展開可能性について、事業化の可能性を論じた。

(2) 二地域居住市場への取り組みの方向性

- ・ 二地域居住市場は、導入初期段階から既に普及離陸期に入ったと推測され、オピニオンリーダー層の居住が始まっている段階と考えられるが、情報収集面では情報の非対称性により、まだ二地域居住に関する情報を収集しようとする、多大な労力が掛る。
- ・ 二地域居住ライフスタイルの成功事例として、茨城県笠間市の「笠間クラインガルテン」が挙げられる。
- ・ 二地域居住市場に対する不動産開発事業を新規に行う場合、民間版クラインガルテン事業、別荘ライフ・タイムシェア事業及び体験型テーマパーク事業等が考えられるが、現在の市場環境等を勘案すると、民間版クラインガルテン事業が比較的取り組み易い事業と考えられる。

(3) 民間事業としての可能性

- ・ 民間版クラインガルテン事業を考える場合、様々な社会的な動向が、二地域居住に対するフォローの風となってきている。環境や食をキーワードとした民間版クラインガルテンの事業化の可能性があると考えられる。
- ・ 民間版クラインガルテン事業を含めた二地域居住市場をブレイクさせる3つのポイントは、①情報の入手容易性、②生活インフラの整備、③女性の共感を得る仕組み作り、であると考えられる。

3 質疑応答

- ・ 質疑応答なし。

(事務局より)

- ・ せっかくこのようなセミナーに 100 名近くの方に参加いただいたので、継続的な取組みを検討したい。国土交通省のモデル事業も進んでいくので、その経過報告の場も必要となるかも知れない。
- ・ 8 月には二地域居住のポータルサイトとして「二地域倶楽部」が立ち上がるので、その中で議論をしていっても良い。
- ・ このような活動を通じて、皆様と一緒に二地域居住マーケットが本物の市場として立ち上がるまで頑張りたい。

以上

6. 二地域居住等の施策の概要及び経緯(自治体)

【福島県】

I 促進施策検討の背景

1 問題認識(地域の抱えた課題)

- ・ 2007 年問題や田舎暮らし志向の高まり等を踏まえ、団塊の世代を中心とした大都市居住者等を戦略的に誘導し、定住・二地域居住を推進することにより、県内の地域コミュニティの担い手の確保や消費需要の拡大、雇用機会の創出等による地域振興を図ることが緊急の課題となっている。

2 二地域居住等に対する期待(課題解決の方向性)

- ・ 首都圏から距離的にも時間的にも比較的近く、広大な県土ゆえ多様なライフスタイルが可能。(ほとんど降雪のない温暖な浜通りから雪深い会津まで)多くの大都市居住者が求める自然や自然の恵みにも恵まれている。また、安全・安心の面でも全国トップレベルにあり、定住・二地域居住の最適地として捉えている。このような優位性をこれまで以上にアピールしながら、戦略的に定住・二地域居住者を誘致することを目指す。

II 促進施策の概要

1 検討段階

(1)検討の時期

- ・ 平成 18 年度から実施。

(2)検討の方法・体制

- ・ 定住・二地域居住に関する国や関係団体が実施した大都市居住者に対するニーズ調査の内容や、平成 18 年度に県の庁内会議で行った福島県への UI ターン者・受入者へのインタビュー調査を踏まえ、県として課題を整理。

(3)意思決定のプロセス

- ・ -

2 実施段階

(1)実施の時期

- ・ 平成 18 年度から、「定住・二地域居住拡大プロジェクト」を展開。平成 19 年には、事業名称を「ふくしま定住・二地域居住推進総合戦略事業」に改称し事業拡大、平成 20 年度には「ふるさと福島大交流プロジェクト」も加え施策の充実を図る。更に定住・二地域居住を推進している。

(2)促進施策の概要(目的・内容)

- ・ ~平成 18 年度「定住・二地域居住拡大プロジェクト」では、①PR・情報発信(福島県の魅力をアピールし、注意を喚起)、②東銀座に相談窓口設置、③市町村との連携(「定住・二地域居住拡大プロジェクト連携会議」の立ち上げ)を実施。

- ・ 平成 19 年度 「ふくしま定住・二地域居住推進総合戦略事業」を展開
 - ①受入体制の整備
 - 推進協議会の設置、民間受入団体(NPO 等)との連絡会議、受入団体研修会、全国移住・交流機構(仮称)への参加
 - ②PR・情報発信の更なる強化
 - 相談窓口の機能強化、雑誌を使った PR、福島県フェアの開催、知事を営業本部長とした情報提供活動や働きかけ
 - ③希望者などに対する誘導策
 - 「ふくしまファンクラブ」の運営、「ふくしまファンの集い」の開催
 - ・ 平成 20 年度 「ふるさと福島大交流プロジェクト」「ふくしま定住・二地域居住推進総合戦略事業」として以下の事業を実施(太字は平成 20 年度新規)
 - ①受入体制の整備
 - 地域貢献意欲の高い移住者の人材バンク設立、定住・二地域居住者と地域との橋渡し役を務める人々による「福島ふるさと暮らし案内人」制度**、移住者推進協議会の設置、民間受入団体(NPO 等)との連絡会議、受入団体研修会、全国移住・交流機構(仮称)への参加
 - ②PR・情報発信の更なる強化
 - 本県で二地域居住を実践している福留功男氏出演の TV 番組放映(素材は HP で配信するとともに DVD 化し相談窓口相談者に配布)、動画を多用した HP による情報発信(9 月末で 19 動画配信)**、相談窓口の機能強化、雑誌を使った PR
 - ③希望者などに対する誘導策
 - 「ふくしまファンクラブ」の運営、「ふるさとふくしま大交流フェア」の開催
- (3) 促進施策の実施体制(官・民の役割分担)
- ・ 定住・二地域居住推進の本県の特徴は、NPO 法人や市町村、民間事業者が草の根レベルの受入体制充実を図っているところにある。各種連携会議の開催はもちろんのこと、随時職員が NPO 法人等を訪問、実態調査と今後の課題等について意見交換を行っている。
 - ・ NPO 法人ふるさと回帰支援センター(@銀座)に委託し、福島県の総合相談窓口である「ふくしまふるさと暮らし情報センター」を開設。相談員を置いて、ふくしまでのふるさと暮らしに関するきめ細かい相談を実施。

Ⅲ 課題と展望

1 促進施策の課題

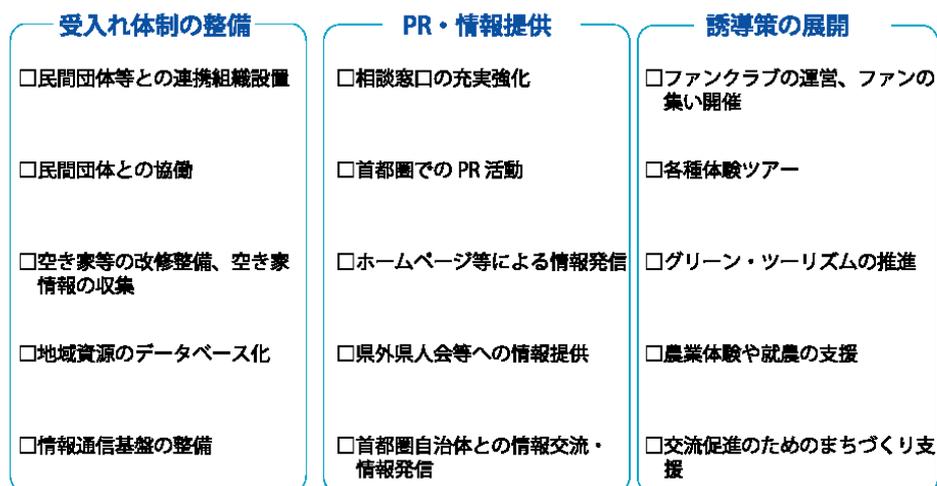
- ・ 団塊世代の大量退職、2007 年問題から施策の充実を図ったものの、地域づくりの担い手となっている定住・二地域居住者の多くは現役世代であることから、ターゲットを広い範囲に拡大した施策の充実が求められているところ。

2 促進施策の将来展望

- ・ 今まで推進してきた取組みに加え、ターゲットを現役世代に広げ施策の充実を図る。例えば、地域に根ざしたニューツーリズムのガイドの多くは移住者であるが、福島県ツーリズムガイド連絡協議会(詳細は HP 参照)に委託したワーキングホリデイの実施等を検討している。本県の豊かな自然を体感しながら、移住の先達者による生の声を聞くことは、現役世代における定住・二地域居住の大きな推進力になり得ると考える。

(参考資料)「ふくしま定住・二地域居住推進アクションプラン」(平成19年6月18日策定)

定住・二地域居住関係の事業体系図



【茨城県】

I 促進施策検討の背景

1 問題意識（地域の抱えた問題）

- ・ 少子化の影響により我が国の人口が減少に転じ、急速な高齢化が進む中、茨城県においても、過疎地域が集中する県北部地域において、県全体の数値を上回る人口減少、高齢化の進行が見られ、地域コミュニティの弱体化や、地場産業の衰退など、社会・経済に対する影響が懸念された。
- ・ 一方で、茨城県北部地域は、東京から100～150km、車で2時間半程度という近さにありながら、変化に富んだ海岸線や清流、滝、里山など多様な自然にあふれ、自然体験や農林漁業体験など、豊富な体験交流の機会を提供することができる地域であり、こうした地域の優位性を活用した地域振興方策が求められていた。
- ・ 人々の価値観が多様化し、特に都市在住の団塊世代を中心に、定年退職を契機にセカンドライフを自然豊かな地方で過ごしたいというニーズが高まりつつあるのを受け、茨城県では、団塊世代の大量退職期を控えた平成18年度に策定した新茨城県総合計画「元氣いばらき戦略プラン」において、新たなライフスタイルの発信による交流・二地域居住、定住の促進を位置付けた。

2 二地域居住に対する期待（問題解決の方向性）

- ・ 交流・二地域居住人口の拡大により、地域コミュニティの担い手の確保、消費需要や雇用機会の創出とともに、定住人口の拡大に繋がることを期待。

II 促進施策の概要

1 検討段階

(1) 検討の時期

- ・ 「茨城県における二地域居住の促進に関する調査（H17年度）」、「都市とFIT地域の交流・二地域居住促進検討会（H17.10～H18.5）」などにおける検討を背景に、平成18年度から、茨城県北部地域における新たなライフスタイルの発信による交流・二地域居住、定住の促進に向けた本格的な検討を開始。
- ・ 平成18年9月に“いばらき さとやま生活”のネーミングを決定し、その後、情報発信や交流・二地域居住希望者の受入体制の整備について、茨城県が“いばらき さとやま生活”支援システム研究会」を立ち上げ、検討。

(2) 検討の方法・体制

- ・ 「いばらき さとやま生活”支援システム研究会」では、茨城県が事務局となり、県庁内関係各課、(財)グリーンふるさと振興機構、関係市町のほか、学識経験者、民間企業、地域づくり団体等が参加。

(3) 意思決定のプロセス

- ・ 茨城県として、新たなライフスタイル“いばらき さとやま生活”の統一的な情報発

信による認知度向上，ブランドイメージ構築に取り組むこととした。

- ・ また，県や北部地域の市町等が出資する(財)グリーンふるさと振興機構の中期計画(H18～H22)においても，「グリーンツーリズムの推進」「交流居住の推進」を事業の柱と位置付け，体験ツアーや「お試し田舎暮らし住居」の実施，相談窓口や空き家情報バンクなどの機能を担い，県と一体となって交流・二地域居住，定住の促進に取り組むこととした。

2 実施段階

(1) 実施の時期

- ・ 県では，平成18年度に「県北からの新たなライフスタイル発信事業」，平成19年度から「いばらきさとやま生活発信事業」を実施
- ・ (財)グリーンふるさと振興機構では，平成18年度から上記中期計画に基づく事業を開始。

(2) 促進施策の概要(目的・内容)

- ・ 情報発信(県事業)
 - ①専用HP及びブログの開設・運営
 - ②ロゴマークの公募・決定
 - ③首都圏を主なターゲットとした各種メディア等を活用したPRの実施(テレビ・雑誌・新聞・WEB等各種メディアでの広告掲載，首都圏におけるイベントへの出展など)
 - ④地域ファンクラブ(“いばらきさとやま生活”倶楽部)の組織化
- ・ 受入体制整備((財)グリーンふるさと振興機構事業)
 - ①地域を知ってもらうため，観光と体験を盛込んだ日帰り・一泊の体験ツアー実施
 - ②地域団体等との連携による体験プログラムの提供「いばらきさとやま楽校(がっこう)」
 - ③1～3か月間，里山での生活を体験できる「お試し田舎暮らし住居」の整備・運営
 - ④「田舎暮らし相談窓口」の開設・運営
 - ⑤地域で移住後の相談対応，生活支援を行う「田舎暮らしサポーター」制度の開設・運営
 - ⑥「空き家情報バンク」の運営・情報提供
- ・ 移住・交流関連ビジネスの創出
 - ①“いばらきさとやま生活”推進会議におけるビジネス創出に向けた取組(県事業)
 - ②“いばらきさとやま生活”ポイントカード事業の実施

(3) 促進施策の実施体制(官・民の役割分担)

- ・ 県が新たなライフスタイルの認知度向上とブランドイメージ構築に取り組む一方、(財)グリーンふるさと振興機構において、受入体制整備の役割を担う。
- ・ さらに平成19年7月、県、(財)グリーンふるさと振興機構、関係市町、民間企業・団体を構成員とする官民連携の推進体制「“いばらき さとやま生活” 推進会議」を設立し、官民連携による新たな移住・交流関連ビジネス創出を図っている。

III 課題と展望

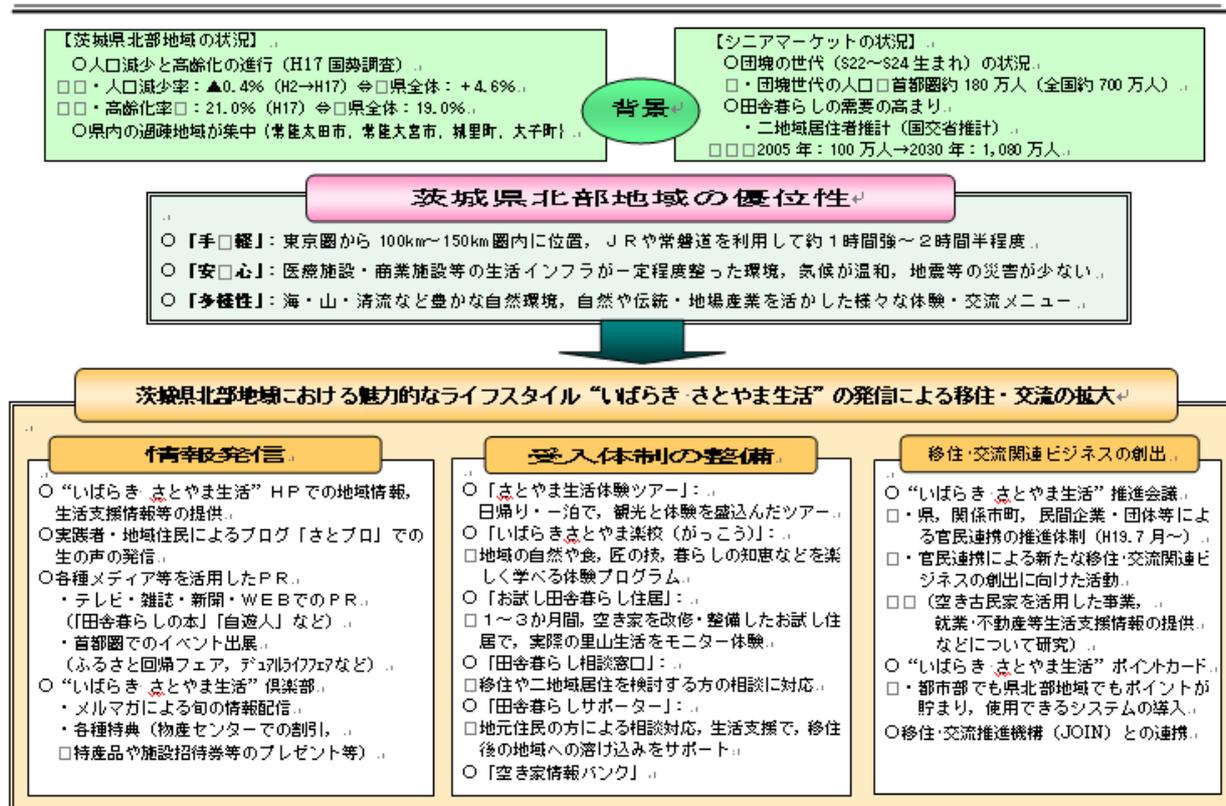
1 促進施策の課題

- ・ 団塊世代だけでなく、子ども(若年層)や現役世代など、幅広い年齢層を誘引するための効果的な情報発信手法の確立、受入体制の整備
- ・ 移住や交流・二地域居住関連の新たなビジネスモデルの構築(成功事例の創出)

2 促進施策の将来展望

- ・ 引き続き、首都圏を中心に若年層にも効果的にアピールできる情報発信を行う。
- ・ 体験型教育旅行の誘致・拡大のため、受入体制の整備を図るとともに、教育関係者や旅行者などへの働きかけを行う。
- ・ 窓口機能の充実。特に、現役世代の移住・二地域居住希望者のニーズに即した、「職」「医療・福祉」などの生活支援情報を提供するための仕組みの構築。

茨城県の移住・交流施策(“いばらき さとやま生活”)の概要



【長野県】

I 促進施策検討の背景

1 問題認識(地域の抱えた課題)

- ・ 少子化、高齢化、都市部への人口流出などにより、過疎化が進んでいる農山村地域もあり、コミュニティにおける活力の低下など、長野県内の社会・経済に対する影響が懸念されている。

2 二地域居住等に対する期待(課題解決の方向性)

- ・ 過疎化、少子化、高齢化の進んだ地域において、「交流居住」や最終形態とも言える「移住」が、農山村地域の人口減少に係る諸課題の解決に寄与することが期待される。また、観光や農業体験などの一時滞在から二地域居住や移住まで、長野県で“田舎暮らし”を希望する「団塊の世代」をはじめとする多くの都市圏生活者を、官民が一体となって長野県に誘引し、都市と農村との交流を促進することで、地域の活性化と全国の長野県ファン(応援者)の増加を図ることが期待できる。

II 促進施策の概要

1 検討段階

(1) 検討の時期

- ・ 「信州アジール構想」(H15.12 策定)をもとに、有志町村と県とで検討を開始。

(2) 検討の方法・体制

- ・ 長野県庁が中心となり、アジール構想の作成に際して参加した7町村と共に検討会を設置し、検討を開始。その後の具体的な実施については、検討会参加町村を核にその他の県内市町村を取り込みながら実施。

(3) 意思決定のプロセス

- ・ 長野県が中心となり、事業目標を、『都市圏生活者が憧れるような、より効果的な情報発信』と、『住民参加型の地域振興策づくりの機運の醸成』とし、事業を展開。

2 実施段階

(1) 実施の時期

- ・ 平成18年度から「田舎暮らし「楽園信州」創造事業」を本格化。

(2) 促進施策の概要(目的・内容)

<平成18年度>

○田舎暮らし「楽園信州」推進協議会の設立

(1) 設立:平成18年10月25日

(2) 構成団体数:設立時21団体(うち17市町村) 現在41団体(うち35市町村)

(3) 事務局:(社)信州・長野県観光協会 (19年度以降 県観光振興課)

○県外への情報発信:協議会参加市町村の専用HP開設

○長野県田舎暮らし案内人設置:移住ワンストップ窓口

<平成19年度>

- 県外への情報発信: 首都圏等各種プロモーション(田舎暮らしセミナー・相談会)等
- 全国レベルでの対応: JOIN に加入など

(3) 促進施策の実施体制(官・民の役割分担)

- ・ 長野県、市町村及び民間から構成される、田舎暮らし「楽園信州」推進協議会において情報交換を行なうとともに、都市生活者に向けてそれぞれの立場で、長野県のPR活動を実施。

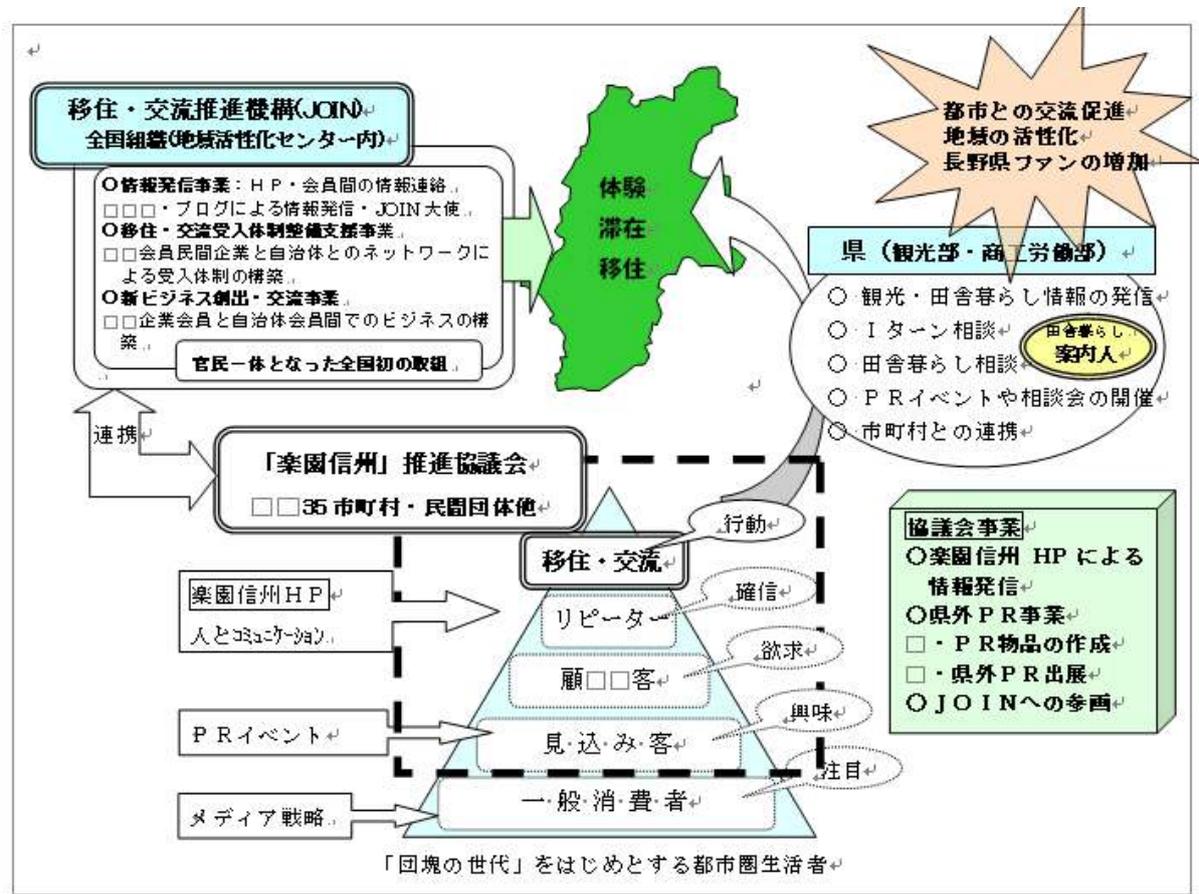
III 課題と展望

1 促進施策の課題

- ・ 効果的な都市圏生活者に向けてのPR活動。
- ・ 「田舎暮らし楽園信州」のブランドイメージの強化。

2 促進施策の将来展望

- ・ 都市圏生活者に効果的なアピールができる情報発信を引き続き行なう。
- ・ 都市圏生活者のニーズが多様であり、各市町村における地域資源も多様であることから、マッチングができるような情報提供の仕組みの確立。



【広島県】

I 促進施策検討の背景

1 問題認識(地域の抱えた課題)

- ・ 広島県の人口は、平成 10 年をピークに減少局面に転じ、平成 17 年には戦後初の自然減を経験。
- ・ 特に、中山間地域の人口は、昭和 35 年以降一貫して減少、高齢化率も急速に高まり、農林水産業の衰退など地域の活力が低下。

2 二地域居住等に対する期待(課題解決の方向性)

- ・ 二地域居住等の促進により、人口減少下にあっても生活関連サービスが維持され、自主的・自立的に個性ある地域づくりが展開され、さらに、中山間地域においては、経済活動が活発化することにより、地域の活性化を期待。

II 促進施策の概要

1 検討段階

(1) 検討の時期

- ・ 平成 18 年度からの県の総合計画において、「新たな交流・定住の促進」を重点施策と位置付け、担当室(交流定住促進室)を新設し、二地域居住等を促進する取組みを開始。

(2) 検討の方法・体制

- ・ 広島県主導により検討する体制。平成 18 年 5 月に、県内全 23 市町村と関係民間団体 12 団体等及び県の合計 36 団体(現在、民間団体が 1 団体、計 37 団体)による「広島県交流・定住促進協議会」を立ち上げ、官民一体となった取組みがスタート。

(3) 意思決定のプロセス

- ・ 平成 18 年に三大都市圏の県人会の会員及びその配偶者にアンケート調査を行った結果、回答者のうち、30 歳代から 50 歳代を中心に、約 4 割が広島県に「帰ってきたい」「住んでみたい」意向であることが判明(移住先については、男性は農山漁村、女性は利便性の高い都市を希望する傾向)。
- ・ これを受けて、上記の「広島県交流・定住促進協議会」で、受入体制の整備、マーケティング・広報戦略の 2 つの柱を中心に議論を重ね、具体的な取組みの骨子を平成 19 年 3 月に最終報告としてとりまとめた。

2 実施段階

(1) 実施の時期

- ・ 平成 18 年度から「広島暮らし」事業を本格化。

(2) 促進施策の概要(目的・内容)

《地域の啓発》

- ・ 交流・定住施策への理解を促進し、地域での受入体制の構築を目指し、自治会の代表者や実践者を交えた車座談義を各地で開催。

- ・ 全県を対象としたフォーラムを開催し、気運醸成。

《相談体制》

- ・ 県内全市町に相談窓口を設置。を相談対応の担当者を明確化。
- ・ 平成 19 年度からは、無料電話相談、大都市圏での相談窓口「広島暮らしサポートデスク」を設置。

《広報活動》

- ・ 平成 18 年 12 月には広島県交流定住ポータルサイト「広島暮らし」を開設。
- ・ 首都圏や関西圏で開催される定住フェアへの出展。
- ・ 広島県独自、中国四国共同の PR イベントを開催。

《誘致活動》

- ・ 広島県の魅力を理解してもらうことを目的に1週間程度の滞在をしてもらう「ロングステイ型観光」の事業を開始。
- ・ 数週間から数ヶ月の体験滞在が可能な「お試し暮らし用住宅」を提供。

(3) 促進施策の実施体制(官・民の役割分担)

- ・ 上記の「広島県交流・定住促進協議会」が引き続き、事業展開の中心を担う。
- ・ 平成 18 年 9 月、広島県が県内不動産関係2団体と包括協定を締結し、住まいに関する物件情報を充実。ポータルサイト「広島暮らし」と不動産関係団体の物件データベースをリンクし、県内全域の物件情報を閲覧、検索可能に。
- ・ 平成 19 年 2 月、広島県が広島経済同友会と包括協定を締結し、移住ビジネスに取り組む会員企業で「ひろしま暮らし支え隊」を結成、住み替えや観光・就農など必要な情報提供や相談対応を実施。PR面でも連携を強化。

III 課題と展望

1 促進施策の課題

- ・ 定年退職により生活にゆとりが生じると思われていた団塊の世代の動きが鈍い。
- ・ 地域側にも、都市住民に魅力的な受入体制を整えることができていない。
- ・ 受入の主体となることが期待される住民自治組織等が、積極的に取組むようになるには時間を要する。
- ・ 特に、二地域居住等で活用する空き家の流動化には、障害が多く残っている。
- ・ 依然、民間の採算ベースに乗るには市場が小さく、事業の可能性を探っている状態。

2 促進施策の将来展望

- ・ グリーンツーリズムなど都市と農山漁村の交流事業を展開している地域はあり、この地域の活動の充実を支援し、二地域居住等の取組みに発展を促すことが必要と考える。
- ・ そのため、農山漁村の魅力を発信し、都市住民と地域とのマッチングを図るビジネスモデルを確立し、民間ベースでの展開を推進する。

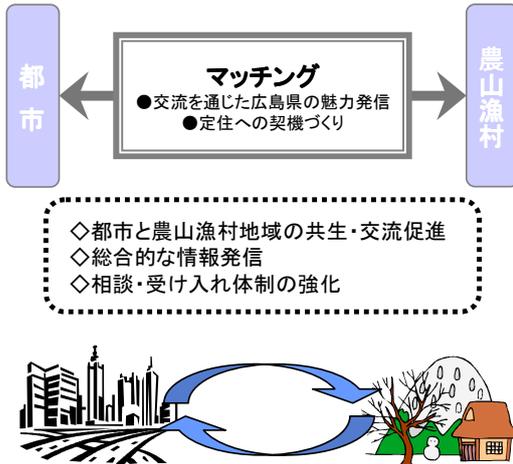
広島県における新たな交流・定住の促進

— 交流・定住促進事業の戦略的な展開 —

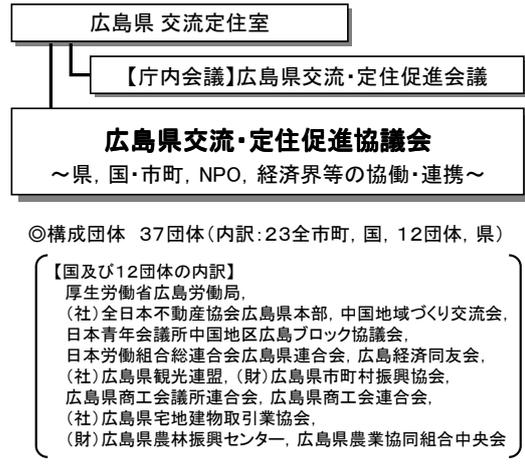
目標

交流・定住人口の拡大

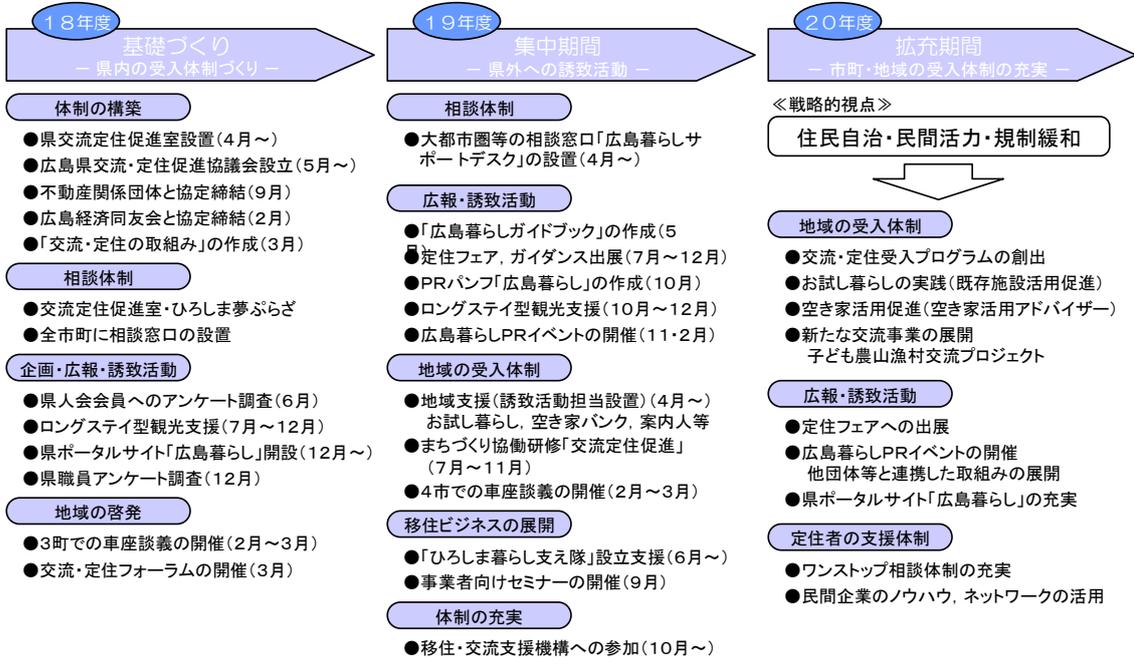
取組みの方向



推進体制



事業展開



【島根県】

I 促進施策検討の背景

1 問題認識（地域の抱えた課題）

- ・ 本県の大半を占める中山間地域においては、急速な人口・世帯の減少や高齢化の帰結として、集落機能や集落自体の維持が困難になりつつある。
 - ・ 平成4年度を境に県人口の自然動態が減少に転じたことへの危機意識から、この年を「人口定住元年」と位置付け、本格的に定住施策に取り組み始めた。この年の9月には「財団法人ふるさと島根定住財団（以下、「定住財団」と言う）」を設立し、UIターン支援や定住促進等に取り組んでいる。
- #### 2 二地域居住等に対する期待（課題解決の方向性）
- ・ 交流・二地域居住人口の拡大、定住人口の確保によってもたらされる地域活力の維持及び地域活性化への期待は大きい。

II 促進施策の概要

1 検討段階

（1）検討の時期

- ・ 県人口の自然動態が減少に転じた平成4年度から検討を開始。

（2）検討の方法・体制

- ・ 平成4年度に設立した定住財団を中心にして、随時、対策を検討
- ・ 平成17年度、平成19年度の2回にわたり、UIターンを呼びかける「知事からの手紙」を送付。アンケートを同封し、UIターンへの意向調査等を併せて実施。
- ・ 県、市町村、民間企業、団体、NPO等による「島根県交流・定住推進協議会」において連携体制を検討。

（3）意思決定のプロセス

- ・ 定住財団事業を通じたUIターン希望者のニーズ把握による対応
- ・ 「知事からの手紙」アンケート結果に基づき、新たな方策を検討、実施
- ・ 「島根県交流・定住推進協議会」専門部会による取組の方向性検討

2 実施段階

（1）実施の時期

平成4年 「定住財団」設立

平成8年 UIターン誘導施策（産業体験ほか）を開始

平成17年 知事からの手紙第1弾

平成18年 島根暮らしUIターン支援事業（無料職業紹介ほか）開始

平成19年 知事からの手紙第2弾

（2）促進施策の概要（目的・内容）

- ・ 総合相談窓口：定住財団を総合相談窓口として専任職員を配置

- ・ しまね学生登録：県出身学生に登録してもらい、就職・Uターン情報を提供
 - ・ しまね暮らし体験事業：島根での暮らし体験・見学ツアーの企画実施に係る費用を助成
 - ・ U I ターンのためのしまねの産業体験事業：
 - 農林水産業等を体験（期間3ヶ月以上1年以内）する場合、体験に係る費用を助成
 - 体験者本人 月5万円（家族がある場合等による加算有）
 - 体験受入先 月2万円
 - ・ 無料職業紹介事業：
 - U I ターン者の受け入れを希望する県内企業とU I ターン希望者のマッチングを実施
 - ・ 住宅情報提供事業：（財）島根県建築住宅センターを窓口に住宅に関する相談に対応
 - ・ 農林業等基礎講座事業：農業大学校、中山間地域研究センターでの初心者向け講習実施
 - ・ 「知事からの手紙」送付：出身者へUターンを呼びかけることを目的に実施
 - ・ 受入体制強化事業：
 - 総務省が進める移住・交流推進事業と連携しながら、県内の受入体制を強化（H19）
 - 市町村・関係企業、団体・NPO等が一体となった推進組織「島根県交流・定住推進協議会」を設立（H19）
 - 専門部会モデル事業の実施（H20）
 - 吉賀町・知夫村 「滞在型ボランティアによる都市農村交流の推進」外2件
- (3) 促進施策の実施体制（官・民の役割分担）
- ・ 定住財団が実施するU I ターン推進施策が中心。
 - ・ 「島根県交流・定住推進協議会」において、県、市町村、民間団体等における情報の共有化、連携体制の構築を図る。

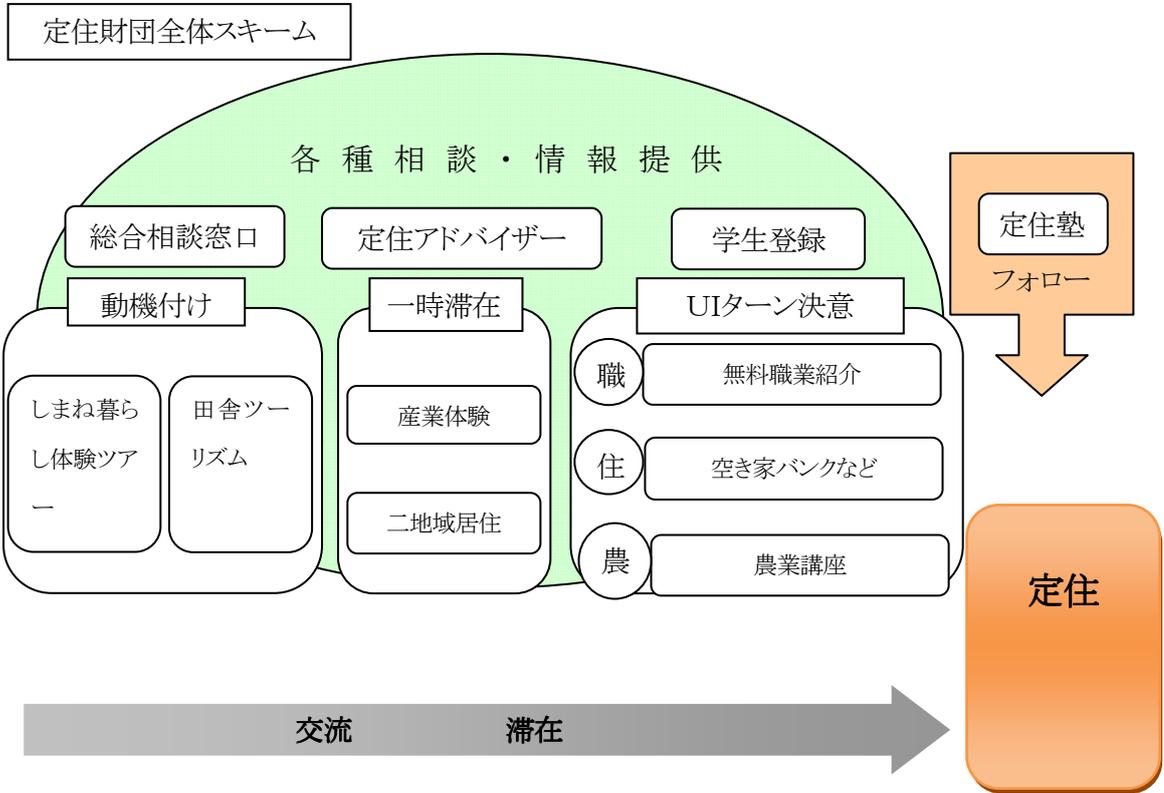
III 課題と展望

1 促進施策の課題

- ・ 島根県では、いち早く人口減少に転じたこともあり、促進施策に早くから取り組んできたものの、全国的に人口減少に転じた平成17年以降、団塊世代の大量退職、2007年問題を契機として、各自治体間の競争が激化していることもあり、より効果的な施策展開が求められる。
- ・ 「知事からの手紙」のアンケート調査により若年層のU I ターン志向も確認されており、この層をターゲットにした更なる対策が必要。
- ・ 県、市町村、民間やJOIN（移住・交流推進機構）との更なる連携強化。

2 促進施策の将来展望

- ・ U I ターン施策に対する市町村の取組を強化し「オール島根」としての競争力向上
- ・ 若年者層に対する学生登録・無料職業紹介などの取組強化
- ・ 都市農村交流や二地域居住など多様な形でのふるさと回帰の促進



【熊本県】

I 促進施策検討の背景

1 問題認識(地域の抱えた課題)

- ・熊本市等の都市部では、核家族化や住民の流動化が進む中、地域の求心力が失われ、支えあう力が弱まりつつある。一方、地方では、少子高齢化が進み、地域の担い手が減少し、自治力を維持していくことに苦慮している。

2 二地域居住等に対する期待(課題解決の方向性)

- ・九州新幹線の全線開業がもたらす効果が熊本県下全域に及ぶように、官民のパートナーシップの下、「新幹線くまもと創り」を展開しており、これらの一つとして、移住・定住促進に取り組んでいる。ショートステイやロングステイ等のツーリズムから二地域居住、そして定住につなげることで都市と農村との交流拡大による地域の活性化が図れる。

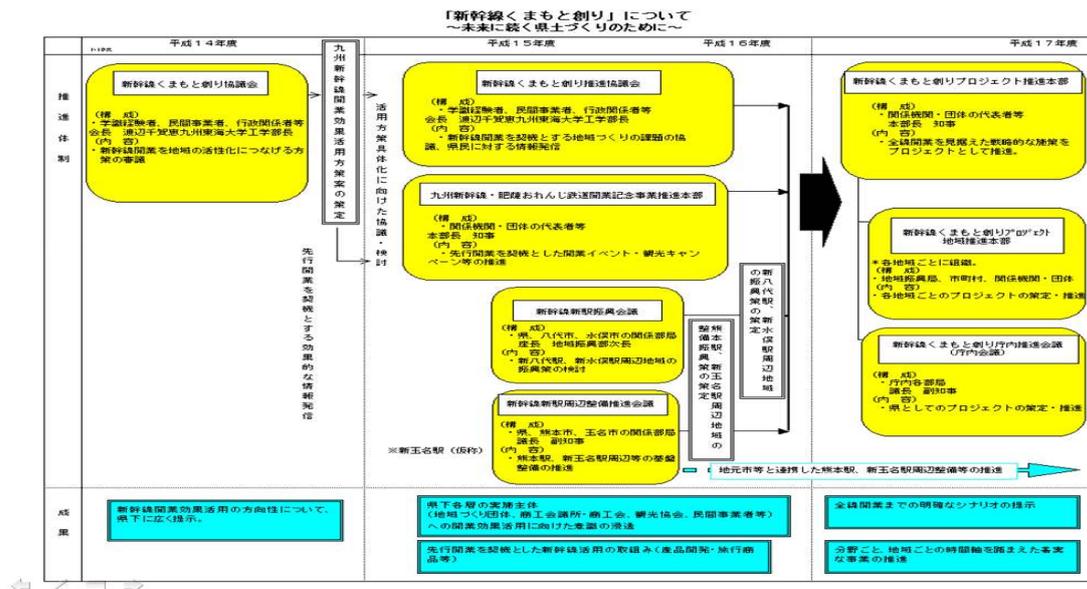
II 促進施策の概要

1 検討段階

(1) 検討の時期

- ・九州新幹線全線開業により博多から熊本までは 35 分、関西圏からは約 3 時間弱で結ばれるという時間短縮効果により、商圏の飛躍的な拡大や、観光客をはじめとした交流人口の増加が期待される。そのため、先行開業を見据えて設置していたこれまでの「新幹線くまもと創り推進協議会」(平成14年度設置)や「新幹線新駅振興会議」(平成15年度設置)等の組織を再編統合し、新たに全線開業に向けた取組みを推進するため、県内各界から参画をいただき、平成17年に「新幹線くまもと創りプロジェクト推進本部」を設置した。

(2) 検討の方法・体制



(3) 意思決定のプロセス

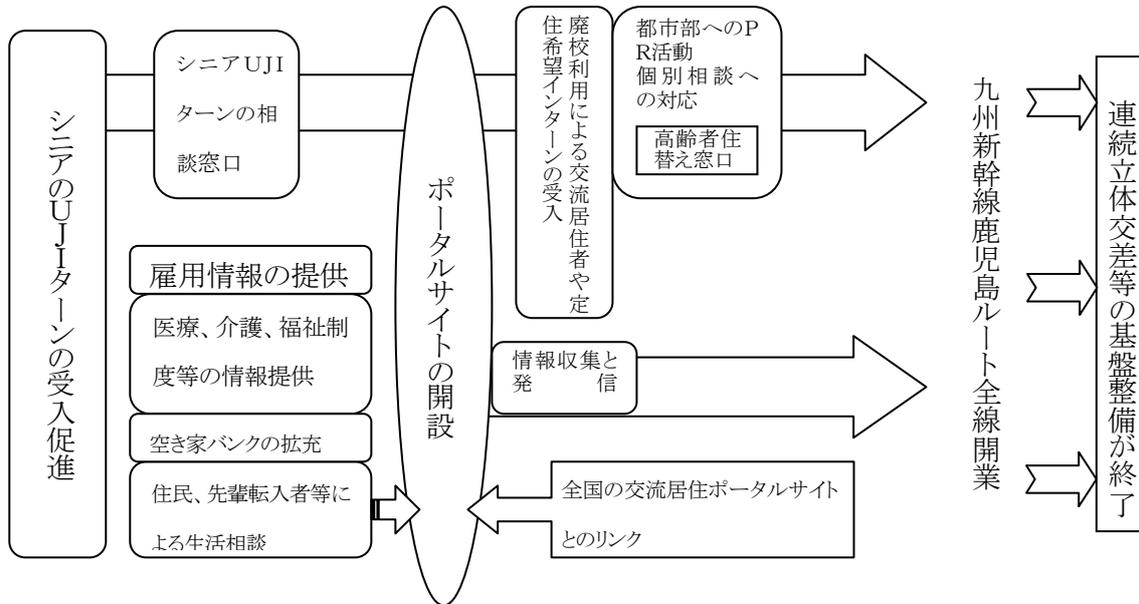
- ・推進本部会議において、県下全域で取り組むべき戦略や事項について議論を行い、実施す

る。

2 実施段階

(1) 実施の時期

H17年度 H18年度 H19年度 H20年度 H21年度 H22年度 H23年度～



(2) 促進施策の概要(目的・内容)

「定住（移住・交流居住）促進連携会議の設置(平成18年11月)」

- ・県と市町村の役割分担と連携による具体的な施策の実施を進めながら、継続的に定住促進等に取り組む。

「熊本県定住ポータルサイト」の開設(平成19年6月)

- ・熊本県内の移住・定住関係の情報を集約し、情報を発信している。

くまもとツーリズム・定住促進シンポジウムの開催(平成20年3月)

- ・ツーリズムから二地域居住、定住へつなげるため、ツーリズム関係者や地域づくり団体、市町村等を対象とし、くまもとツーリズムの確立に向けたガイドラインの策定や、移住・定住をテーマとしたパネルディスカッション等を通じて連携を深め、受入側としての機運を醸成することにより、ツーリズムから移住・定住へつなげることを目的に開催。

「熊本暮らし本(定住PRパンフレット)」の作成配布(平成20年3月)

- ・県内へ移住された方々の体験談を初め、県内の生活情報や市町村の定住支援制度等を掲載し、県外の方々へ配布。

「JOIN(移住・交流推進機構)地方交流会」の開催(平成20年8月)

- ・JOIN主催による地方交流会を熊本県において開催し、地域づくり団体や市町村等に参加いただき、県内の受入体制の整備を図った。

定住フェアへの参加及び実施

- ・認定NPO法人ふるさと回帰支援センター主催による「ふるさと回帰フェア(東京・大阪)」に参加し、都市住民の方々の定住相談に応じた。
- ・九州新幹線全線開業を見据え、福岡都市圏にお住まいの方々をターゲットとし、福岡市内で熊本県単独の定住フェアを開催し、定住の促進を図る。

(3) 促進施策の実施体制(官・民の役割分担)

- ・県と市町村の役割と連携による具体的な施策の実施を進めながら、継続的に定住促進等に取り組むため、定住(移住・交流居住)促進連携会議を設置(平成18年11月)

Ⅲ 課題と展望

1 促進施策の課題

- ・定住ポータルサイトにより、県内の定住情報を発信しているが、市町村によって移住・定住の取り組みに温度差があり、情報の充実化が図られていない。また、移住する前に地域を知っていただくために必要な「ツーリズム体験」の受入体制の整備が十分に整っていない。

2 促進施策の将来展望

- ・九州新幹線全線開業に向けてこれまで取り組んできた「新幹線くまもと創り」の成果を踏まえ、全線開業に焦点を絞り、取り組みを加速するために新たに策定された「新幹線元年戦略」の一環として、福岡都市圏等を見据えた定住・移住の促進するため、新幹線の高速性、時間短縮効果を生かし、「住みやすい熊本」の今まで以上に充実した定住情報を発信し、受入体制の強化を図る。

<参考>

【熊本県内における二地域居住の取り組み状況】

◎NPO法人グリーンライフあまくさ

- ・福岡都市圏在住者をターゲットとし“天草で暮らそう”体験ツアーを実施。
- ・天草暮らしを考えている方に短期宿泊施設「体験の宿(クラインガルデン)」を5棟建設中。
※平成21年1月～2月より入居者募集開始。同年3月完成予定で、4月より入居開始。

◎球磨郡山江村

・都市部で生活する方にやすらぎと潤いの場を与え、農業体験や農村生活によって生まれる地域との交流を通じて、豊かなライフスタイルの実現を目指し、地域の活性化を図るため“クラインガルデン「ほたるの荘」”を3棟建設。